

レマン湖 永遠に

江戸時代なら大年増呼ばわりされる歳 になった編集者・百合子は、身もころも燃焼し切れていないのではないかと感じている。人と人との関わりの機微がわからないわけではない。

母の店の客のひとり・吉田に案内を依頼したハケ岳の横岳山頂で、百合子はふと開眼する。

百合子は、スイス・アルプスの麓、ハイジが出てきそうな丘に小花があふれた、小さな村の民宿のようなホテルで、吉田を待った――。

インターラーケン

飛行機は、滑るように飛び続けている。本を膝に置いた百合子は、少し倒したバックシートに身を任せていた。夢の入り口あたりを行きつ戻りつしている。近くに微かな人の気配がして、ふと瞼を開けると、スチューワースがおしぼりを客へ配っていた。



まもなくアルプスの上空にかかるので、気流の関係で揺れるかも知れないから、ベルトを確認するよう案内があった。三力国語で話され、最後の英語でそう解った。もう何回も機内案内があるので、最後が英語ということわかっていて。そこに注意を集中すれば良かった。

窓から外に目をやると、眼下には白銀の雪に覆われたスイス・アルプスの山々が、雲ひとつない紺碧の空にむかって、上を競うように聳えている。

多分、それぞれの山々には、百合子でも知っているスイス・アルプスの名前がついているのだろう。吉田がいっしょなら、指をさして山の名前を教えてくれるに違いない。

写真集などでは、山の下から山頂を仰ぎ見るような角度のものが多く。冠雪して太陽に輝くスイス・アルプスの神々しく見える山々を、上から「眺める」という非日常的な見方が、

何かおこがましく感じられる。百合子は思わず背筋を伸ばしてしまった。

チューリッヒ空港は、日本やアメリカの空港に比べると、明かりがやや暗い感じがする。せかせかしない落ち着いた雰囲気、心なしか人の数も少ない。案内板が少ないようにも思える。荷物をターンテーブルから引き取った百合子は、さて、鉄道の駅はどちらへ行つたものか、しばし思案してしまふ。

ええいっ！ 度胸度胸」

と、百合子は通りかかった空港職員らしき初老の男に声をかけた。

あの、鉄道の駅はどちらですか？」

？？」

鉄道、鉄道です！」

そういいながら百合子は、空いている手のひらをわき腹のあたりで無意識に回した。今時分、蒸気機関車が走っている訳はないが、自然に出た仕草であった。百合子は英語を上手には使えないが、買い物や道聞きの片言くらいは、若い女性がよく行くアメリカのいくつかの観光地で使ったことがある。英会話の勉強も若干はした。

困惑顔だった初老の男は、百合子が手をまわすのを見て、大きな笑顔を作った。

あっちだよ」

といわんばかりに太い指先で建物のずっと向こうを指した。

あつ、解りました。ありがとうございます」

ビッテシェン」

と。」

男は、荷車を押しながら足早に去っていった。

そうか、ここはチューリッヒだ。ドイツ語圏内であると書いてあった案内書の説明を、身をもって」体験したのである。空港施設の、接客の部署にいる職員なら英語でも全然問題ないのだろうが、現業部門の職員は現地語しか話さないのは、どこの国でも同じこと

であろう。百合子は納得した。山縣なら、さぞかし爽やかなドイツ語で聞き出したことだろう、と思った。

百合子は、海外へは観光でグループ旅行しかしたことがなかった。しかし、今回のようにひとりだと、何から何まで自分でしなくてはならない。無事に目的地までいけるだろうか。しかし、もう、スイス国内である。治安はいいと聞いてきた。何とかなるだろう。百合子は覚悟を決めた。

チューリッヒからインターシティと呼ばれる国際列車に乗って、首都ベルンで南へ大きく曲がる。しばらくすると、列車は、トゥーン湖を左手に見ながら孤を描くように進む。エメラルド・グリーン湖の湖面に目が吸い込まれそうである。線路際まで迫ってきている水は、清冽に澄んで、浅い湖底が見える。大小の魚が、まるで水槽の中を泳いでいるようだ。

湖岸のなだらかな丘陵地帯は草と木立の緑におおわれ、そこここに赤や青といった原色に近い鮮やかな色の住宅の屋根が、列車の進行にともなって見え隠れする。大きな家畜が群れをなして草を食んでいる。スイスに來ているのだが、何か 外国に來たような」感情で百合子の気分は高ぶっていた。

行く先の遠方には、スイス・アルプスが今度度度まさに斜め下から仰ぐように見える。車窓からは、子供のころ、母に読んでもらった子供向けの外国の物語の風景がそのまま流れていくのが見える。いつか母をここ スイス」へ連れてきてあげたい、百合子はそう思うのであった。

湖畔をなめるように進んでいた列車は、やがて静かに停車した。百合子は、インターラーケン・オスト 東」の英文字が駅舎に掲げているのを見つけた。インターラーケンとは、湖の間という意味で、この街はブリエンツ湖とトゥーン湖という二つの湖に挟まれている。スイス・アルプスのユングフラウやアイガー

に登るアルピニスト、あるいはこれらの山々を下から眺める観光客の基地ともいえる街である。ヨーロッパ屈指のリゾート地で、景観とテニスや乗馬のスポーツ、あるいはカジノや社交パーティを楽しもうと、ヨーロッパ各地から富裕な観光客が集まってくる。

ここからは、あの有名な登山鉄道が、山岳地帯をコトコトと登っていく。途中で左右に分かれるが、やがて合流して、最高地点の終点、ユングフラウヨッホ（二四五四メートル）まで上り詰める。頂上駅からこの地域の最高峰ユングフラウ（西一五八メートル）の雄姿を間近に仰ぐことができる。

百合子は、登山鉄道に乗った。

居酒屋 銚子」

締切日は三日も過ぎている。濃密な恋愛小説」を書く結城肇は、自分でワープロを叩く。したがって原稿はデジタル情報で編集部へ渡されるので、編集側で改めてデジタル入力をしなくて済む。その分、原稿が締め切りに遅れても、担当編集者は手書き作家の編集者ほど気をもまなくて済む。時間が稼げる、のである。しかし、もう待てない。

気分屋の結城は、一回りも年下の百合子から見ても、子供みたいところがある。誉めたいって喜び、批判したっていうは「むすっ」としたりもする。しかし気難しいところがない分、楽といえば楽である。前の日の不愉快ごとは、次の日にはすっかり忘れたかのように、

「ぞっか、美味しいもの食べられるとこ行かない？」

などと、平気で言ってくる。脱稿してしまえば、作家側は荷が降りるが、次の日からその荷は編集者に回ってくるのに、である。

百合子は、担当し始めたころは、その呼吸がわからなくていつも結城の一言一句に「ど

きどき」していた。作家と編集者には、ある種の相性のようなものがある。優れた、何を持って「優れた」と定義するかは難しいが、その「優れた」編集者であれば、どの作家の「お守り」でもできる、というものではない。

編集者ならだれでも担当してみたいという作家もいるが、逆に作家が編集者を指名してくることもある。どこの業界の客にも「三悪人」のような人がいて、営業担当者を悩ますものだ。出版関係の編集部のようなところにもそうした「問題児」作家がいる。その「問題児」に番を指名された編集者は、

「どうしてわたしが？」
と思うこともある。

結城も癖がないわけではない。彼が気に入っていた初代担当者が夫の海外転勤で退社してから、百合子が後任に選ばれた。編集長としては自信を持った異動と思っており、実際のところ百合子は結城に気に入られていた。

百合子は昨夜、結城の仕事場を訪れた。差し入れとして「シューベルトの『鱒』のCDを持参した。結城は海外のポップスとか女声のジャズを、インターネット・ラジオで常時流している。そんなに若年世代でもないし、それ以外の音楽に耳を貸さないこともあるまい、と読んで、百合子は自分が聞けば心が落ち着く『鱒』を持参したのだ。

差し入れは、編集者にとってみれば、作家の仕事の進捗状況の見定めのようなものである。それはお互いにわかっている。昨夜の様子では、多分、今日は脱稿できるであろう。できなければ、前半分だけでも「強引」に受け取りたい。そうしないと、あとで不眠不休で頑張らなくてはいけないのは自分自身だからだ。

「もしもし」

「はい、結城です」

「おっ、やったあ」

電話からの結城の第一声を聞いた百合子は、

心の中で快哉を叫んだ。

これが結城の「子供らしさ」の一部である。

「いつでもいいよん」

まるで子供である。鱒が効を奏したのであるのか。

すぐお伺いしたいんですが、いまからよろしいですか」

うん、わたしチョット飲みに出たいんだけど、メールで送ろうか」

取りに來い」なんていわない気さくさが、結城の良さでもあった。

あ、ありがとうございます。でも、わたしお伺いいたします。一五分くらいお待ちいただけますか？」

編集部がある東京・神田から、結城の仕事場がある日本橋浜町まで、都営地下鉄では指呼の間である。タクシーをすぐ使いたがる編集者の中であって、百合子は地下鉄をよく使った。行き先までの時間読みができることと、巷間でよく言われるところの「さらさら血」の健康体作りは、歩くことが基本と、母の経営する銀座のスナックの常連客に「洗脳」されていたからである。

原稿がデジタルになってから、電子メールでの送稿もできるようになった。

しかし、百合子が所属する編集部の長は、必ず訪問して受け取るように指示している。便利なものを活用するのは効率的だが、人の心を回避したやり取りになりがちだ。

会社員の給与が銀行振込になったのはいが、家計を妻がにぎっている家庭では、夫が妻から小使いを「もらう」ことが習慣化しているのです、どっちが稼いだか解らない」価値観が蔓延し、会社員のストレスの一因になっているともいわれている。

作家と編集者にも同じことが言える、というのがその編集長の言い分で、原稿は「札を尽くして」面談の上受け取ることを方針にしているのであった。

赤坂の三筋通りの地下にある酒場「銚子」

は、若い男女客で賑わっていた。切掘りになっているので、地上からも硝子越しに地下の店内の一部が斜めに見通せる。広い階段を降りきった所に、使い古した櫓や硝子の浮きや網などの漁具が飾り付けてある。大きな白い貝殻などもあしらって、新鮮な魚介小料理居酒屋のそれなりの雰囲気は出ている。

後輩の女性編集者みどりの誕生日前祝いとかで、姐御格の百合子にも声がかかり、時間の都合のつく同僚四人で出かけてきたのであった。みどりは明日は婚約者と二人きりで食事をするとかで、職場仲間が今宵、やきもち半分、冷やかし半分で集まったのである。

店の中がやたらに賑やかなのは、客が出入りや注文のたびに、どういう具合に合図がなされるのか、

「いらっしやいませ」とか、

毎度ありがとうございます」とかを店員一同二十人くらいが唱和するからである。いきおい、客のほうも声を張り上げなくては話ができない。

百席はあろうかと思われる客席は八割方埋まっている。女性のほうが多めなのは、可愛くて、美味しい」料理が多い割には、価格も納得範囲だからであろう。

みどりは東京郊外の一王子市で両親と暮らしている。婚約者とは、両家の両親も了解した上での交際であった。彼は編集プロダクションでグラフィック・デザイナーとして活躍しているが、カタカナの職業の実態が解らないみどりの親は、二人の将来に一抹の不安がないではないらしい。

みどりちゃん、お式の日取りとか、決まっているの」

やや赤みを帯びた黒い無地のブラウスを着た、色白の百合子が尋ねた。

ええ、まだなんですけどお、インターネットなんかで「応募しているんです。うちの雑誌でいままでもいろいろ特集とかしたじやな

いですか。和風とか洋風とか。それから海外の教会とか。でも、自分のことになると、結構、迷っちゃうんです」

珊瑚色のレースのハンカチで、唇を抑えながらみどりが答えた。

ねえ、思いつきし聞いちやうけど、みどりちゃん、もうしちゃったの？」

突然、口を挟んだのは、一番若い千秋だった。一昨年の入社組である。

耳年増」であるし 行動派」でもある。万事に興味を示し口も立つ。それでいて本当の年増女性記者や男性編集者の神経を逆撫でするようなことがない。シンプルな白のシャツに、パンツに合わせた若草色の小布を首にさらっと巻いている。

えっ、えっ、えっ！ 何言ってるのよ藪から棒に！千秋ちゃん」

みどりは、ベトナム風生春巻きをあわてて飲み込んで言った。

どうなの？」

千秋は次の矢を放った。
みどりは言の葉につまんで、頬をかすかに紅潮させた。

千秋ちゃん！」
百合子がみどりに助け舟を出した。

ごめん。みどりちゃん。じゃ、先輩どう見ます？」

千秋は、矛先を今度は百合子に向けた。
どうって？」

だから、みどりちゃんが、なんていうの、その、なーに、その 『通過儀礼』を、もうしちゃったかどうかということなんだけど」

それは、いまの彼と？ それとも女として？」

あつ、鋭いですね、先輩。どっちでもいいけど、とりあえずいまの彼と」

だって、婚約者でしょ。だったら何があってもいいんじゃない。結城先生の小説では、もっと進んでるわ。あ、でも、こんなことわたくしが答えてどうするの」

そのとき、みどりが手にしていたジン・トニックのグラスを食卓に置いた。

あのお、わたしのことですみません。わたし、恥ずかしいと思っていけないんですけどおわたしまだ、なんです」

それを聞いて、千秋は一瞬きよんとした。そして、グラス売りの赤ワインを一口飲み干し、

あ、責めてないよ、責めてない、みどりちゃん。あ、そうなの」

と、千秋は、それまでの勢いを往 〇) なされた体 〇) であった。

別にいままで 『でないから』 って不自由したり、迷惑かけたりしてないし」

そうよねえ。自分から捨てに出るようなことでもないし、そういう機会があったかどうか、ということよ。よしんばあったとしても、相手との相性もあるしね。ね、千秋ちゃん、あなたはどうかなの」

箸でマグロのカルパッチョをつついていた百合子は言った。そう言ってしまったあとと百合子は、実は自分は 不自由」であったり、ひとに 迷惑をかけている」のではないかと思つた。江戸時代ならとくに大年増呼ばわりされる三十路に入っている。時折、自分の成熟しきった身体の芯のどこかに うっとうしさ」とも、やるせなさ」ともいえない 疼き」のようなものを覚える自分に思いが走つた。

え、わたしですか、ケツ、ケツ、ケツ」
百合子の一瞬の思いを、奇声で打ち破つたのが、千秋の笑い声だった。ワインは四杯目が届いたところであった。千秋、好調である。
わたしは、普通ですよ」

千秋は、編集部の中では万事開けっぴろげで通っている。これまでに二、三人の 彼」がいたが、いまは フリー」だそうである。
わたしはねえ、わたしは女よ」

千秋は、百合子を媚びながら上目遣いで見た。

千秋は、百合子を完全に「女」と見ている。しかし、あるとき千秋は、結城が書いた小説に赤線を引いてきて、

ねえ、先輩、先輩。ここってすごいっすねえ。男の人って、あの時、結構クールに観察してるんですね。いやですねえ。わたしなんか、頭んなか真っ白で全然わからなくなってますよ」

と、若い男のような口ぶりで話し掛けてきたことがあった。

しかし、百合子には実は、その原稿を結城から手にして「読した時、その部分の意味がよく飲み込めなかったのであった。とはいっても、別に男女の関心　ねやごと」をすべからく　知ってしまった」からといって、百合子の「疼き」が解消されるものでもないように思えた。

スナック　甲斐

百合子の母・俊恵が経営するスナック　甲斐」は、東京・銀座・日航ホテルの裏手にある雑居ビルの地下にあった。専業の女の子はひとりで、あとは時間給の女の子が毎日二、三人変わり番で働いていた。止まり木と小卓席合わせて十五人くらいなので、それで十分な人員である。

常連客が多く、またその質もよかった。働き盛りの客が多いが、中には上司に連れられてきたのを機会に来店するようになった若い客も何人かいた。客同士も屈託なく、女の子が同席しなくても話ができた。

俊恵は、脂粉で着飾らない　そっけない」女であった。髪も衣装も酒場のいかにも「業務用」という感じがしない。そのまま街にいても、少しおしゃれな婦人ぐらいにしか見えない。甲斐」のなかでも、舌の浮くような御世辞も言わないし、虫歯の治療あとが見えるほどの馬鹿笑いをしたり、嬌声を上げる習慣

もなかった。興に乗れば客と歌を歌うこともあるが、びつくりするほど上手い訳ではない。時間給の女の子の嫉も行き届いていて、客の劣情を誘うような話に乗っていく子もいなかった。

昨年、一五周年を節に、俊恵は身内のような常連客に時間をいただいて、近く中華料理店でささやかな小宴を開いた。お店の時間給の女の子だけでは手も足りないと思い、百合子に応援を頼んだ。百合子が俊恵の「職場」に登場するのは、これが初めてであった。

百合子は仕事柄、甲斐」のような酒場に作家や編集仲間とよく行くが、甲斐」には、意識的に行かなかった。俊恵も、百合子に客と「一緒にきて欲しいと　経営者として」思うこともあったが、百合子には百合子の考えもあらうと、敢えて依頼しなかった。二人は、姉妹のように新宿・西落合の小さな分譲マンションに暮らしていた。

俊恵は、店で身の上話をしたことがなかった。話題はほかにいくらでもあったし、自分の身の上話をしながら商売をするのも白けた感じがした。したがって、中華料理店の小宴で俊恵が百合子を紹介した時、常連客の中から小さなどよめきが起ったものだ。

甲斐甲斐しく客の間を回って酌をする百合子は、あ、この人があの人、こちらの方があの人、という具合に、これまでに俊恵が話してくれた客のイメージを想起することができた。楽しかった。

俊恵は、深酔いして帰ることはほとんどなかった。帰宅が遅い百合子とは、いっしょに風呂に入ったりして、お互いにその日のことを話すことがよくあった。出勤前に食事をした人、海外出張でお土産をいただいた人、お店でいろいろと御説をおっしゃる人、百合子の頭に中には、俊恵から聞いた情報で、そうした「大名簿」が知らず知らずのうちに出来上がっていたのだった。俊恵が同じ人の話を

何回もするので、その分、百合子の人名簿は書き足されていたのである。

出席者の中で「二番、通い年数が少ないと思います。・、こんなところへ呼んでいただいて」と恐縮しきって自己紹介をしたのが山縣だった。長身で、もそもそと話す、大手新聞社の外報部の若手記者で、最近、海外赴任から日本へ戻ってきて、まだひとり身である。同社の、新聞界の「長老」に連れてこられたのが「甲斐」との縁の始まりであった。

山縣が呼ばれたのは、俊恵のお気に入りなのか、お店への「貢献度」が高いのか、それともほかに俊恵の思惑があったのか・・。

百合子は、いきなり年配の客の接客するのにも勝手がわからないこともあって、歳の近い山縣へ近づいた。

初めまして。百合子でございます。本日はどうもありがとうございます」

あつ、どうも。山縣です。ママ、娘さんがいるなんてお首にも出さなかったんで、びっくりしました」

わたしはときどき母から山縣さんのことをお聞きしています。ヨーロッパからお帰りになっただんだんですね」

ええ、でもそろそろ一年になります」

百合子は、山縣がビールを飲んでいるのを見定め、注ぎ足しの可否を尋ねてからビールをグラスに注いだ。

どちらだったんですか」

ミュンヘンです」

あつ、それでおビール？」

そういうわけじゃないんですけど」

どのくらい行ったらしたんですか？」

二年かな。百合子さん、でしたっけ？ 何

屋さんの」

山縣はボソッと尋ねた。

百合子は、薄ピンクの袖なしのワンピースを着ていた。みずみずしい二の腕や腕の付け根あたりが、山縣には眩しかった。百合子の勺の仕草に連れて、微かな香りが山縣の鼻先

をかすめた。もとより山縣にはその銘柄が解るわけでもなかった。

何屋さん？ そうね、そういう言い方なら雑誌やさん、かな」

ああ、じゃ、わたしと同じようなことしてるんだ」

そうですね」

万事、機能的に回っている新聞の編集局では、女性記者や女性の事務員もいるが、申し合わせたように、山縣の職場でも、彼女たちは諸事に抜け目がなく、はきはきとした対応をする。いま、百合子と話していて、同じ編集の仕事をしていながら、彼女からはそうした新聞社の女性とは「何か」違うような印象を、山縣は受けるのであった。

それは、山縣はいわゆる書き屋で、百合子は自分で取材や執筆もするが、むしろ編集者であることの違いからかもしれない。あるいは、そんなことには関わりなく、百合子の固有の持ち味かもしれない。百合子は、比較的小さな声ではあるが、はっきりと、微笑みながら話す。声にしっとりとした湿りがあった。山縣には、新しい範疇の女性であった。

山縣さん、それでは、またいつか。ありがとうございました」

独想していた山縣は百合子の声で我に返った。百合子は、他の客のところへ歩いていった。淡いピンクのワンピースの後姿が山縣の脳裏に焼きついた。

貿易会社を経営していると聞いていた吉田の前に来た時、百合子はこの初老の男に、遠い昔にどこかで出会ったような感じがした。吉田はにこやかに、初対面のような挨拶を送ってよこした。百合子も目一杯の笑顔で答えた。百合子は、人の出会いは不思議なもので、初対面のインスピレーションでその人との相性みたいなものが解るような気がしている。百合子は、俊恵から聞いていた吉田の印象は、

ずっと良い方へ修正された。

扇子をせわしく煽りながら、隣の客と陽気に話をしているのが、坂本であった。

俊恵は「甲斐」では、いつも洋服であった。

今日は和服である。招待されたどの客も、和服の俊恵を見たことはなかった。着こなしもその種の女性の印象もなく、髪も美容院へ行ってきたとはいえ普通のお洒落な中年婦人そのままである。若草色の留袖がよく似合った。おっ、ママ、なかなかんだね、着物姿も。間違えちゃうよ。婦人雑誌から出てきたようだな」

ま、お上手ね、坂本さん」

ママも隅に置けないね。みんな、ママは独身だと思っていたよ」

あら、独身よ。お嬢さん募集中なの知っているでしょ」

そうだけども、こんな大きな娘さんがいたなんて。ということは、ママもかつては目くるめくような恋をしたっっちゃうことだな」

「甲斐」の客のまえに突然現れた百合子を巡って、客は興味津々ではあった。しかし、そうそう突っ込んだ個人的な質問を不躰にはできなかった。

バカなことを言わないでください。知らない方がお聞きになったら本気になさるわ」

後を百合子に任せて俊恵は、司会者のところでマイクを手にした。

さ、では、ささやかですが感謝のお品を、お手元の番号札にしたがって、お贈りさせていただきます。その場で開けていただき、ひと言ユーモアのあるお言葉を頂戴したいと思います」

お店の女の子二人が、俊恵からマイクを受け取り、その後を引き継いだ。

百合子はおおかたの客と話をし、俊恵の人氣を素直に受け入れ、俊恵のそれまでの苦勞を思いやった。

このようにして、俊恵の世界へ登場した百合子は、その後、お店の女の子が都合のつかないとき、自分の仕事がやりくりできれば「甲斐」を手伝うことになった。

電子メール

「甲斐」の一五周年記念の小宴あと数日して、百合子は山縣から電子メールを受け取った。無粋なことだけど、と山縣があの小宴で百合子に名刺を差し出した。

あつ、この人」

と、百合子は思った。長身でボソツとした感じなのに、

案外ママなのかもしれない」

と思った。百合子も名刺を渡したのだった。

会いたいです。食事したいです。来週の水（か 木）どうでしょうか、ダメならほかの日でも調整できます」

なんとストレートな。用件だけ。まるで新聞記事ね」

電子メールは、そんなものだ、といってしまえばそれまでだが、電子メールがこれほど日常的な連絡手段になったとはいえ、いまだに封書を友人に送る百合子には、山縣のメールはあまりにも味気なかった。それが食事の誘いであっても、である。せめて一行の時候の言葉とか、この前はどうかであったとか、そういう前振りがあってもいいのではないかと思っ

た。電子メールは、便利といえば便利だが、伝えようとする用件だけが剥き身のまま、いきなり相手の懐深くまで入ってしまう。訪問したい人のお宅の門のところで逡巡したりするようなこともない。玄関で立ち話、というようなくともなく、いきなり奥座敷にまで入り込んでしまう。

電子メールがこんなに発達する前は、携帯

電話がこの役を負っていた。携帯電話が登場する前は、普通の電話がかなり重要な役割を担っていた。しかし、職場に電話をするにしても、交換嬢や同僚を経由しなければならぬ。家庭に掛けても、家族と住んでいる人と話すには、いきなり本人が出ることはあまりない。

しかし、携帯電話になって、なにはともあれ直接本人につながるという画期的な通信手段が確立した。しかし、相手と直接対話をしなければならぬので、こちらの都合だけを一方的にまくし立てるわけには行かない。相手の都合に配慮しながら、礼を尽くして対応しなければならぬ。ふつうの電話と同じである。

しかし、電子メールは相手へのそうした配慮を大幅に軽減した。こちらの都合を、相手の、当方に対応する時間を気にせず、「トレート」に「奥座敷」へそっと置くことができるのだ。「ずるい」といえば「ずるくない」ともない。

自分のところを手紙で相手に伝えようとする場合、いくつかの逡巡や葛藤がある。第一、電子メールのように書き直しが自由にいかない。万年筆やボールペンなどおおかたの筆記具は書き直しに不便である。したがって、表現に十分吟味してから慎重にかからなければならぬ。

女性なら、便箋や封筒の意匠などにも配慮して、何種類か買い置きしてある中から相手にふさわしいものを選ぶであろう。

書き上がったからも、切手をありきたりの物にするか、記念切手にするかなど、思いは幾重にも重なる。投函の段になっても、これを出していいものかどうか、迷わないことがないわけではないだろう。内容が、男女の機微に触れるようなものであれば、その趣はいっそう深くなる。人と人とのところのかかわりというものには、そうした幾重にもわたる配慮が肝心だと百合子は思っている。

百合子は、そんなことをそのたびに深く考えているわけではないが、便箋に向かって、相手への思いを大事にしながら、自分のところを伝える手紙に愛着を覚える。仕事はほとんど電子メールと携帯電話で済みますが、私信はほとんど手紙である。

さて「どうしたものか」と、百合子は考えた。山縣からの電子メールの誘いの件である。電子メールについて、ほかの人がみんな自分と同じように考えているわけでもないし、自分の考えが「古い」のかもしれない。同世代の半分は自分と同じように一人っ子である。

古い「人たちが言うように兄弟姉妹が何人かいれば、小さい時から諍いや庇いあいは日常化し、良かれ悪しかれ相応の社会性の中で自然に育つ。わたしたち一人っ子は、そういう環境に育たなかったので、自我意識ができてから他人への配慮を「学習」していかなければならなかった。山縣もそういう一人っ子のひとりかもしれない。それで唐突とも思えるメールを送ってきたのだろうか。

いろいろ思案したが、断る理由もなく、時間も作れそうだったので、百合子は山縣の提案を受けることにした。

おにぎり

本降りが小雨に変わっていた。そろそろ商店街の街明かりが灯り始めるころだった。高校から帰宅した俊恵は、母親に頼まれた夕食の買い物を冷蔵庫にしまっていた。友達の間で評判だったニール・セダカの「恋の片道キップ」がラジオから流れていた。

そのとき、外付けの二階への階段を、遠慮がちながら乱れた足音が登っていくのを聞いた。何人かのである。

俊恵の家の二階は、学生相手の下宿になっていた。四畳半二間を二人の学生に貸している。いまのように、バス・トイレ付きとはいかず、トイレは共同、風呂は近くの銭湯へ下

駄履きで通うのが常であった。部屋には、三尺幅に小さな流しとガス・コンロが一台、挟まれる」ように配置してある。これが当時の標準であり、三畳という部屋もあった。

二階の物音に、はしたなくも聞き耳を立てた俊恵は、そこに「ただならぬ」気配を感じた。勝手口から駒下駄を突つけて裏へ回り、下駄をそろえるゆとりもなく二階へと駆け上った。

まだ閉められていなかった入り口から覗くと真ん中に、俊恵が「二階のお兄ちゃん」と呼んでいる学生が仰臥しており、ほかの二人が彼の雨で濡れた顔や、濡れた衣類を拭いていた。三人ともずぶぬれで、ズボンには泥のはねがたくさんついていた。

「どうしたんですか」

恐る恐る俊恵は尋ねた。

「あ、すいません。たいしたことはないです」ひとりの学生が、畳に落ちた水滴を慌てて手で拭きながら答えた。

「お兄ちゃん、どうしたの」

俊恵は、お兄ちゃんの顔が見えるところに跪いて、彼の顔を覗き込んだ。

目をつぶっていたお兄ちゃんは、俊恵の声で目を明けた。

「あ、俊ちゃん。大丈夫だよ。お母さんは、いるの？」

今日は昔のクラス会で遅くなるから、いまはいないけど。でも、どうしたの、こんなになっちゃって」

「あの、お母さんには内緒だよ」

ビートルズの初来日で武道館をはじめ、日本中が沸き返っていた。日本の流行り歌が田舎臭いと、アメリカン・ポップスに熱を上げていた若者たちも、この衝撃的な楽曲を展開するイギリスの歌い手たちには、度肝を抜かれたものである。

そうしたいっぽうで、大学のあり方や社会の行方に、初々しい情熱と柔軟な理性を触発

された学生たちは、「社会変革」や「自己改革」といった大きな概念を何の苦にすることもなく背負い出していった。坐して読書し、批評するだけではなく、アンガージュマン（社会参加）してこそ自己の存在が意味を持つと、誰もがそう思っていた。

学生たちはサルトルやキルケゴール、マルクス、レーニン、ニーチェといったヨーロッパの思想家や阿部次郎や吉本隆明、高橋和巳など日本の思想家や作家のものを手当たり次第に読みまくった。焼け石に水が吸収されていくように、いろいろな考えや理論が、学生たちの若い脳に吸い込まれていった。

仲間とよく「勉強会」を開き、「自己検証」をしていた。ひとつの大学が、学費の値上げと学生会館の管理運営権を巡って、数カ月 にわたる「ストライキ」に入っただけなのに、そんなところだった。後世に「学園闘争」と一般名詞化した、このような動きは、都内はもとより国内の各大学へ飛び火し、毎晩のニュース番組を賑わした。

やがて、国家間の安全保障を巡って、当時の首相が訪米するに当り、時代の危機を機敏に捕捉する学生と若年労働者たちは、これを阻止しようとして、全国から羽田空港に集結した。参加者たちから「羽田闘争」と呼ばれたこの出来事で、ひとりの学生が若い尊い命を失った。

俊恵の家庭でも、これらのニュースがテレビに出るたびに、二階の学生たちを我が子のように案じた。二階のお兄ちゃんから少し便りが途絶えた、地方の彼の実家の母親から、俊恵の父宛に息子を案じる書状が届いていた。二階のお兄ちゃんは、心配してくれる俊恵の母親に「大丈夫です」と答えていた。俊恵の母は、よく二階のお兄ちゃんへ食べ物などを差し入れさせる俊恵の話から、二階のお兄ちゃんはクラシック音楽好きなおとなしい青年だと、好感を抱いていた。

俊恵は、階下からタオルなどを一抱えも運んできて、甲斐甲斐しくもお兄ちゃんの髪などを拭いてやった。

「いいよ。自分でできるから」

お兄ちゃんは照れてそうだったが、
「いいのよ。寝てて」

俊恵は、二階のお兄ちゃんをそっと押した。

二人の学生友達はなすすべもなく、自分たちの濡れたシャツを脱いで胡座をかき、俊恵の所作を見守っていた。

その日、三人の学生たちは大学での学生集会で氣勢を上げ、国会議事堂へデモをかけた。後刻、学生のデモはヘルメットやマスクで顔を隠すと同時に「武装」するようになるが、そのころはまだ、ヘルメットはデモの最前列のリーダー格の学生だけが着用していた。

大丈夫かよ、足は」

うん、たいした事はない」

しかし、右足の細めのジーンズはパンパンに腫れ、ジーンズを脱ぐこともできない。

デモで横五人縦列の一番外側にいた二階のお兄ちゃんは、ジグザグデモを機動隊にサンドイッチ規制」されたときに、腕組みしていた仲間からひとり「はぎとられた」。機動隊の「戦闘服」の集団の中に連れ込まれた。滅茶苦茶に殴られ、蹴られ、ラグビーのボールのように機動隊の隊列の後ろへ投げ出されたのであった。

眼鏡が壊れて怪我をしなかったのが不思議であった。しかし、身体はあちこちが痛んで腫れた。特に右大腿部は、警棒で乱打されたようで、痛覚すら麻痺するほどであった。

デモと機動隊の隊列は、もたれるようにしながら遠ざかり、お兄ちゃんは、国会議事堂前の中央分離帯の上に放り出されたままで、どうするわけにも行かず雨に打たれていた。雨が降ってくる空を見上げていると、昇天していくような錯覚にとらわれる。静かだった。ひとりだった。

そこに通りかかったのが、仲間の学生たちで、両方から肩を抱えられ「這う這うの体ほうほうのてい」で下宿にたどり着いたのであった。

俊恵は、このことは両親に言うまい、と何故か思った。お兄ちゃんとの共通の秘密に、幼い胸がときめいた。

お兄ちゃんは、ほとんど三日三晩寝たきりであった。意識は普通どおりなのだが、身体が痛くて動けない。俊恵は両親がいないうちに、せつせと食料を二階へ運んだ。二日目には、足の腫れが激しく、やっぱりジーンズを切り開いて直接冷やすほうが良い、と俊恵が洋裁鋏を階下から持ってきた。俊恵は「看護婦のように」手際はよくないが、お兄ちゃんを制して、ジーンズを脱げるまでに切り裂いた。身体中の痛みで自分で脱げないお兄ちゃんに代わって、俊恵は彼のジーンズを、お兄ちゃんが痛くならないように注意深く引いた。ふっと襲った臭いに、俊恵はクラクラッとした。いままでに嗅いだことのない臭いであった。蒸れて熟成した油脂のようであった。それは何日も下着も変えられず、風呂にもいけなかった若い男の臭いであった。シワだらけのお兄ちゃんのパンツを見てしまった。途中でズボンを引くのを止める訳には行かなかった。俊恵は、何かとても恥ずかしかった。胸がドキドキするのをお兄ちゃんに悟られまいと、

水をとりに行ってくるから、着替えしといてね」

といって階下へ降りていった。

動けるようになったお兄ちゃんは、再び大学へ行きだした。下宿から一五分も歩けば着く。俊恵は、小さいころその大学で友達とよく遊んだ。東京の中では、幼子にとってクルマが入らない安全な遊び場であった。路面に描くための白墨は、大学の教室のドアを開け

れば「おじいちゃん」が、白いのばかりでなく、赤いのも、青いのも、笑顔で渡してくれたものである。

怪我をして帰ってきてからのお兄ちゃんは、夜、帰って来ない日があるようになった。テレビでは毎日のように「学生運動」を報じていた。機動隊と学生との衝突のニュースは、俊恵をやきもきさせた。俊恵は、それが気になって、二階の様子を気にするようになった。お兄ちゃんは、今日も帰ってきていない……。足は治ったのだろうか。ご飯はどうしているのだろうか。俊恵は、お兄ちゃんの怪我の看病でお兄ちゃんの部屋に行った時、即席麺しか置いていないガス台のあたりを思い出した。

俊恵は、ある日学校から帰ると、急いでご飯を炊いてお握りを作った。ご飯が熱くて、掌（てのひら）は赤くなってほてった。母のように、握りながら三角にはなかなかできない。粘土細工のようになってしまう。しかし、俊恵は夢中で五つを作り上げた。食卓の上にはご飯粒が飛び散らかっていた。

有り合わせの漬物などを添えて、お兄ちゃんの大学へ走った。確か何とか研究会とか言っていた。新聞記者になりたいって言っていたから、新聞研究会かもしれない。そんなサークルがあるかどうか解らないが、高校にも新聞部があるんだから、大学にだってあるだろう。当ては、それしかなかった。

キャンパスで学生に聞いたら、新聞を発行するところは二つもあった。道を聞きながらキャンパス内を急ぎ足で行くと、古い木造の建物があった。外側には、政治的主張を書いた大きな看板が出ていた。俊恵には、意味が解らなかった。

あのお」

雑多な部屋の中に、突然の女子高校生が飛び込んできたので、みんな一斉に入り口のほうを見た。お兄ちゃんはそのサークルには所属していなかった。

もうひとつの新聞部にも、お兄ちゃんはいなかった。

俊恵は、途方にくれた。もっと確かに聞いておかなかった自分を悔やんだ。

いくつものサークルの部屋が並ぶ、その古い木造平屋建ての薄くらしい廊下を落胆して歩いていると「放送研究会」という看板が目に入った。

放送だって、新聞だってマスコミだ」

そう聞いた俊恵は、躊躇なく中に入った。応対に出た女子学生は、俊恵といくつも違わないのにずっと大人っぽく見えた。化粧のせいかも知れない。お洋服のせいかも知れない。俊恵はとっさにそう思った。部屋には数人の学生がいてガリ版印刷機で、ビラのようなものを手刷りしていた。お兄ちゃんの姿は見当たらなかった。俊恵はその女子学生にお兄ちゃんの名を告げた。

するとどうだろう。全員がお兄ちゃんを知っていた。

今日は、夕方から法政じゃないか」

男の学生が、東京・市ヶ谷にある私立大学の名前を口にした。

今日、ここへは帰ってきますか」

どうして。君はだれ？」

あ、失礼しました。あの、あの、親戚のものです」

俊恵の口からとっさに出た言葉だった。

あ、そう。わかんないなあ。ここへ戻ってくるかどうか。でも、このカバン、あいつんじゃないか、なあ」

学生は、となりの学生に尋ねた。

そうだよ。だから多分帰ってくるんじゃないの。あいつ下宿もこの近くだし」

あの、お願いしてよろしいでしょうか」

なに」

「これ渡して欲しいんですけど」

俊恵は、カツライス定食」とか おふくろ定食」とかを主要献立にした、学生相手の定

食堂が並ぶ狭い商店街を歩きながら、安堵の胸をなでおろした。

その夜、お兄ちゃんは十二時を少し過ぎたころ、下宿へ戻った。その気配を待ちかねていた俊恵は、すぐにでも二階へ駆け上りたかったが、そういう無作法な自分を抑えた。そのころは、携帯電話も電子メールもないころである。下宿に電話が引いてある学生もまづいなかった。連絡はとりにくい時代であった。

俊恵はその後、様子を見ては、お握りを放送研究会へ届けた。お兄ちゃんがいることは少なかった。

あるとき俊恵が、きょうもお兄ちゃんはいないかもしれない、と思いながらお握りをもつて放送研究会の部室へ向かうと、大学の裏門のところでお兄ちゃんにバッタリ出会った。息が止まりそうであった。

あ、俊ちゃん、いつもありがとう」

お兄ちゃんは十メートルも先から大きく手を振った。元気のような。紺のVネックのセーターにピンクのブラウスを着た俊恵は、お握りの包みを胸に抱えて、思わず小走りになった。お兄ちゃんの顔は脂でてかてか、しかも無精ひげがいっぱい生えていた。俊恵は、男の髭をこんなにまじまじと見たことはなかった。父親の髭も、兄の髭も、いままで意識したことはなかった。

二人並んでキャンパスの長いすに腰を下ろした。俊恵は、青色系のタータンチェックのミニスカートから出ている太腿が、少し恥ずかしかった。キャンパス中にたくさんある大きな銀杏の木からは、葉が落ち始めていた。今日会えてよかった、俊恵はそう思った。今日は「特別料理」を添えていた。といっても、ウインナー・ソーセージを卵とニラで和えて、トマト・ピューレにタバスコで作ったタレをかけた簡単なものである。時間がたっていないから、また温かいはずである。

「いつもわるいね。美味いよ」

ほお張った口の赤いタレの間から、お兄ちゃんの真っ白な歯が覗いた。男の人の歯って、こんなに白かったっけ、俊恵にはほかの男の歯は、思い出せなかった。俊恵は、ティッシュペーパーをお兄ちゃんに差し出した。

お握りばかりで。でも、持ち歩けると思っ。食べ終わったら包みは捨てれば荷物にならないでしょ」

お兄ちゃんの方から、脂っぽい汗の臭いがツンと鼻をついた。若い男の蒸れた体臭である。俊恵は、お兄ちゃんのジーンズを引いたときを思い出した。何日もお風呂に入れないのだろう。お風呂屋さんは十一時までに入らないと、いけないらしい。

最近、ちよくちよく帰らないだろ。お母さん何か言ってる？」

ほとんど気がついていないと思うよ。早く寝てしまおうし。ニュースを見ているとき、二階の学生さん、大丈夫かな、とか両親で話しているけど。あの、足はどうなの」

うん、もうほとんど大丈夫だよ。今度は機動隊に捕まらないで、駆けて逃げるよ。ハハハッ」

ねえ、いつまで続くの」

うーん、わかんないなあ」

おうん、怪我したり、ご飯もチャント食べられなかったりなのに、なぜ、こんなことをするの」

理由かあ、理由はわからないけど、いまは、というか、今日はこれをするのがベストだと思うことをしているつもりだよ」

俊恵には、もっとたくさん聞かないとお兄ちゃん言っていることが理解できそうもなかった。

あ、そうだ。チーズあります。栄養の固まりだから食べたなら」

え、そりや嬉しい。チーズ好きだし。でも、そんなに心配してくれなくてもいいよ。あんまりボクに構っていると、お母さんに何か言われるんじゃない」

集会があるとかで、お兄ちゃんは立ち上がった。近くの水のみ場で口に水を含むんで、グジュグジュッと音を立てると、ゴックンと飲んでしまった。俊恵を見てニコツとした。

蛇口からじかに飲んだので、口の周りやシャツが濡れた。取り出したお兄ちゃんのハンカチは見るからに毎日連続で使っている気配が濃厚で、クチャクチャで臭そうだった。俊恵は、お握りを包んできたバンダナを差し出し、

「これをもっていったら」

といった。

「これもあったほうがいいよ」と、ついでに自分のハンカチも添えた。白い大ぶりのハンカチだし、女物とわからないと思ったからである。

今夜帰れるの？」

「うーん、多分。あ、ボクのことそんなに心配しなくてもいいから。勉強しなさい。じゃあね」

お兄ちゃんは駆けていってしまった。

ボクのこと心配しなくていいから」とかボクに構わなくていいから」とか、お兄ちゃん

さんは言った。

勉強しなさい」

って何よ、と俊恵は口を少し歪めた。まるで子ども扱いじゃない。

お兄ちゃんには、だれか好きな人がいるのかしら。大学生だもの。成人しているんだし。そう考え出すと俊恵は、いてもたってもいられない気持ちだった。

わたしは、お兄ちゃんが好きになってしまったのだろうか、そんなことを思うと、その晩、俊恵は輾転反側して、眠りについたのは空が白み始めるころになってしまった。

東京のあちこちの大学で「学園闘争」に一齐に火がついたように、毎日がそのニュースで騒然としてきた。お兄ちゃんの大学でも、

機動隊が入って、校舎を占拠している。全共闘」の学生を排除するとかで、警察のものものしい装甲車が何台も連なって正門前に陣取ってきた。

ある日、俊恵がおにぎりを放送研究会の部屋へ持っていくと、顔なじみになった何人かの女子学生のひとりが、お兄ちゃんは当分、部室には出てこないことを俊恵に告げた。

えっ、どうしてですか」

俊恵の大きな驚きの声に、男の学生が振り向いた。対応している女子学生に目配せをした。話すべきだ、と女子学生を目で促している。女子学生は躊躇していた。男の学生は、俊恵のほうへ近づいてきた。椅子を勧めた。俊恵が不安げに座る。

あのね、気を落ち着いて聞いて」

俊恵は、男の学生の口からどんな言葉が飛び出すのかと思った。心臓が大きく鼓動していた。

あいつね、パクられたの。心配は要らないよ。名前だけ言って後は黙秘していればすぐ帰れるよ。そんなに悪いことしてたわけじゃないし」

パク・・・、悪いこと・・・、俊恵には、訳がわからなかった。

彼はね、いま警察にいるの。大丈夫よ、心配いらないわ」

女子学生が俊恵の手に自分の手を優しく重ねた。

俊恵は、食事が喉を通らないほどの衝撃を受けた。学校でも、授業も友達とのやり取りもすべて上の空であった。警察に捕まる」なんて、何か悪いことをしたに決まっている。でも、お兄ちゃんがどんな悪いことをしたのか見当もつかなかった。

なにかあったの」

母親が娘の「異常」を察して言葉をかけた。うううん、なんでもない」

夕食もそこそこに、俊恵は自分の食器を洗い、自分の部屋へ入ってしまった。

学校から帰った俊恵は、何をするでもなく放心したようにテレビの旅行番組をみていた。スイスの雪におおわれたアルプスや、絵のよくな牧歌的風景が、俊恵の直面している現実には、なんのお構いもなく流れていた。レポーターの口が金魚のようにパクパクしていた。その声は俊恵の耳には入っていなかった。

俊恵が突然立ち上がった。

何か、の気配がしたからである。

俊恵は、急いで二階の階段口へ走った。靴脱ぎ場にお兄ちゃんの汚れた靴があった。階段を飛ぶようにして上った。部屋には、頬がこけ、無精ひげを生やし、憔悴しきったお兄ちゃんがボーッと立っていた。俊恵を見て、一瞬驚いた様子だったが、ニコツと微笑を返してくれた。

お兄ちゃん！

俊恵は、背伸びをするようにお兄ちゃんにすがった。お兄ちゃんが、それを受けて俊恵の肩を優しく抱いた。俊恵の胸は大きな鼓動を打っていた。合わせた胸から俊恵の胸の鼓動が、お兄ちゃんに伝わった。お兄ちゃんは、自分の感情がうねるように、大きく高ぶるのを感じていた。そのまましばらく抱き合っていた。俊恵の髪からシャンプーの香りがしていた。

お兄ちゃんが俊恵のあごに手をやり、上向かせた。泣きじゃくっていた俊恵の瞳は、涙でグシャグシャだった。お兄ちゃんがここにいる。お兄ちゃんに抱かれている。俊恵は、むせ返るようなお兄ちゃんの「あの臭い」の中で、頭の芯がおかしくなるような陶酔を覚えた。

目をつぶって「覧」

上向いた俊恵にお兄ちゃんはいった。

俊恵が目をつぶると、熱いものが口を覆った。

うぐっ

驚いて目を開けた俊恵は、そこに頷くようなお兄ちゃんの優しい男の瞳をみた。俊恵には、初めてのことで、気が動転してしまった。いちど口を離したお兄ちゃんは、再び口をつけてきた。何が起こっているか解らなくなつて、俊恵はガクンと膝の力が抜けてしまった。畳にくずれた俊恵に、お兄ちゃんが添い寝をするように横になった。俊恵には、自分の割れた膝に、お兄ちゃんの片膝が入っているような気がした。でも良く解らない。お兄ちゃんは、今度はもつと乱暴に口を吸ってきた。お兄ちゃんの手が・・・、俊恵は恥ずかしさで何がなんだか解らなくなつてしまっている。止めて欲しかったし、どうなつてもよかった。胸を撫でられていることが恥ずかしくてたまらなかったが、頭の中がだんだん白くなり、自分が誰だかわからないようになってしまった。

ある魂胆

俊恵は、坂本に食事に誘われたとき、知り合いが開店したという居酒屋でもいいか、と坂本に聞いた。坂本は、もう何回も俊恵を食事に誘っている。いつも行こうとするお店の心つもりは持っているが、その度に俊恵が、別のお店でもいいかと聞いてくる。坂本が行こうとしているお店の名前をいう前に、そう聞いてくる。

そのようにして、これまでに行つたお店は、いずれも若い女性たちが自分たちの出費で、十分楽しめるような、そんなお店であった。高級なお店よりそういうお店のほうが本当に好きなのか、坂本には俊恵の気持ちを読めなかった。坂本は、たまにはちゃんとしたお店へ俊恵を連れて行きたかった。

新橋の土橋から、有楽町の方へ伸びるJRの線路下にコリドー街とよばれる一角がある。

大衆酒場より内装や献立に趣向を凝らし、食材もある程度のもを使っているので、杜用の接待に使っても決して見劣りしないような飲食店が軒を連ねている。そんな店のひとつに俊恵が目指す「岡崎」があった。

「階の奥まった落ち着いたところに、俊恵が席を予約していた。高級焼き鳥屋といった感じである。いわゆる銘酒といわれる清酒を集め、酒場の雰囲気としては悪くはない。

「おお、いいでしょ。坂本さんならお気に入るかと思ったんだけど」俊恵は、坂本の顔を覗き込んだ。

「甲斐」でも、時々清酒を飲む坂本を、俊恵はよく覚えていた。

「悪くないね」

坂本は、ご満悦である。

献立も鶏肉を中心としたものである。

鶏肉はヘルシーだし、いいわよねえ」

俊恵も、初めてだそうだが、お店の雰囲気も気に入ったようである。

坂本は、俊恵のお店にとっては七、八年来の客である。坂本の取引先が「甲斐」の常連であった。坂本は、始めのうちは取引先と一緒にであった。そのうちに、ひとりできたり、部下を連れてきたり、あるいは取引先を連れてきたりしていた。「甲斐」にとっては大事な客である。

坂本は、いまはマーケティング関係の会社を自営している。それまでは外資系の広告代理店にいた。大学を出て、その広告代理店に入り、サンフランシスコの支店などに何年か勤めたことがある。人柄が明るく、ひとりで来店しても、他にひとりできている客と適当に話し相手などをしてくれ、俊恵にとっては、お店が込んでいたりする時には「手のかからない」客であった。部下を引き連れたり、取引先と来店した時などは、自ら大いに歌なども歌い、お店の雰囲気は大いに盛り上がるのであった。

客が少ない時は、俊恵や女の子にファッ

ションの話や、若い女の子に人気がある商品やテレビによく出ている芸能人の「生感」などを話してくれた。広告の関係の仕事をしているので、そういう話題にはことかかなかった。また海外の街々の様子、外国の人々の暮らし振りなど、坂本の話す話題には、みんなが吸い込まれるように聞き入った。みんなその博学多才ぶりには一目も二目も置いていた。そういう暇な時に女の子が相談する「大生相談」にも定評があった。

俊恵もそんな坂本を信頼していた。好意を持っていた。こんな人はどんな家庭をもっているのだろう、と想像したりもした。

俊恵が今宵、坂本を誘ったのには、ある「魂胆」があった。

「ねえ、坂本さん」

俊恵は焼き鳥の肉を、坂本のために串から外しながら言った。

「何だね、急に」

坂本は清酒「浦霞」を常温で、静かに口を含み、その香りを味わっていた。

「あのね、若い娘を紹介してあげようか」

「えっ、なに、えっ」

坂本は、口に運ぼうとした焼き鳥を止めた。

「いま、なんて言った。若い娘が何だって」

俊恵がいたずらっぽい目を坂本の方へ送った。

「いや、あのね、もし坂本さんがよろしければ、の話なんです」

「なに、そのもったいぶった言い方は」

「あの、坂本さんがよろしければ、若い娘をご紹介しようかなって・・・」

「ママ、正気な話？ 本当にそんなことしての。知らなかったなあ。銀座の商売も奥が深いんだなあ」

空いた徳利を少し上げて坂本は、今度は山形の清酒「十四代」を、前にいる板前に頼んだ。

「いや、あの、そんなじゃないのよ」

何なの。ママが何かいかわしい事をする
ようには思えないけど」

するわけないでしょ」
だよなあ」

俊恵は、焼き鳥をほぐした時に汚れた指先
をお絞りで拭いて、少し姿勢を正した。

あのね、坂本さんに折り入ってお願いがあ
るの」

えっ、何なの、それって、急に」

若い娘ってね、まだ十八なの。そしてね、
その娘、わたしの娘なの」

「えっ。あのあの・・・えっ」

坂本は、飲みかけていた杯を落としそうに
なった。

あの、ママって独身じゃなかったっけ」

独身って言えば独身よ。いまは相手がいな
いから。でも娘がひとりいるの。「一緒に住ん
でいるのよ。誰にも言わないでね。お客さん
には誰にも話してないから。多分、皆さん、
わたしは結婚してないと思っっているの。当
然、子供もいないと・・・」

「ええ、知らなかった。本当なの」

本当よ。今まで話さなくてごめんなさい」

「やいや、謝ることはないよ。むしろ、わ
たしだけに話してくれて嬉しいくらいだ」

坂本は、俊恵に酌をしてやった。俊恵が両
手で受けた。

それでね。わたしいままでひとりで、一生
懸命育ててきたの。片親だからといって、人
に後ろ指指されないように、自分を鬼にして、
厳しい躾をしてきたのよ・・・あの娘、中学
のころ本当に、わたしのこと鬼みたいだって
叫んで、夜、外へ出て行ってしまったことが
あったの。あちこち電話して探したけれどわ
からず、まんじりともせず夜を明かしたこと
もありました」

俊恵は、話していて感情が高ぶり、大きな
涙をボロリと落とした。自分のハンカチを探
して、大ぶりのかばんの中をゴソゴソしてい
ると、坂本が自分のハンカチを差し出した。

苦労をしたんだね」

坂本は、こんなドラマのような話が自分の
前で「本人」に語られていることが、少し信
じられなかった。そして、俊恵がどうして自
分に話すことにしたのか、見当がつかなかっ
た。自分がいつも「遊びに」いつているスナ
ックのママに、自分にもわからないようなと
ころを「評価」されて、「真剣な」相談事を持
ちかけられている。客には遊びでも、向こう
にしてみれば、職業柄、人をよく見ているも
のだと、これも、よく言われていることだが、
坂本にしてみれば身を持って体験したことにな
る。

「ごめんなさい。涙も拭いちゃった」

俊恵は、坂本のハンカチを両手で握り、縮
こまるように両腕を身体に引き寄せて、坂本
を上目遣いでチラッと見た。

でも、いまはあの娘も大分大人になって、
最近ではわたしをかばったりするような口も
聞くの。なんていうか、二人だけの家庭なが
ら、世代の交代みたいことが始まっているの
かなあ、と思ったりもするのよ」

それは、どこの家庭にもあるみたいだね。
依然として親が強くて、子供がひとり立ちで
きないところもあるけどね」

俊恵は坂本の杯に酒を満たした。

ところがね。中学くらいまではいいのよ。
何とかわたしでもできたのね。ところが高校
も二年、三年となると、ちょっと太刀打ちで
きなくなってしまうのね。自分の子だけど、
あの娘、頭もいいしね。理屈が立つのよ」
なるほどね」

それと、もうひとつ大事だと思うのは、男
の人の意見なのよ。女同士だと、親子でも井
戸端会議のどうどう巡りみたくなっちゃって、
親のわたしだって、やになっちゃうのね。そ
ういう、こんがらかった毛糸をほぐすのは、
男の人でなければできないと思うの」
そんなもんかね。そのくらいの年齢の娘つ
て、父親を嫌う娘もいるじゃない」

あら、同姓の母親を見くびって、父親を尊敬しだす娘もいるわよ。だから、わたし、娘と意見が別れて收拾がつかなくなるとき、いまだったら、大学進学の話とかね、そんな時、ああ、男の人がいたらなあ、と本当に思っちゃう。あの娘もそうだと思うわ」

わかった」

わかったって、何がわかったの」

「つまり、その娘の面倒をみる。違うかな」

ああ、やっぱり坂本さんね。わかる？ あのね、面倒見てくれ、っていうのと違うのよ。いくらなんでも、わたしそんなにあつかましくないわ。相談に乗ってやっていただきたいの、そういうときになったら。わたしもいろいろ考えたんだけど、わたしが知っている限りでは、坂本さんしかないの。いろいろなことも知っていらっしやるし・・・もちろん、娘もこのお話のことにはオーケーしているの。お願いしてもいいかしら」

うーん、義を見てせざるは勇なきなり、ともいっしねえ。でもさあ、何にもしちえいけないんだらうねえ」

なんにもって？」

だからさあ」

坂本は、俊恵見ていたずらっぽく笑った。

あのねえ、わたし、真面目なのよ！」

解った、解った。こんなことになるんだったら、早い内にママと何とかなっちゃえばよかったな。今となっては、両方ともダメだもんね」

ああ、よかった。やっぱり、こういうことは坂本さんでなくっちゃと思っていたの。恩に着ます。よろしくお願いしますね」

「段落といったところで、俊恵は坂本に次はどの銘柄にするかを尋ねた。坂本は、土佐の「司牡丹」を頼んだ。酒と新しい小料理が来たところで俊恵が言った。

ねえ、娘に会ってみる？」

あ、いいよ。いつ？」

いつでも。いま呼びましようか？」

えっ。近くにいろの？」

はい、資生堂パーラーにいるはずよ。電話してみるわ」

うわーっ、手はずがいいんだなあ、はめられたよ。ハハハ、参った、参った」

このようにして、坂本は俊恵の娘、百合子に初めて会うことになった。もとより、これはお店のほかのお客さんにも女の子にも内緒の話で、俊恵はその日以降も、それまでと変わらず、独身で嬢さん募集中」ということでお店に出ていた。

少し太っているの」

俊恵は、百合子が来る前に、そんな牽制球を投げて娘をかばった。

母親に、何か言い含められていたのかもしれない。資生堂パーラーから来た百合子は、緊張しきっていた。坂本のおおかたのことは、俊恵から聞いていた。しかし、考えてみれば、これは見合いみたいなものである。高校生が、自分の父親みたいな年配の男に引き合わされて、どんな対応ができるというのだろう。

百合子です」

そういつて、丁寧に礼をした。頭を上げて顔にかかった髪を手で後ろへ揃えた。髪が肩にかかっている。真っ白いブラウスに紺のセーターをかぶっていた。色白で、目がクリッとしている。とおった鼻筋や、やや力が入ってキッと結んだ口元から、静かな強い意志のある子のように見えた。

これじゃ、ママもかなうまい」

坂本は内心そう思った。しかし坂本には、百合子のどこが太っているかわからない。普通の高校生に見えた。ただ、礼の仕方とか、座る時の椅子の取り回しとか、何か同世代の高校生にはできないようなことを、自然にこなしているようなところがあった。

後刻、二人が親しくなってから百合子は、坂本に、俊恵が作法について 和裁の竹尺で

叩かれる」ほど厳しかったことを語ったことがある。お店では、にこやかな俊恵も、父親のいない子育てに、それこそ 命を賭けて」やってきたことが、伺われた。

硬い表情だったのは最初のころだけだった。三回、四回と会ううちに、百合子は坂本になつて」いった。学校や友達のこと、友達の男友達のことなど、屈託なく坂本に話せるようになっていた。父親や兄や弟など、男がいないところで育った百合子なのに、高校は女子高であったし、第一志望で入れたのも誰もがその名前を知っている女子大であった。

そのためかどうか、坂本には解らないが、坂本の発想が時々百合子を驚かせたり、感心させたりした。百合子は自分が、いつも決まりきった条件の中でしか頭が回っていないような気がした。相談事があって坂本に相談すると、坂本は百合子の考えを捕らえて離さない条件を、入れ替えたり、はずしたりしてしまふ。えつ、そんなこと、あり、なんですか」と百合子が思うようなことを、坂本はよくした。それは、男性の思考回路がそうなっているのか、男女に関わりなく、坂本がそういう人なのかは、百合子には解らなかった。坂本と一緒に考えると、自分でも頭の整理がうまくいった。坂本と別れるときは、気分が爽快になった。

百合子と坂本は、他人の目からは親子のようだろう。事実、百合子は坂本にほのかにそんな感情を抱くことがあった。坂本も自分に娘がいなかったのも、娘のようなつもりで可愛がった。

坂本は、百合子と会ったときに、若い娘から見れば洒落た店へ連れて行った。四ッ谷のドイツ料理店、新宿のエスニック料理店、六本木の飲茶の店、鳥井坂下の本格的なバーなど、若い娘が好みそうな店へよく連れて行った。百合子も雑誌などで探したお店に行きたいと、遠慮勝ちにせがんだりもした。

あら、いいわね。わたしなんか、そんなところ、いちども連れて行っていただいたことはないわよ」

俊恵は、百合子が坂本にあちこちへ連れて行ってもらい、相談事」にのってくれていることを聞くと本当に嬉しかった。百合子が以前より明るくなったような気がした。俊恵は別に、坂本に心を寄せていたわけではない。坂本の人柄を素晴らしいと思っただけである。しかし、楽しそうに坂本のことを話す百合子を見ると、自分が可愛がっていた人形を友達にとられてしまったような、幼な児のような気持ちになった。

百合子連れて行ったお店では、坂本はよく戸惑った。外資系の会社への勤務が長く、海外駐在もしたので、いわゆる女性優先の感覚が身についている。エレベーターへ乗る。椅子に腰をかける。あるいは荷物を持つ。そういうときの坂本の女性への配慮は気障っぽくなかった。百合子にもそのように接しようとするのだが、百合子はそういう西洋的な躰より、日本的な躰を受けてきた。エレベーターで二人で譲り合ったりしてしまう。入ったお店の入り口で、坂本が外套を脱ぐのを百合子が手伝ったりする。坂本は、自分でするかというのに、百合子の姿勢は一貫して変わらない。

百合子が大きめの荷物を持っているときなど、坂本が持つてやるからといっても、

男性にそんなことをお願いするわけには行きません」

と頑なである。

相談事」が終わって、話題はテレビのこととか、料理のこととか、学校のこととか、ま、他愛のないことを百合子はよくはなした。女の子はこんなにもおしゃべりかと思うほどである。男の子ひとりしかない坂本には、それはこころ和むひと時であった。

おしゃべりしながらでも、坂本は百合子の

仕草に俊恵の躰のしっかりしたところを見る。百合子の白く細い指に操られる箸の動きや、食器の取りまわしが自然である。ビール瓶や銚子の扱いも含めて、坂本がかつて自分で勉強したとおり」のことを、百合子は難なくこなしているのだった。

食事は元来、下品に食するのが一番美味しいらしい。犬を見ても猫を見ても、人を気にせず一心不乱に食しているところを見ると、ほほえましくさえ思う。人間だってひとりっきりの時は、音を立てようが、どのような姿勢で食べようが、食べ散らかそうが、勝手であるう。ところが、人前でそれをしたら、ほかの人に不快感を与える。ほかの人への配慮が作法であろう、と坂本は思った。見かけが可愛く、人柄が良くても、食事のときに幻滅する若い娘は多い。その娘の育ちに思いを馳せてしまう。百合子には、それがなかった。爽やかな感じがした。

あるとき、坂本は百合子からプレゼントもらった。坂本の誕生日が間近であった。包みから、それはネクタイであるとすぐに解った。曙橋にある小さなフランス料理店であった。百合子が以前に友達と連れ立ってきたところだという。

美味しくて、リーズナブルよ」

と百合子がいった。四人掛けの小卓が三つしかない。濃紺のクロスの上に真っ白なクロスが掛けられている。壁にはドライ・フラワーが下がっている。シャルル・アズナブールの唄が流れていた。

母から聞いたんです。坂本さんのお誕生日。これ気に入っていただけると嬉しいんですけど」

それは、ブランド物の上品なおとなしめのデザインであった。紺系である。ネクタイをどうしても贈りたかったこと、でも、坂本がいつものようなスーツを着ているか、どうしても思い出せなくて俊恵のアドバイスを

たこと、さらには、自分に納得のできる品がなくて、いくつかのデパートを半日も探し歩いたこと、などを坂本に一気に話した。百合子の目が輝いていた。

坂本は百合子を可愛いと思った。そういえば、きょうの百合子は口紅をつけていた。薄化粧もしている。それで、何か今日は大人っぽい雰囲気があったのだろう。いままでは、多分素顔のままだったのだろうが、坂本はそれに気がつかなかった。女子大に入れば、化粧の方法なども、先輩やませた同級生に聞くのだろうか。

坂本は、嬉しかった。ネクタイも嬉しかったが、自分のためにそんなにも時間を使ってくれた百合子が愛しかった。百合子は坂本がはずした包装用のリボンを起用に巻き込んでいた。

坂本は、着けていたネクタイをはずし、新品のネクタイを絞め始めた。百合子はそれを、じっと見つめていた。坂本が、それに気がついた。

どうしたの」

いえ、べつに」

だって、ずっと見ているじゃない」

おかしいですか」

いや、おかしくはないよ」

わたし、初めてなんです。男の方がネクタイを締めるのを見るの」

アズナブールの曲が、誰でも知っている「オザベール」に変わった。坂本は、遠いむかし、女友達との別れ話を新宿の喫茶店でしているとき、この曲が流れていたことを鮮明に想い出していた。

そうか、この娘は、そういう環境にいなかったのだ。男がいない家庭に育った百合子には、目の前で手際よくキュツ、キュツとネクタイを締めていく坂本をマジシャンのように思えたのだろう。

こうして百合子と坂本の、実の親子よりや

や濃密な 交際」は数年続いた。親子」の域を外れるようなことは、もちろんなかった。

オレンジ色の街路灯

百合子が、山縣が指定した待ち合わせ場所である新宿の外資系ホテルに着いたとき、降っていた雨も上がっていた。オレンジ色の街灯に、中央公園の雨粒を残した緑の木々が、鮮やかに映えていた。都庁庁舎の上のほうは、霧のようなものに巻かれて霞んでいた。

時間には、少し早かった。百合子は化粧室で化粧を直しロビーで、所在無げに外国人観光客相手の英語のパンフレットなどを見ていた。肩をツンツンと軽く叩かれて振り向いた。山縣だった。

「どうも。待った？」

微笑みも無く、山縣はボソツといった。坂本との待ち合わせに慣れていた百合子は、あれっ」と思った。肩のあたりが雨で濡れている。また降ってきたのだろうか。拭いてやろうとも思ったが、人目もあったので、百合子はそれを控えた。

ドイツ料理でいいか、と山縣が聞いた。良いも悪いもなかった。料理はともかく、百合子はドイツ・ワインが好きである。ライン川左岸の白ワインが好みであった。ブランドは思い出せないが、坂本といつか飲んだ葡萄のフルーティな香りいっぱいワインを覚えていた。山縣があまり張り切って、訳のわからぬ高価なワインを注文しないように、百合子は願った。

「何を食べようか」

山縣さん、ドイツにいらっしゃったでしょう。だから、何かお勧めがあれば、それを」

ドイツって、フランスと違って、あんまり洒落たメニューは無いような気がする。ドイツの人には悪いけどね。でもね、ジャガイモとか、アイスパインというあっさりした肉

料理もある。あとニシンのマリネ漬けのようなものとか。この店はどれでもおいしいよ」
それではコースメニューがおすすめですね」

男の給仕がメニューのそのあたりを指差していった。一品一品ずつを頼むと、ひとつづつの量が多いので、いろいろ味わえない。コース料理なら、代表的な料理を一通り食することができる、という説明であった。

「ワインはどうなさいますか」

という給仕の問いに、山縣はワイン・リストを見るまでも無く、といった様子で何とかというワインを頼んだ。

今日の百合子は、少しおしゃれをしたつもりであった。水色の無地の上下服で、上衣はショルダーパッドで形を整え、あとは柔らかな絹のような素材が身体のシルエットを自然に出す。ボタンも縫製上の模様も無く、腰で軽く同素材の紐で結ぶ。スカートは、タイトスカートであった。これに母に買ってもらったプラチナの細いチェーンにダイヤモンドのプチ・ヘッドがついたネックレスを掛けた。いつもよりややドレッシイという感じである。

室内には、ベートーベンのピアノ曲で、たぶん 悲愴」のどこかの部分が流れていた。

目ざとい坂本なら、髪を変えたり、少しおしゃれをしたり、化粧をしたりすると、必ず、何かいってくれた。国際的にも女性の対応に慣れている 大人」だったのかもしれない。あるいは、坂本の本質的な性格かもしれない。別には、百合子は山縣何かを言って欲しかったわけではない。若い人は、そういうものかと思っただけである。

「ミュンヘンって、どういうところなんですか。いつか行きたいと思っているの」

「うん、どうって。いろいろあるよ」

「ビールが美味しいとか」

あ、ビールね。うん、美味しい。というか日本と少しちがうね、飲み方とかね。第一、あまり冷えていない。日本ではギンギンに冷

やすじやない。あれじゃビールの味がわからないということが、ミュンヘンへ行ってから解った」

「ビアホールとかあるんでしょ」

ある。広おいところで、数人の生バンドが入っていてなかなか賑やかだよ」

おつまみとかは」

「これがね、量が多いの。だいたいがソーセージとか、ジャガイモとか、あとザワークラフトって知ってる？ キヤベツを醗酵させて酢でいためたものね。向こうの人って、あんまりそういうのをオーダーしなくて、何か、ビールだけをひたすら飲んでるって感じだよ。僕ら日本人は食べ物を頼むけど、誰かひとりが頼めば十分。だって、こんなに大きな皿に山盛りで、いろいろ乗っている。ひとりで一皿頼んだら、あとで夢見てうなされそうだよ」

山縣が頼んだワインは、ドイツの家庭でテーブル・ワインとしてよく飲まれている銘柄だそうである。やや甘めで、葡萄の香りがして、こころもちアルコール度数が低そうだった。グラスがすすんでしまう、と百合子は思った。母に飲ませてやりたい、とも思った。

山縣は、ドイツの鉄道の時刻表が素晴らしいことを話した。日本のようにすべてを一冊にまとめてはなく、その駅から行き先別に分冊になっていること、駅への到着時間、発車時間、各停車駅での接続列車名、時刻などが、その頁に集約されているというのだ。日本の時刻表のように、接続のために、あっちこっち、時刻表をひっくり返さなくてもいいのだという。それがドイツ式合理主義だと、山縣は百合子に説明した。

百合子は、山縣の話を彼の顔を見ながら聞いていた。話しはそれなりに、興味を惹かれるところがある。ドイツの食べ物の話、気候風土の話、ナチの強制収容所の話など、ジャーナリストらしく要領よく説明してくれた。

ブルーに水玉模様のネクタイとグレー系のスーツの組み合わせも、何となく気品を感じ

じさせるものがある。「このネクタイ、自分で選んだのかなあ」と思わせるほど、感じのよいものであった。

ただ、百合子は、ふと、あることに気がついた。山縣は、このレストランに入ってからまだいとも百合子の目を見ていないことだった。先ほども、食べ物の汁が山縣のジャケットの袖に飛んだ時、百合子は反射的にそれを拭いてやった。そのときも、

あ、どうも」といったきりであった。

山縣は、食卓の蝋燭とか、「輪挿しとか、ワインのボトルを見ながら話していたのだった。

百合子は、若かうと年配であろうと、二人だけの食事というのは、あまり経験が無かった。学生時代は、女子大だったこともあった、若い男性がいつもそばにいるわけではなかった。合コン」という男性女性が集まっていた飲み会の流れで、帰り道が同じ方向の男性と一緒にあったりすると、胸がドキドキしたりしたものだった。その後、坂本とよく会うようになってからは、そういう点での「免疫」はできた。しかし、坂本は「お父さんのよう」にすべてを包んでくれていた。

出版社に就職して、作家先生の「番」になると、このわがままほうだい「だだっ子」のような人種への対応にも慣れてきた。慣れてもいないし、興味もあったのが山縣のような若い男性であった。とはいえ、誰でも言い訳ではなかった。山縣と食事をしようと思ったのは、取り立てて断る理由も無く、時間的にも無理が無かったからである。しかし、それだけでは、あまりにも山縣に失礼である。百合子は、自分はやはり、山縣に幾ばくかの興味と期待を持っていたのかも知れないと思った。

山縣はなぜ、わたしを誘ったのだろうか。百合子は、自分の目を見ないで話す山縣のころを思った。わたしのどこを気に入って、食事に誘ったのだろうか。誘うまでは乗り気

でも、今日、わたしに会ってから、何か気に障ったことでもあったのだろうか。

山縣の話も上の空に、いろいろと考えあぐねていると、

ね、バーへ行かない」

突然のように山縣の声が聞こえた。初めて、目を向けてきた。微笑んでいる。百合子は、ホッとしたものを感じた。

話をするとき、目が「通じない」のは不安である。坂本だって、しばしば百合子の目を見た。

そうだと、百合ちゃん」

という言葉も何回も使う。母だって、手仕事をしていたても、その合間合間に、百合子へ視線を送ってよこす。二人の視線と視線が「握手」して、ぬくもりを瞬時に交換する感じが、百合子に安堵感をもたらしていた。

山縣の視線を受けたことで、それまでのモヤモヤが少し晴れた。百合子は嬉しかった。今日、来てよかった、と思った。

バーは、そのホテルの最上階にあった。バーテンが窓を背にしており、カウンターに座った客は窓越しに、宝石をばら撒いたような東京の夜の明かりを堪能できる、という仕掛けである。東京タワーとかデパートの屋上とか、母と高いところから見た東京は、いつも昼間であった。坂本が、初めて連れて行ってくれた帝国ホテルのラウンジからも、夜の東京が見えた。百合子には、初めてだった。きれいだった。電車に乗った子供が、外の景色を見ようと、膝で座席にたつように、百合子は年甲斐も無くはしゃいでしまった。

夜の東京を見るのは、それ以来である。

山縣は、夜景を見ながら、ドイツのノイ・シュバン・シュタイン 白鳥 城の話をしてくれた。形がきれいなその城は、デイズニランドのお城のモデルになったとも言われるそうだ。百合子は、母といった東京デイズニランドの城を思い出した。

酒が入った加減か、山縣は早口で饒舌になった。時々、百合子のほうを向く。

外国語大学でドイツ語を専攻した山縣は、一流といわれる新聞社に入った。二カ月の研修を受けた。研修中には、早朝、といってもほとんど深夜に印刷所を出る新聞配送のトラックに乗り、新聞をおろして回る現場仕事も手伝った。配属は、外報部だった。外報部といえ、みんな英語は達者かと思うが、案外そんなことは無く、したがって、外語大上りの山縣ら新入社員は、もっぱら翻訳に追われた。二年間の、そのような勤務のあと、ミューンヘンに欠員ができたので赴任となったのである。

話に夢中になっていた百合子は、化粧室に立ったとき、時間が迫っていることを知った。終電車になるかもしれない、と思った。山縣に礼をいって、帰りたいことを知らせた。

あ、ごめん。送っていくよ」

大丈夫です。まだ終電車に間に合うと思います」

でも、痴漢とかいるっていうじゃない。あの、ママって今日僕と会っていること知っているの」

はいえ、知らないわ。報告ときましようか」

百合子は、すこし意地悪をいって、山縣に微笑んだ。

雨上がりの路上に、いくつもの水溜りができ、オレンジ色の街路灯を映していた。ケヤキ並木の歩道に、人は少なかった。二人連れが、ゆっくり歩いていた。駅へ急ぐ百合子を追うように、山縣も足を速めていた。途中、壁が斜面になったビルの敷地を斜めに横切る。階上には東郷青児美術館がある。敷地の中には、深さがあまり深くない幾何学模様の西洋風の池があった。池のほとりにベンチがある。山縣が百合子の袖を引いた。植え込みと石段の死角になっているようなところだった。振

り向いた百合子の唇を、山縣の唇が、上から覆い被さるようにふさいだ。

あっ」

百合子のその声は出なかった。百合子は、腕を伸ばして山縣の胸を離そうとした。無駄であった。山縣は腕を巻きなおして、百合子がつぶれないように、しかし、しっかり自分の胸の中に収めた。百合子は、小鳥のようにもがいた。山縣は、いちど離れた唇を再び、百合子の柔らかい唇に押し付けた。

百合子は、何がどうなったのか、一瞬、解らなかった。山縣が二回目のキスをしてきてから、胸の鼓動は大きく波うち、耳がほてっていくのが解った。膝が崩れそうになるのを、必至にこらえた。

崩れそうな百合子を、山縣は優しくベンチに腰掛けさせた。座らせる前に、ベンチにハンカチを投げた。

百合子は、半開きの自分の唇に指を当てた。そこが痺れているような感じだった。

「ごめん」

百合子の方に向いて、半すわりの形で腰を掛けた山縣は、そういつてこっくりするように頭を下げた。百合子の頭は混乱していたけれど、別に、謝ってくれなくてもいいのに、と思った。山縣が突然そんなことをしたのに驚いたのだった。でも、キスしてもいいか、といわれて、ハイどうぞ、とも行かないな、と思った。

時間がたつとともに、百合子のころの高ぶりは平生に近づいていった。百合子は、山縣にもっと何かいって欲しかった。

隣のベンチでは、若い男女が抱擁して動かなかった。百合子がゆっくり立ち上がった。池にビルのネオンが揺れていた。ビル風が舞い上げた髪を百合子は押えた。

タクシーで送っていく」

大丈夫、まだ電車はあるわ」

もう少し、「一緒にいたい、いいだろ」

山縣は百合子の肩をそっと包んだ。百合子

は、自分で自分の意志が制御できないでいた。二人で、タクシーが流れている青梅街道の方へ歩いた。人目が届かない植え込みへ差し掛かった。立ち止まって山縣は、百合子のあごへ手をかけた。百合子は、そっと目を閉じた。

赤い糸

十五周年の小宴以来、百合子は一カ月に一、二回は「甲斐」へ手伝いに出るようになった。ほかの女の子たちもママも、そのまま街を歩いても全然おかしくない服装なので、百合子も通勤服のまま「甲斐」へ寄った。手伝うといっても、ママは百合子を客席で接客させるようなことはせず、カウンターの中でおしぼりやグラス、氷を用意したり、洗い物をしたり、カウンターの客の相手をしたりするくらいだった。

その日は、台風が近づいているとかで、客足は遅かった。しかし、グループ客の予約があったので、俊恵は百合子の応援を頼んでいた。それでもすでに二組の客があり、女の子や俊恵は小卓席でその接客に追われていた。そのとき、ふらっとひとりで現れたのが吉田であった。小さいながら貿易会社の社長をしている。母から吉田のことは聞いていたが、十五周年の小宴で初めて会い、どこかであったような「印象をもった、その男性であった。

雨の中を傘を差していなかったのか、紺のスーツの肩のあたりが濡れている。百合子は反射的におしぼりを二、三本もって、カウンターを飛び出した。一本を吉田の顔拭き用に渡し、あとのおしぼりで、吉田の肩のあたりを軽く叩いて水分をとった。俊恵が寄ってきて、

あら、濡れちゃって。上着、お脱ぎになったら、乾くから」

といって、脱ぐのを手伝った。百合子の仕事を、横取りしたような形になった。

百合ちゃん、これ、お掛けしておいてね。
あ、吉田さん、じゃ、こちらへお座りになっ
たら」

あ、ありがと、ありがと。親子で歓迎とは
嬉しいね。うちへ帰ってきたようだ」

吉田は、うすいグレーのシャツに、紺系の
無地に白い水玉模様のネクタイを緩めた。

吉田さんのボトルはその二番目」

はい。吉田さん、水割りですか」

ああ、そうしよう」

百合ちゃん、吉田さんは、最初の一杯は薄
めね。後は普通に。それから、おつまみは、
乾き物は召し上がらない、ね、吉田さん。ブ
ルーチーズかチョコレートがいいと思う」

百合子には、俊恵が少しはしゃいでいるよ
うに感じた。

吉田は、国内の出張帰りだといった。食事
は済ませたといった。

よく、来るの」

吉田が「甲斐」で百合子に会うのは、初め
てであった。

はいえ、月に一、二度です」

あ、そう。わたしはラッキーというわけだ
ね。会える確率は低いわけだから」

あら、わたしのほうこそ。先日のパーティ
でお会いしてから、いつ吉田さんにお会いで
きるかと、実は楽しみにしていました」

百合子は、俊恵のほうにチラッと視線を送
りながら、そういった。

おやおや、おじさんをずいぶん喜ばせてく
れるね」

吉田と百合子は、始めのうちはぎこちない
会話をやり取りしていた。趣味の話になって、
百合子は吉田が大の山好きなことを知った。

中学時代からだから、年数的には経験四十
年以上のベテランだけどね、ハッ、ハッ、ハ

吉田は、きれいな白い歯を出して笑った。

吉田が話してくれた北アルプスや八ヶ岳の
話に、百合子は惹かれた。小さい高山植物の
花が群生しているという「お花畑」。

自くて可愛いハクサンイチゲはきみのよう
だね」

と吉田は百合子を冷やかしながらいった。

自馬岳の大雪溪の斜面にねえ、小さくて黄
色いミヤマキンポウゲっていうのが一面に群
生してるんだ。これに出会って疲れを忘れる
よ。それから夜になるとね、たくさんの星が
手の届きそうところまで降りてきそうだと。
ほろ酔いでね、外に出ると夏でもひんやりと
した空気がなんとも言えず美味い。いつも男
ばかりだけどね」

吉田は、ブルーチーズをかじりながら、濃
い目の水割りを一口ゴクツと飲んだ。

店には、有線放送を使つてのモダン・ジャ
ズが流れていた。カラオケを使つていないと
きは、いつもモダン・ジャズであった。吉田
は学生時代にモダン・ジャズに夢中になった
ころがあった。マイルス・デイビスの「スケ
ッチ・オブ・スペイン」や「アランフェスの
協奏曲」などが好きであった。哀愁ともなん
ともいえないサックスの音は、当時の吉田の
心を癒した。俊恵は、モダン・ジャズに詳し
いわけではなかった。ただ、好きなだけだと
いつていた。

そういうとこって、わたしでも行けますか」
お、行く気になってるな。どこか、今まで
行ったことはあるの」

あの、高尾山なら」

百合子は、恐る恐る、東京近郊の山の名を
いった。ケーブルカーで頂上付近までいける
ハイキング・コースである。

高尾山ねえ」

そこへ俊恵が、氷を替えにアイスペールを
もって割って入った。

由の話？ 百合ちゃん、あなたには無理よ。

吉田さんてベテランよ」

あ、ベテランでも初心者でも、関係ないよ。
パーティで行く時は、体力が一番弱い人に先
頭を歩いてもらって、山登りのペースをその
人に合わせるから」

吉田が、百合子を助けた。

あの、わたし体力は自信あります。学生の時、テニスをしていましたから」

あ、それなら大丈夫」

予約のグループが来るまでの小一時間、幸いにも、百合子は吉田を「独占」して話をすることができた。吉田は、静かな話し振りの中に、とくとくと語りかけてくる。ついつい「それで」といいたくなるような「語り部」であった。吉田は百合子の目を見て話す。若い人のように嬉々として山を語る、音楽を語る、食を語る。吉田の目は、輝いていた。百合子の仕事の手は、話を聞いていると止まってしまう。

百合ちゃん、お酒作ってくれるかな」

吉田がいった。

あ、済みません。つい、お話に聞きほれちゃって」

「こら、また、おじさんを喜ばせて」

「晩の、わずか一時間にも満たないうちに、こんなに親近感を覚える人は、百合子にはいままでにいなかった。十五周年の小宴でのインスピレーションは「当って」いたのかも知れない、百合子はそう思った。

翌日、百合子は吉田に電子メールを送った。

吉田は仕事でいつも英文メールを使っている。日本語のワープロもゆっくり話すくらいの速さで打つ。メール・アドレスは彼専用で、他の社員は自分たちのアドレスを持っているので、吉田のメール内容のプライバシーは完全に秘匿できる環境であった。百合子は、そのように吉田から聞いていた。

さっそくのメールで申し訳ありません。でも、すぐ打ちたくなってしまうのです。昨夜は、とても楽しい時間をありがとうございました。ありがとうございました。久しぶりに「こころ和むひと時でした。あつという間に時間が経ってしまって、その点は残念でした。山のお話をもっとお聞きし

たいと思います。今日のお昼休みに、山登りのガイドブックを買ってしまいました。吉田さんは、甲斐」へは今度いつ行かれるのですか。近い内にお会いできたらと思います」

何回も読み返して、失礼かな、と思いつつ、百合子は「えいっ」と、送信ボタンをクリックした。

百合ちゃん、メールをありがとう。若い娘からメールなんてあんまりないから、嬉しかった。甲斐」へ行く日はとくに決まっています。君が行けるとき、メールか携帯で知らせてください。都合がつけば行きましょう。携帯の電話番号は名刺にあります」

次に吉田が「甲斐」へ行ったのは、それから三週間くらいしたころだった。それまで百合子も「甲斐」へ行っていなかった。

客足も一段落した十時少し前、俊恵は、カウンターに客が帰ったあとを片付けていた。そのとき、吉田が「甲斐」のドアを開けて入ってきた。

「いらっしゃい。あら、吉田さん。こんばんは」

俊恵は、吉田のかばんを受取ったり、上着を脱ぐのに手を貸したりしていた。吉田がカウンターの席に着いた。例によって、俊恵は吉田のボトルのありかや、吉田の飲食の好みなどを、こまごまと百合子に指示をした。

解っています」

百合子は、いわれるまでもない、というふうに、ゆっくりと答えて微笑んだ。すでにボトルはカウンターに出されている。

あれ、あなた方、あやしい、と思うんですけど、偶然なの」

なんで？」

と、吉田が言った。

だって、この前あなた方、あら、やだ、あなた方、なんて言っちゃって、その、あなた方がここで会ってから、二人ともずっとこな

くて、そして今日でしょ」

さすがに、俊恵はすぐに気がついた。俊恵は万事につけ勘がいい。偶然にしてはできすぎている、と思ったのだ。

あ、そうかな。わたしはあの日以来だけど。百合ちゃんもそうなの」

吉田はとぼけた。

そうよ、だってこの娘、本業がずっと忙しかったのよ。締め切りが過ぎてても、先生がなかなか書けなかったんですって。だから、あの日以来よ。でしょ？」

俊恵は、百合子を見やった。

ま、いいじゃん。赤い糸だよ、赤い糸」

吉田は陽気に笑って、一杯目の薄い水割り、ビールのようにひと口で半分も飲んでしまった。

俊恵は、二人がどういう経緯で「甲斐」に

集合」したのか、百合子がすっかり大人になったいまは、まったく心配していなかった。

吉田も坂本同様、「甲斐」のお客様の中では、俊恵のお気に入りのお客様であつたからだ。

しかし、このまま「放置」しておく、百合子は吉田を、俊恵の目の届かないところへ連れて行ってしまふかもしれない、そんな嫉妬心が俊恵のこころの片隅に小さく渦巻いた。

百合子は、口数も少なく所作も落ち着いた娘ではあつたが、決めたことをやりとおす意思の強い娘であつた。そのように育てたつもりはないが、父親のいない環境がそうさせたのかもしれない。

二階のお兄ちゃん

俊恵が「甲斐」を始めて五年ほど経つたころだった。ひとりの常連客に連れられて、二人の新規客があつた。すでにどこかで会食してきたのだらう。三人で楽しそうに話をし

ながら「甲斐」のドアを開けて入ってきた。

コートやかばんを受け取って、三人を小卓席へ案内し、女の子をひとり同席させた。そこまでは、俊恵にとっては、毎日の慣れきつた動作である。他にもお客さんが入っていて、いつもカウンターの中间にいる子も別の小卓席につけていたので、俊恵は自分でアイスペールやグラスやらを手速やにそろえていた。

確か、お二人は初めて・・・

俊恵は、職業柄失礼にならないようにチャッ、チャッとお客様を「観察」してしまう。と、俊恵の手が止まった。もう一度、新規客のひとりに目を凝らした。胸の鼓動が高鳴る。俊恵は深く息を吸った。談笑しているその客の口元。白い歯。その笑い方。俊恵の鼓動は速さをどんどん増していく。立ちくらみになりそうだった。

「二階のお兄ちゃん！」

うつそお、何で。他人の空似かもしれない。でも、どうしよう。何で突然現れるの」

俊恵は、カウンターの柱の裏に貼り付けた鏡で、化粧を確認して、その小卓へ進んだ。心臓は鳴り止まない。

「いらっしやいませ」

常連客が、俊恵を二人へ紹介し、二人と自分の関係をごく簡単に俊恵に紹介した。やっぱりそうだった。常連客は、片方の客を吉田と紹介した。「二階のお兄ちゃん」の姓は吉田であつた。吉田が、俊恵を凝視した。笑顔が消えた。口がパクパクしているように見えた。俊恵の名刺と、俊恵の顔を交互に見比べるように見た。「俊恵」は、本名である。

お久しぶりです」

と、言ったかどうか、俊恵は覚えていない。多分、そういったはずだ。吉田が、何か言葉を返したようだった。俊恵は、ほとんど上の空であつた。

なに、ママと吉田は知り合いなの。こら、吉田、おまえどうなってるの、知ってるなら知っているって言えばいいのに、みずくさい

奴だなあ。まあ、いい。乾杯しよう、乾杯、乾杯」

みんながどっと笑って、一瞬の固い雰囲気が吹き飛んだ。

俊恵は、吉田がトイレに立つ機会をうかがっていた。吉田がそうしようとした時、俊恵は他の席にいたが、自ら立上がって吉田に近づいた。また胸が高鳴る。

お兄ちゃん、よね。お元氣そうね」

客の目が避けられる一角で、二人になったとき、俊恵は、それ以上なにを言っていないか解らなかった。吉田のシャツの袖を親指と人差し指できつく挟んでいた。吉田のやさしい目があった。

「ここで会えるとは、夢にも思わなかったな」わたし、びっくりしちゃって。何かもつと氣が利いたことでも言えればいいのに・・・」わたしもだ」

吉田は、片手を俊恵の肩においた。

「・・・別の日に会える？ 後で名刺を渡すから、連絡をくれるかな」

うん」

俊恵は、高校生のころのような返事をして、吉田の目を見上げた。お兄ちゃん」と突然会えたことで、俊恵は喉に熱いものが一気にこみ上げてきて、後は言葉が見つからなかった。目の前が涙でぼやけてしまった。お兄ちゃん」がハンカチを差し出してくれた。それは、二人にとって三十五年ぶりの再会であった。

時 効

吉田は、渋谷のハチ公前で俊恵と待ち合わせた。平日だと、俊恵は 甲斐」へ行かなければならない。積もる話もあるうかと、俊恵が休日の夕方を望んだ。

俊恵は、朝から何を着ていこうかと、姿見の前で、あれやこれやと衣装を身体に当てて

みた。あまり華やいだものは、吉田が好かないだろうし、そうかといって老けて見られるような落ち着いた服にも手が伸びなかった。午後になって、とりあえず美容室に行くことにした。その間に考えればいいと思った。髪型は別に悩まなかった。俊恵は仕事の時も、私用のときも同じ髪型だからだ。肩まで流れる髪を少し内側に丸めただけの平凡な型であった。美容室の帰りに、今夜着ていく下着を見て回る気になって、いつものランジェリー・ショップへ立ち寄った。そうこうするうちに、着ていくものも決まると思った。結局、ややくすんだ緑系のスーツにして、茶系のデザインのうるさくない小振りのバッグ持っていくことにした。

おながが空くように、少し歩いていこう。

その靴なら少し歩いても大丈夫でしょ」

そういって、吉田は先に立った。

二人は東急百貨店本店を回りこみ、松涛町の住宅街へ入っていった。俊恵は、吉田にどのようなについていいかわからなかった。二人並んで歩くのも少し氣が引けるし、かつて吉田が学生のころ書店へ行くのに随いていったように、右に左にと子犬のようにまわりつくわけにも行かなかった。懐かしさがこみ上げてきて、あまり話もできないでいると、

「こだよ」

と吉田が、一軒の瀟洒な民家の前に立った。おおよそ飲食店とは思われない。民家の普通の大きさほどの表札のタイルに、その店の屋号が筆字で書かれてあった。

民家のような玄関にはいる。吉田が案内を乞うと、普段着に花模様の前掛けをした長い髪の若い女性が出てきた。吉田が自分の名を告げると、

「いらっしやいませ。お待ち申し上げておりました」

と、膝を折って微笑み鄭重に対応した。

中は民家そのまま、十畳間とか八畳間には、一、二組の客が食事をしていた。俊恵と

吉田が通されたのは、四畳半のこじんまりした部屋であった。献立は特になく、亭主がその日の仕入れにより適宜按配して供する。もちろん和食であった。

俊恵は、何から話したのか思案していた。吉田も同じ思いであった。最後にあったのはどこであったろう。吉田が俊恵の家を引き払う時だったか。そうだ。あの時が最後だった。引き払うといっても、今の学生のように家財があるわけではなし、本ばかりをいくつものダンボールに詰め、自転車で何回かに分けて少し離れた日通の営業所まで押して運んだ。この頃のように宅急便などはなかった。俊恵は荷台のダンボール箱に手を添えて、吉田といっしょに何往復かした。いつもおしゃべりな俊恵が、そのときは寡黙であった。帰りに荷台に乗せた俊恵の、まだ硬かった胸が、吉田の背中に押し付けられていたのを、吉田は昨日のように想い出していた。

何年ぶりかな」

吉田が桜湯の湯飲みを置きながらいった。そうね。何年かしら。わたしなんかもうすっかりおばあちゃんになっちゃったわ。三十年以上になるんじゃないかしら」

三十年以上か。吉田は自分の歳から、大学を卒業した時の歳を引いてみた。三十年はゆうに超えていた。吉田が大学を出る年と俊恵が短大に入った年は同じ年だった。

突き出しが運ばれ、俊恵は仲居に下がってもらって、自分で吉田に酌をした。

わたし、何回かお手紙を差し上げたわ」

うん、覚えている。返事を返したと思うけど」

はい、二回いただきました。．．あの．．．いまごろ話しても仕方のないことなんですけど、わたし、待っていたのよ、お兄ちゃんを」

俊恵が、吉田の目を見て微笑んだ。

吉田は、一瞬、自分の耳を疑った。待っていた？ 俊恵は、今確かそういった。わたしを待っていたのか。

吉田は、当時、俊恵のことを快く思っていた。妹みたいな感じだった。おにぎりを学校まで届けてくれたり、果物や煮物を部屋へ届けてくれたり、本屋や定食屋にも付いてきた。

しかし、吉田は俊恵に恋心があったわけではなかった。とはいえ、あの時の吉田と俊恵の関係がもう少し続けば、吉田の俊恵に対する快しとする気持ちも、恋心へと熟成していたかも知れない。吉田は、取り返しのつかないレールの上を、もう三十年以上も走ってきってしまった自分に気がついた。当時、俊恵のことを「まだ高校生」と思っていたが、いま思えば四歳しか違わない。おませな東京の女子高生なら、恋心を募らせ、結婚のことを考えても不思議ではない。結婚とまでは行かなくとも、ともに信頼できる相手として交際していきたかったに違いない。むしろ、田舎育ちの吉田が、鈍感すぎた嫌いがある。吉田は、言葉もなかった。

吉田が困っているのを見て、俊恵が助けて声を掛けた。

あら、そんなに困らなくてもいいのよ。まだ待ってる、なんていわないから。でも、ずっと待ってたの。いつか音沙汰があると思って．．．。亡くなった主人にプロポーズされた時も、どうしようかと本当に迷ったの。でも、とてもいいひとで．．．、あら、お兄ちゃんの前でごめんなさい」

いやあ、そうだったの。本当に気がつくなくて、そりゃあ申し分けなかった。このとおりだ、許してください」

吉田は、食卓に手について深々と頭を下げた。

あらあら、お兄ちゃん、およしになってください。もう時効ですよ」

時効か。時効でも、犯した罪は消えないねえ」

吉田は、過ぎ去った自分の三十有余年を思った。自分も別れた妻と結婚する時、俊恵のことに思いを馳せたが、それは、どうしてい

るかな、位の思いであった。しかし、妻と別れた今となっては、そのころ、俊恵をなぜもっと大事にしなかったのか悔やまれた。

もし仮に俊恵と結婚していたなら、今ごろはどうなっていただろう。やはり、別れるようなことになっていくだろうか。しかし今となっては、どうにもならないことであった。

俊恵は俊恵で、同じようなことを考えていた。吉田と結婚していたなら、まったく違った生活をしていただろう、と。

ふと気がついたら、バッハと思われるチェンバロの演奏が、じやまにならない音量で流れていた。和食にチェンバロもいいものだと思はれた。俊恵は思った。昔、吉田の部屋で教えてもらった曲であった。

大学を出た、といっても、卒業式には田舎の両親が出ただけだった。吉田は「同志」たちとともに、卒業式をボイコットしたのだった。卒業式を学生たちが妨害し、生卵が投げられ、首を切られた生きた鶏が壇上を飛び交う騒然たるものだった。就職することすら、「体制」に順ずる「軟弱者」と見られた。卒業後をどうするか思案するために、裕福な家庭の子息たちはさらに一年留年した。吉田は、奨学金で大学へ行っていたので、五年目からの学費は無かった。就職を選ばざるを得なかった。

吉田は、友人たちに内緒でひそかに受験した地方新聞社に合格していた。編集に配属されるという「合格者」十一人は、総務部長も入れ、新聞社のある県庁所在地で「祝賀会」をしてもらった。東大の「安田闘争」が、まさに陥落せんとしていた。

宴会は盛り上がった。

地方新聞の記者ともなれば、ジープも運転してもらわなくてはならない。ジープを運転できる人はいますか？」

その時手を挙げたのは、吉田ひとりであった。吉田は、仕送りが無かったので、奨学金

とアルバイトの稼ぎですべてをまかなわなくてはならなかった。トラックの運転手と家庭教師をしていた。ジープの運転などは、朝飯前のことであった。

あとは、念のために身元調査をさせていただいている。ま、それで落ちる人もいないだろうから、この十一人があなた方の同期ということになりました。頑張ってください」

総務部長は、そう挨拶を結んだ。

しかし、実際のところ、吉田は不合格通知を郵便で受け取った。納得できない吉田は、総務部長に電話を入れた。食いが下がった。

しかし、吉田さん、わたしどもはあなたに合格通知を出した覚えはありませんよ。もし、あなたが反証をあげて話を進めるなら、そうしていただいて結構です」

吉田は、「企業」というものの狡猾さに、齒軋りをした。学生から実社会への入り口で、思いっきりぶちのめされ、悔しさが沸騰した。

吉田は、俊恵の家の下宿を引き払い、いったんは実家に帰った。しかし、そのまま実家のある地方都市で職を得るのは、気が進まなかった。新聞記者なら、自分の力が発揮できそうだった。しかし、役所や、農協や教員になって、自分に何ができるだろう。人の役に立ちそうもない。俊恵のことも、気にはなっていたが、自分の緊急最大課題のまえに、俊恵の面影は霞みがちであった。昨今のように、携帯電話も、電子メールもなかったもので、まさに「去る人、日々に疎し」であった。

そんなころ、サンフランシスコに留学中の高校時代の講師Yから、便りを受け取った。彼の嬉々とした近況を読むうちに、吉田は自分もサンフランシスコへ行こうと、急に思い立った。Yの居所に転がり込む了解を取り付け、片道切符の代金を何人かの友人から借り、サンフランシスコへ渡った。

英語もできない吉田は、サンフランシスコの地元新聞で求人広告を探し、何回か面接して、日本食レストランの皿洗い、駐在員家庭

向け食品販売の添乗補助員の仕事などを見つけた。あとになって、ナパ・バレーのワイナリーで倉庫整理の仕事も見つかった。ナパ・バレーはカリフォルニア・ワインの産地として知られている。

そうして二年をサンフランシスコで過ごした。Yの帰国と一緒に吉田も帰国した。

帰国後、縁があつて、米国の貿易企業の本支社に就職の口を見つけた。以後二十年間、吉田はかつて学生のころ否定していた 米帝国主義の手先」として、昼夜を忘れて献身した。五十歳を前に独立し、今では社員五人ほどの小さな貿易会社を経営している。

いっぽう俊恵は、吉田の「行方」を大いに心配していた。吉田の卒業後、彼の実家へ、氣を遣つて男の名前で手紙を何回か送った。返事は二回ほど来て、後は途絶えた。俊恵は二人の仲は「あのまま」で終わってしまうのだろうか、と幼い胸をいためた。

短大を出て就職した先で、俊恵は、営業の次期課長」と誰もが思っていた快活な青年から求愛された。熱心な男だった。直球しか投げられないような青さが、前面に出ていた。食事をして楽しかった。テニスも上手だった。彼の友達との飲み会にもよく誘われた。彼は、友達から冷やかされながらも、俊恵を手抜きなくエスコートした。俊恵は、それがとても嬉しかった。彼は、わたしのことしか考えていないのが十分解っていたし、俊恵の心の中では吉田の心象も薄くなっていた。

当然のように、職場の上司の仲人で結婚した。順調に百合子が生まれ、家庭生活は 幸せを絵に描いたよう」に、誰もがうらやましがった。

そんな幸せな家庭が、一転して魔のどん底へと突き落とされた。そんなにたやすく起こっていいのだろうか、と思える事件が発生したのだ。

俊恵の夫が、海外出張中、スイスとオース

トリアの国境付近の山岳道路で、氷結した路面にハンドルを取られ、同僚と二人ともクルマごと崖下へと転落した。クルマは大破して炎上した。どちらが運転していたかは定かではなかった。

三歳になる百合子を抱えた俊恵は、悲しみのうちに途方にくれた。実家が都内にあったのは、不幸中の幸いといえよう。母に百合子を預け、いくつかの職についたが、いずれも時間給勤務で、親子二人とはいえ生活は容易ではなかった。

そんなあるとき、人づてに銀座の酒場で働かないか、との案内を受けた。考えても見なかった職種だが、背に腹は替えられない。収入もそれまでよりずっとよかった。昼間、百合子の育児は自分がし、夜、働きに出るときは百合子を母に預けた。寒い時期は、深夜に、眠っている百合子を実家から自宅へ移動するのはかわいそうなので、俊恵も実家に泊まって、朝、自宅へ帰るという生活が続いた。

俊恵は、今でもそうだが、昔から、見かけも性格も「飲み屋の女」らしくない。そんな素人っぽいいところが気に入られて、俊恵目当ての客が増えていった。

四十歳を目前にして、「甲斐」を開店することにした。目鼻立ちの整った俊恵は、まだ若い子に引けを取るようなことはなかった。しかし、いつまでもその店にいられるわけでもない。惨めな気持ちになってから辞めるより、まだまだ気分が張り切っているうちが頃合いとみた。客の中には、資金を都合してくれるといってくれる人もいたが、それは鄭重に断った。何か、そうした融資が、将来足かせになりそうな気がしたからだ。俊恵は、店では子供がいることは伏せていた。言い寄る客は、何人かいた。しかし、客と食事をしての「同伴出勤」には業務上の必要性から応じることはあったが、情を交わすようなことはなかった。亡き夫へ操を立てるのは当然のことながら、そんなことをして身を崩しては、

百合子と自分を支えている生活の機軸が一気に瓦解してしまうように思えたからだ。

しかし、生身の女盛りに孤闘を守るのは辛いことであつた。誰にもいえない身体の疼きと精神的な孤独に、ひとりで耐えた。それは、単に男に抱かれて肉体的な悦楽を得たいということだけではない。すべてを許しあつて、羊水に包まれたような絶対的な安心感と信頼感の中で、「二人でひとり」という感覚に浸りたかつた。すべてを自分で決めなければならぬ辛いから、ひと時でも開放されて、男のふところの中で甘えてみたいと思つた。

「積もる話」とは、こういうものか、と俊恵は思つた。食事をしながらお互いのこれまでのことや、吉田が俊恵の家に下宿していたころの話を、あちらへ飛び、こちらへ飛びながら話した。しかし、三十年ぶりの二人の話は尽きない。二人分で六十年以上にもなる。霧の彼方に、あるとき突然現れたお兄ちゃんが、霧が少しずつ晴れてくるように、だんだん輪郭が明確になつてきた。

食後の果物を食べ終えると、もう九時を回つていた。あつという間の数時間であつた。

人通りの少ない松涛の住宅街へ出ると、夜気が俊恵の微薫の頬に心地よかつた。俊恵は自分のお店では、あまり飲まない。とくに最近は氣を付けている。今宵はそんな自戒心は、まったく働かなかつた。最初は自分の手を握りしめて緊張していたけれど、吉田と話していると心が、次第に和らいでくるのが自分でもわかつた。久しぶりの安堵感の中で、遠慮のない話ができたと思つた。

腕組んじやおうかな、吉田と並んで歩きながら、そう思いついた。酔いが俊恵の肩を押した。渋谷とはいえ、繁華街から離れたこの辺は、大きな植木がたくさんある東京でも屈指の高級住宅街である。商店も電飾看板もなく、街燈だけが所々で路面に灯りを落としていた。

吉田は、えっ

という顔をしたが、すぐに白い歯を見せ受け入れてくれた。

吉田は腕に、俊恵の胸の豊かな柔らかさを感じた。住宅の塀の中から伸びている松の枝のずっと上に半月が見え隠れする。俊恵と腕を組んだことがあつたらうか、吉田は記憶の糸をたぐつた。あのころは、俊恵には、そうしなかつたことを感じるものが何回もあつたかも知れないが、晩生 おくて の吉田には、それに気がつかなかつたのだらう、と思つた。角を曲がると、細いまっすぐな通りには、誰も歩いていなかった。両側には、クルマが二台は入る駐車場が備わつた大きな住宅が続いている。月の光も街燈も、松の枝で遮られるところへ差しかかつた。

吉田は立ち止まり、俊恵のあごに手を添えて少し上へ上げた。吉田が俊恵の目を見た。瞬間のことで、俊恵はどうすることもできないうちに、吉田の唇が俊恵のそれをふさいだ。いったん、口を離した吉田は、ふたたび俊恵の口を覆つた。

「こんなところで」

俊恵は、若い子達ではあるまいし、まさか吉田がこんなことを、路上でしようとは露ほども想像できなかった。長い接吻に、俊恵は息苦しくなつた。甘美な痺れが後頭部に広がり、バッグを落としてしまった。膝がカクンとなつてしまつて、吉田に両手ですがつていなくては立っていられなくなつてしまつた。俊恵は、吉田がそれ以上のことをここでしないことを願つた。自分が制御できなくなつていた。

八ヶ岳山行

JR中央線新宿駅九時発特急あずさが、静かにホームを滑り出した。車内には、駅弁や

お茶を買い込んで、あれこれと吉田のために食事の準備をする百合子がいた。

吉田は、百合子にぜひ山に連れて行って欲しいとせがまれた。学生時代にテニスをしていたのなら、基礎的な体力はある、とみて、女性に人気の高い、北八ヶ岳の森といくつかの湖を歩くコースを選んだ。

吉田も百合子も、登山姿である。お互いにいつも会うのは「甲斐」が多い。会社の帰りということになるので、吉田は背広、百合子も編集者とはいえ作家に会うことが多いので、スーツを着るような服装が多かった。二人ともカジュアル・ウェアの相手を見るのは初めてであった。普段、背広姿の吉田がネクタイもしないでいると、何か違う人に会っているように百合子には思えた。髪は手で掻き揚げただけである。百合子は、あらあら、と微笑ましく思った。カチツとしたジャケットではなく、山用の少し華やかな模様のシャツ姿の百合子をみて、吉田には百合子が二つ、三つ若く見えた。

そんな吉田の視線も気にせず、百合子は電車の到着時間、バスへの乗り換え時間などを吉田に説明した。今では、パソコンで、出発地と目的地を入力さえすれば、所要時間や発着時間、交通機関などがたちどころにわかる。吉田には、地元のバス会社に電話して、終バスなどの時刻を聞いていたころや、分厚い時刻表をひっくり返しては、接続をチェックしていたところが懐かしく思われた。百合子は、今回の行程をいくとおりかインターネットで検索し、印刷して持ってきていた。吉田には、そんなことはしなくても、何回も行った山のことなので、おおかたは頭に入っている。国際航空線乗り換えでいくわけではなし、今日は、バスを降りて、双子池ヒュッテまで二、三時間を歩けばいいだけだ。しかし、はしゃいでいる百合子をみていると吉田は楽しかった。

だって、あなた、吉田さんにご迷惑じゃな

いの」

そんなことないわよ。十分話したし」

俊恵は、百合子がいつのまにか吉田と二人で北八ヶ岳に行くことになってしまったのに、母として一抹の懸念をもった。女としてかも知れない。大人になったとはいえ、娘は娘である。相手が吉田だとしても素直に領けないものがあつた。吉田だったからこそ、領けなかったのかも知れない。

二、三日前に吉田が「甲斐」にきて、百合子を山へ連れて行ってもいいか、と聞いてきた。俊恵は、

あれ、いつのまにそんな話を」

と思ったが、そのときは忙しかったこともあって、

あら、羨ましいいわ。いいのかしら」

といって、承認したことになっていた。

え？ 十分話したって、いつ話したのよ。

お店じや、そんな話は出なかったじゃない」

メールよ。電子メール。わたしが、ぜひ連れて行ってくださいと、最初はメールではなくてお手紙を書いたの。吉田さんの会社からね。

こちらでも会社の封筒だから、ご迷惑にはならないでしょ。一応、「流出版社だし。そしたらね、吉田さんからメールがきて、以後、メールで何回かやり取りして決めたの」

だって、泊まるんでしょう」

泊まるといっても、別に個室ではなく、山小屋は全部大部屋で男女関係なく雑魚寝ですってよ。パジャマは？ って聞いたら笑われちゃった」

百合子は屈託なかった。百合子は、吉田がかつて俊恵の家の二階に下宿していたことを知らないでいる。

山がもっとも混雑するお盆シーズンを外したとはいえ、山小屋はごった返している。百人以上も泊まれるところで、朝夕の二食を小屋の作り物、といっても、カレーとかハンバーグとかで済まそうとすると、食堂の収容人

員により、三回とか、四回のグループに分けて食べることになる。ビールなどもおちおち飲んでいられない。

吉田は、このように列を作って待つということが苦手であった。また、料理をすることは、普段から苦にならない性質（たち）でもあった。むしろ、好きといってもいい。自宅と同じ料理でも作るたびに出来上りが微妙に違う。それは、レシピをあまり当てにしないからかも知れない。料理はクリエイティブティだ、吉田は常日頃からそう百合子に話している。

普通の山行では、バスなどを降り、緩やかな坂道をウォーミング・アップのような感じで小一時間も歩き、そこから「登り」が始まる。しかし、北八ヶ岳の入り口である、バス停の「竜源橋」からは、いきなりきつい登りになり、こころを躍らせてきた初心者には面食らう。三十分ほど登れば、ある程度の高見へ出る。そこからは、適度な傾斜の登りとなる。モミツガなどの針葉樹や熊笹の藪地、ちよとした川原、湿地帯に百合子は、ひとつひとつ感激している。ウグイスやほかの山鳥の声がときどき聞こえる。陽射しが強いが、高度もあるのでその暑さはあまり感じられない。百合子は、こんなに青い空は、グアム島以来見たことがなかった。

亀甲池で休憩を取った。手にとるような小さな池に周囲の木立が映っている。静かだった。汗ばんだ百合子の顔に吉田が微笑んだ。

ゆっくりでいいんだよ。もうそんなに遠くないんだから」

前を歩いていく百合子に吉田が声をかけた。

はい」

あ、それから、かかとをそんなに上げないように。そうして歩くと明日、ふくらはぎが痛くなるよ。太ももとか、できるだけ大きい筋肉を使って、足裏全体で地面を踏みつけるようにね」

はい」

亀甲池を出て、やや登って降りる。苔むした大きな倒木を何本もくぐったり、乗り越えたりして、少し疲れたかな、と百合子があったころ、登山道の前方がぱっと開け、道は大きな湖の渚へボンと出た。そこが二つある池のうちの雄池である。湖畔を右回りに二十分ほど歩くと双子池ヒュッテに着く。

ヒュッテとはいうものの、要するに山小屋である。小屋の向こうには、雄池より小さい雌池が透明な水に周囲の木立を、写真をさかさまにしたように映している。百合子は、

わっ、きれい」

と思わず、立ちすくんでしまった。疲れも飛んでいってしまった感じである。

荷物を置いて、吉田とともに湖畔へ降りた。

澄んだ水の中を小魚や鱒が泳いでいる。

絵に描いたみたいですね」

百合子は、髪を結いなおしながら、吉田を振り返った。坐って水に手を差し、子供のようにならぬ邪気に遊んでいる百合子の反対の手を、吉田は握ってやっていた。百合子が立ち上がって、

よいしょ！」

と、こちらの石へ体重をかけてきたとき、近づいた百合子の身体から若い女性の汗に蒸れた香りが、吉田の鼻をくすぐった。しばらく、遠ざかっていた感覚を呼び戻された。

少し早かったが、夕飯の仕度に取り掛かることにした。小屋から一段下がったところにある休憩用の露天の小卓を使っている、と宿の主人に了解を取っていた。

百合子のザックには、着替えや雨具、スナックに果物くらいしか入っていない。子供のころキャンプに使ったプラスチックの食器とか、念のためにピクニック・シートも持ってきた。

百合子は、吉田のザックが何でそんなに大きいのかよくわからなかった。しかし、小卓

のそばで吉田が広げたザックからは、炊事用のコンロや、食器一式、大ぶりの深鍋、燃料のカートリッジ、野菜、卵、しいたけなどがどンドン出てくる。

「何を作るんですか？」

吉田に寄り添うようにして、吉田のザックから出てくる材料などを受け取っていた百合子が、尋ねた。

「すき焼きもどき、かな」

「えっ？ すき焼きですか！」

百合子の声は、ほとんど歓声に近かった。山での食事といえば、インスタントもののカレーとかラーメンとかハンバーグや缶詰、そんなものしか想像していなかった百合子は、だからびっくりしたのである。

「うん、その肉を適当に切ってくれる。長ね

ぎとか、白滝もね。白菜もあるでしょ」

「はい、あ、まな板は」

「はい、これ」

吉田は、ザックから素麺の木箱の蓋を取り出した。そのままではなく、必要最小限に小さく切つてある。重量を少しでも軽くするためである、と聞いて百合子は感心した。こんな小さなまな板と、フランス製とかいう登山ナイフでは、自宅の台所とは勝手が違う。ギクシャクしながらも具の準備はできた。その間、吉田はコンロを組み上げたり、鍋の用意をしたりした。

「リードってどこですか？」

「あ、ないよ、ない。溶けちゃうと思つてね」
「なるほど」

百合子は納得した。

「あの、お肉はどこかしら」

「その一番大きな包み」

「え、これですか」

「そう、それ」

「そう、それ」 っって言つても、ゆうに一キロは超えている。

「こんなにですか」

「はいから開けてご覧」

するとどうだろう。包みをほいといくと、中には、五百ccの缶ビール二本をくるむように、ビニールの袋に入つた肉が巻いてある。

缶ビールは昨夜、冷凍しておいたもので、肉の保冷用にも使つたのだ。小屋でビールを買えば、街場で買う値段のだいたい二倍だと、吉田は百合子に説明した。

吉田は、鍋に割り下を入れた。

「割り下も持ってきたんだ」

百合子は、まともや感心した。吉田は、野菜や豆腐などを無造作にどンドン入れる。

「ビール、飲もうか。のど渴いたし」

「そうですね。でも、わたしこんなに飲めない」

「なあに、汗をたくさんかいているから、水分補給は十分においた方がいい。トイレはあそこにあるから、心配要らないよ」

「乾杯ーい」

二人で声を合わせた。

百合子は、ビールがこんなに美味しいものだとは思わなかった。電柱やビルが全く見えない大自然の中で、快い疲労のあと、ビールは海綿が水を吸収するように、いくらでも飲めた。

鍋が出来上がるまでに、百合子はキュウリとトマトをまな板を使って、危ない手つきで切っていた。それを見た吉田は、百合子からナイフを受け取り、まな板も使わず、登山ナイフで手際よく切り落とした。百合子がこれを盛り付け、イタリアン・ドレッシングをかけてサラダを作った。

「ドレッシングも持ってきているんだ」

小さなプラスチック容器をみて、百合子は再び感心した。

「すき焼きは、この他百合子を喜ばせた。

いくらでも食べられるような気がした。

「あ、ワインもあるよ」

「え、ワインも」

「ザックをこそごそしていた吉田は、ペットボトルに入つた赤ワインを持ち出した。

「これ、見てくれ悪いけど美味しいよ。国産だけだね、ポリフェノールが普通の三倍も入っているんだ」

あ、わたしもあります」

百合子は、何種類かのチーズを取り出した。吉田がチーズを好きなのを覚えていた。輸入食品のスーパーマーケットで探してきたのだという。イタリア製のフレイバーの強いもの、フランス製のブルーチーズとカマンベール。

吉田は、美味しそうにそれらをかじった。吉田が喜ぶ様子を見て、百合子も嬉しくなった。

百合子は、俊恵と二人でとる食事と思った。同僚ととる食事や飲み会を思った。作家との食事もあった。いまこうして、吉田としての食事は、それらのどれとも違う気がした。俊恵との食事は「実用」かも知れない。同僚とのそれは「歓楽」だろうか。作家とは「業務上」だし。いまこのすき焼きが、こんなに美味しいのは、自然環境がいいからかしら。水道も流しも完備していない、非日常的な環境に、興奮しているからかしら。それとも、吉田が優しいからかしら。そのいずれでもないような気がした。身体が疲れているせいかな。ほんのり酔ったようだ。あたりは、まだ明るい。

明るいうちに片付けてしまおう」

と、吉田がいったものの、食器はどこで洗うのかしら、百合子はそう思った。やおら、吉田はザックを再びごそごそさせて、トイレットペーパーの巻紙を取り出した。

鍋や食器に、池から汲んできた少量の水をいれ、丁寧に内側へ回し、トイレットペーパーでふき取った。水がないし、湖を汚染させないためにも、こうするのが一番だ、山屋さんはみんなこうするのさ、と吉田は百合子にも手伝わせた。汚れたトイレットペーパーは自宅まで持ち帰る。百合子は、ままごとをしているようで、心が弾んだ。雌池のほうに、湖面に沿って薄い霧がかかった。幽玄的な雰囲気、百合子を和ませた。

百合子たちは、食事を終え、小屋の中に入った。賄い付きの宿泊客の夕食は、これから始まるうとするところだった。

百合子と吉田は、早いうちについたのので、ほかの登山客は二組ほどしかなかった。囲碁の始めの布石は、四隅の有利なところから打っていくという。吉田は、百合子が安心して休めるように、囲碁のように大部屋の四隅のうちのひとつに陣取った。荷物の整理をしながら、吉田は小屋での「常識」を言って聞かせた。夜、トイレに行く時は、懐中電灯は天井に向けて、寝ている人の顔を照らさないこと。怖かったら、我慢しないで吉田を起こすこと。ガサゴソと新聞紙などの音を立てないこと。百合子は、そのひとつひとつに、

はい」はい」

と素直に頷いた。

夜のとぼりが二つの池と小屋をすっぽりと覆った。離れたところで、小屋の発電機が場違いな単調な音を立てていた。小屋の窓からもれる灯り以外は、何も見えない。荷物の片づけが一段落したところで、吉田が、

星を見に出ようか」

と百合子を誘った。吉田のアドバイスでウィンド・ヤッケをかぶり、懐中電灯を首にかけて外に出た。ヒヤッとした冷気が、アルコールで火照った頬を心地よく撫でた。

夕食をとった小卓まで来ると、小屋の灯りも、星を満喫するのに邪魔にならなかった。さらに、小卓の少し先を左へ歩を進めると、小屋の灯りは完全に遮蔽される。墨を流したよう」とは、こんなことを言うのかと、百合子は思った。二人は、倒木に腰をおろした。

星は、すぐ手が届きそうなところまで、たくさん降りてきているようだった。星の網を被されているようだった。

あれが夕飯のとき、明るい空に輝いていた金星。宵の明星だね。あそこから、こっちへ、

解る？ 大きな幅で流れているのが天の川」

えっ、天の川って、見えるんですか」

東京育ちの百合子は、天の川をまだ見たことはなかった。

あの大きく光っているのが北極星だよ」

吉田は、さらにいくつかの星座を百合子に教えた。それにまつわる恋物語を話して聞かせた。百合子は、昔、母親が外国のおとぎ話の絵本をよく読んでくれたことを思い出した。大人になった今でも、吉田の話を聞いていると、何か、小さな時に父親から冒険物語などを話してもらっているような安堵感があった。

百合子は、俊恵に引き合わされた理知的な坂本からも、いろいろな薫陶を得た。それは、坂本の豊かな人生経験と博学に基づくものであったような気がする。社会的なこと、仕事上のこと、男と女のこと、食べ物のこと、英語のこと、外国の習慣のこと、いろいろと勉強になった。吉田には、その坂本とはまた違った味わいがあった。

俊恵に、坂本を紹介されてからは、もう十年以上も経っている。吉田は、甲斐」の十五周年の小宴以降であるから、まだ、数年にしか過ぎない。そんな吉田に、

由へ連れて行ってください。どこでもいいんです」

なんていう手紙を、よくまア書いたものだと、自分ながら呆れた。俊恵も、驚いて止めようとするわけである。でも、そんな無鉄砲なことをして、今はよかったと思った。俊恵は俊恵で、別の意味で、百合子に吉田とは山へ行って欲しくなかった。

ああ、酒が引いちやったな。小屋へもどって少し飲みなおそうか」

吉田がそういつて立ち上がった。百合子は、もう少しそのままでいたかった。木柵で作った階段を、小屋の方へ登るとき、吉田が百合子に手を差し伸べた。吉田の手は暖かかった。百合子は自分の冷たくなった手が、暖かく強く握られているを感じた。ほんの十段くら

いの土と木でできた階段だったが、もっと続いてほしかった。

部屋へ帰った二人は、とりあえず布団を敷いた。吉田は、百合子の布団を壁際へ敷くように言った。百合子の布団は、壁と吉田の布団に挟まれるように敷かれた。

吉田は、スコッチを出した。チタンの容器であった。吉田のために、百合子はチーズを出した。百合子も少し、スコッチを受けた。ほかの客も、食堂から戻り、部屋は少し込んできた。吉田は、スイス・アルプスの話を百合子に聞かせた。今日の行程でも、苔むした倒木あり、可愛い池がいくつかあり、百合子はそれだけで感激していたのに、スイス・アルプスのふもとの牧歌的雰囲気や、氷河や冠雪した山々の話を吉田から聞いていると、自分もいつかはスイス・アルプスに行ってみたと思うようになった。

九時の消灯時間がきて、発電機は止められ、部屋の灯りは蓄電池を電源とする豆電球に変わった。いくら疲れているとはいえ、百合子は九時には寝たことがない。今日、歩いてきた、森林の風景、苔の中に可憐に咲いている小さな花々、亀甲池、目の前の双子池の雄池と雌池。雌池にかかった幻想的な霧。吉田が指を差して、その先を見ようと頬が触れ合うほど寄り添ったこと、美味しかった焼きやワイン。一日にしては、昨今無いほど充実した内容だった。

まだ起きているの。明日は早いよ」

はい」

「・・・こっちへ来なさい」

「・・・はい」

そう返事をしてから、百合子はなぜ はい」といったのか、解らなかった。

吉田がかけ布団を少し上げている。

百合子は、行儀は悪いけど、寝たまま、身体をジグザグさせて吉田の布団へ侵入した。

山小屋なので、寝巻きやパジャマがあるわけではなし、下は登山ズボンからジャージに着替えていた。上は汗をかいたシャツを新しいポロシャツに着替えていた。

どのようにしていいか、百合子はわからず、胎児が横になったような格好で吉田のほうを向いた。気温が下がって湿度も低いので、汗は乾いていたが、風呂もシャワーも使っていなかったのも、吉田に近づくのが少し躊躇われた。

吉田は布団のはずれにかりうじて乗っているような百合子に、もっと真中に寄るように優しく促した。百合子は、これまでに、満員電車はともかく、男にこんなに近くに寄ったことはなかった。吉田が、髪を撫でてくれた。自分の顔は、吉田の喉の下当りにあった。

吉田の体臭が鼻を軽くついた。なれない臭いなので、最初は面食らったが、時間がたつとそれは何か懐かしい臭いになっていった。胸がドキドキするような臭いだった。

百合子は、ずっと昔に父親の胸に抱かれながら眠りについたことを、かすかに想い出した。父親はあまり早く帰宅することはなかったが、休みの日には親子三人で川の字になって床にいった。父親と向き合っている、反対側に寝返りを打てば、そこには母親の笑顔があった。父親の方を向いたり、母親の方を向いたりしてはしやぎながら、やがて眠りにいった。

何を考えていたの」

吉田の声が頭の上で聞こえた。

とてもきれいだった双子池や亀甲池のこととか、青い空とか森林の地面や倒れた木に一面に生えている苔のこととか。モス・グリーンって言うじゃないですか、本当のモス・グリーンってこういう色なんだなって、そのとき思いました。それに、吉田さんのお料理の手際よさとか。驚いてしまいました。連れてきて頂いて本当によかったです」それはよかった。疲れていない？」

はい、いまのところは」

学生時代に運動していたからね。明日も晴れそうだな。多分、横岳からの眺めは素晴らしいと思うよ」

吉田は、昔の俊恵を思った。学生運動やサークル活動で下宿にすることはあまりなかったが、下宿に帰るとその気配を敏感に察して、俊恵が果物や煮物などを持ってきてくれた。書店に行くといえば随いてきたし、風呂屋に行くといえば随いてきた。子犬のように吉田の右に來たり左に來たりしながら、学校であったこととか、友達のこととか、よく話してくれた。

吉田はそこ、心を寄せる女性はなく、俊恵に随きまといわれるのは嫌ではなかった。むしろ新鮮な感情を刺激されることが嬉しかった。吉田の卒業した地方の高校は、いわゆる進学校で、昔、旧制中学であったので女生徒も少なく、その女学生も勉強一筋であった。したがって、高校生が男女二人で歩くような機会も皆無に近かった。その点、俊恵を見てみると、やはり「東京育ち」を感じさせる。田舎育ちの晩生の吉田には、俊恵ははつらつとしており、大人びて見えた。

その俊恵の娘が、ここにいる。おっとりして、いそうに見えるが、山に行きたいという気持ちを持ちをストレートに吉田に告げる。そして、連れて行って欲しいと願う出る。「途といえ、俊恵に一脈通じるものがある。吉田は、そういう百合子を微笑ましく思った。妻でも、恋人でも、愛人でも子供でも同僚でもなく、吉田にとってはまったく新しい範疇の女性であった。大事にしたかった。

ガサゴソとした物音や人の小さな話し声で、百合子は目を覚ました。あ、そうだ、こは山小屋だった。吉田がいな。百合子は、自分の布団を空けて吉田の布団で寝ていたことを、誰かに悟られやしかったかと、ヒヤッとしたが、そんなことを気にする人は

誰もいない。ほかの登山客たちは、大人であつても子供がキャンプに來たようにはしゃいで自分のことで目一杯であつた。

窓から外を見ると、昨夜の小卓で吉田が朝飯の用意をしていた。顔を洗った百合子は、吉田のところへ急いだ。

おはようございます。すっかり寝過ごしてしまつてすみません」

よく眠れた？」

吉田は、胡瓜をぶつ切りにしながら、微笑んだ。吉田の背後に雌池がある。湖面に沿つてもやのようなものが滞留している。池に落ち込んでいる斜面には、朝日があたつて、そこだけが明るく緑を映えさせている。お伽の国にいるようだ。

はい、とても」

百合子は、吉田の微笑を見るのが少し恥づかしかった。昨夜のことが想いだされた。

由の朝つて、とても気持ちいいですね」

百合子は場を取り繕つて、そういいながら深呼吸をした。冷えた空氣が、胸の奥まで入つていくのがわかるようだった。

フランスパンに胡瓜とハムのサラダ、ゆで卵、これにコーンスープと紅茶が添えられた。糖分を摂つておいた方がいいと吉田が言うので、紅茶に砂糖を入れた。いつも砂糖は入れたことがなかったが、朝の冷氣の中で飲む甘い紅茶は驚くほどおいしかった。吉田は、サラダに使つたマヨネーズをフランスパンの上にも搾り出して、美味しそうに食べている。百合子は吉田につられて、いつもの朝食の二倍ほども食べてしまった。

こんなに食べたら太つてしまうかも知れないわ。タベもお肉とかたくさん食べたし」

大丈夫だよ。山歩きはカロリーをたくさん消耗するから。わたしは山から帰ると一キロくらいは痩せるよ」

え、そうですか。それなら嬉しいけれど」

百合子たちが朝食の片づけを終え、出発し

ようとしたりころ、賄い付きの宿泊客たちの朝食がやっと始まつた。

森林の中の山道と大きな岩場を三十分も歩くと、ちょっとした見晴らしに出る。背後を振り返ると、下の方に先ほど出発した双子池ヒュッテの赤い屋根が小さく見える。そのあたりからは、部屋ひとつぐらいの大きな岩がごろごろと連なっている。吉田は百合子を先に立たせ、あまり急がないように声をかけながら登つて行つた。一歩一歩の足場を上へ取るたびに、百合子の尻が眩しく動く。

北八ヶ岳の主峰横岳からの展望は、何回か來ている吉田も驚くほど素晴らしかった。雲がない三百六十度の展望である。西側遠くには北アルプスの山々、東の方には浅間山など上越の山々、そして南には南八ヶ岳の山々。北八ヶ岳には森と湖が多く、女性的な静かな雰囲気がある。これに対して、南八ヶ岳は岩や瓦礫のアルペンの山々となっている。その最高峰硫黄岳や赤岳の威容が胸を張るように見える。東側眼下には、七つ池が箱庭のようににこじんまりと収まつている。

百合子は、かつてない眺望に魅せられて、言葉も出なかった。山に登つて、山が好きになつてしまつた人は、頂上に立つて見える山を指し、今度はあの山へ行こう、次はその向こう、と思うのだと、昨夜、吉田から聞いた。

北アルプスが見える方の緩やかな斜面にザックを下ろした。それまでの急な登りで汗してきた疲れが、ジワァツと体内を巡っている。陽射しは強いが、暑くはない。吉田が、しずくが滴り落ちている、半分に切つたネーブルを百合子にそつと差し出した。

世の中には、いろいろな体験や事件がたくさんある。それらについての本やインターネット情報など、解説もたくさん出回っている。人から話を聞くこともできる。山登りもそのひとつであろう。山登りのガイドブックやビデオテープもある。

しかし、百合子はこのようにして横岳の山頂に立ち、周囲の山々を見回すとき、こんな衝撃的に自分を包み込んで陶醉させるものは、解説書や人の話だけでは到底得られないのではないか、と思った。吉田がよく「甲斐」で話してくれた山の話も、こうして自分で汗して登ってきてみて、初めて自分でその良さを実感できた。火は熱いとは知っていても、本当に火の中に手を入れてみないと、その実態が認識できないのと同じである。

人の愛もそうかも知れない。ちょっとしたきっかけで異性の心のぬくもりを知る。お互いに相手に対する興味が増すことで、感情が大きく増幅されていく。礼と大胆さが交錯しながら二人の感性が相乗し、リビドーに導かれるままにやがて結ばれる。結ばれてからの感情と身体は、お互いに、相手は自分に欠かせない存在となっていく。そして、愛と憎しみが織り成す男女の織布の中で、二人は育つ。あるいは別離へと押しやられる。

男と女の関係を、百合子はこんな風に感性的に捉えていても、結局のところ、それは、山登りのガイドブック的発想でしかないのではないか。そういう概念を頭で捉えて、自分が知らない、男女間のさまざまなやり取りや関心事（ねやごと）を、知識としていくらくさん取り込んでも、男と女の真実の関わりに何ら肉迫できるわけではないではないか。

しかし、自分が夢中になる男が現れないのに、そういう現実体験だけを求めるのは非現実的なことでもある。世の中の多くの大人の男女は、極めて現実的な精神的な関わりと性愛の中で、関係をより強めていく。そういう男女二人という最少単位があって、社会が構成されており、いろいろな人間模様が繰り広げられる。人が成長と経年の中で、身も心も、異性を求めていくのは至極当然のことである。百合子が時折、お腹のそのほうから、疼くように突き上げてくるものを感じるのは、

そんなことの体感であるのかもしれない。

百合ちゃん、風邪を引くといけないから、ヤッケを掛けていたほうがいいよ。気温は意外と低いからね」

バサバサの髪に緑色のバンダナを巻いた吉田が、声をかけた。あまりのダイナミックな景観に、心を奪われたように思いをめぐらせていた百合子は、吉田の声で我に返った。

考え事をしていたようだね。何か心配事でもあったのかな」

「いえ、全然そんなじゃないんです。あまりにも素晴らしい景色なので、ちょっと哲学的になっちゃって。山が好きになった人って、次々に山に登るって、昨夜お話ししてくださいましたよね。それがなるほど、と思えたんです。『甲斐』で吉田さんが何であんなに夢中でお話をされるのかも、いま、やっとわかったような気がします」

百合子は、自分の存在が、横岳の空気や陽の光や、風の中に溶け込んで融和していく感覚を覚えた。絶対的な安堵感の中にいた。

横岳での衝撃

静かな山旅の北八ヶ岳から喧騒の東京に戻った百合子は、編集というあわただしい仕事の中に、再び引きずり込まれていった。しかし、通勤途上の電車の中や、ひとりで浴室にいるときに、横岳で受けた衝撃を無意識のうちに反芻することがある。それに結城先生の小説の、百合子にとっては赤面しかねない濡れ場や、若い女性編集者が話す関心事経験などが想い出されて絡む。人が性愛の時間を持つのは、どうしてなのだろう。百合子は、石鹸の泡に包まれた乳房をかかえて思案に暮れてしまう。

百合子はいままで、男とベッドの上で過ごしたことはなかった。機会があったなら、そ

うなっていたかも知れない、と思った。男と女がそうするのは、真面目な性欲の遂行か、あるいは劣情の発露か、くらいにしか考えていなかった。結城先生の作品も、失礼ながらその水準のものにしか思えない。ひょっとして、もっと深いものがあるかも知れないと時折思いながらも、その探求に熱意はなかった。

しかし、北八　きたやつ　山行以来、そのときまでに自分の気持ちや身体はどこかに宿っていて、百合子を疼かせるものが何か、真剣に対峙して見ようと思い始めてきた。火に手を入れてみて初めて本当の熱さがわかるように、それに手を入れて見なくては、自分の生きている意味が明確にならないのではないか、と思った。

人の最少単位である一人の男と女が関わりあうということは、言葉や感情といったものだけでは、意図する意思伝達量の半分にも達していないのではないだろうか。そんな未成熟な精神状態のまま、歳をとっていくと言うことは、自分では何の不自由も不便も感じなくても、ほかの人に迷惑をかけているのかも知れない。自分は、何かが欠落したまま来てしまっているのではないだろうか。男と女が、良きにつけ悪しきにつけ、性愛を含んださまざまな交流手段で十分に解り合ってこそ、より本質に近い深いかかわりが生まれるのではないだろうか。

百合子の頭に、貞操とか純潔といった概念が去来した。自分が結婚したいと思う男に出会うまで、男に肌を許さないという考え方には古典的な格調は感じられる。年端も行かず社会的経験も浅い若い女性なら、それは自分の未熟な価値観より上位に置けるし、自分の将来的な幸せに貢献してくれるかも知れない。

しかし、江戸時代なら子供の二、三人もいる大年増の年齢にもなって、そういう価値観を自分の価値観の中に据えておくことに、どれほどの意味があるのだろうか。信頼できる男とベッドでひと時を過ごすことによって、精

神的にも肉体的にも何ほどの変化が出てくるのか、いまの百合子には解らない。しかし、身体が成熟し、男女の本質的な理解に手が届いていないような今の状況では、何か人生の中で無為な時期を傍観しているような気がしてならない。

風呂から上がって、髪を乾かしている時に俊恵が帰ってきた。

あら、今日は遅かったのね」

うん、原稿の整理がたまっちゃっていてね」

ご飯は？」

夕方、サンドイッチを食べただけ」

あ、じゃ、これ食べたなら。お店が終わってお客さんとお鮎屋さんへ行ったの。そのお土産よ」

まあ、それは良かった。でも全部食べたなら太っちゃうな。寝る前だし」

はいじゃない。好きなものだけ食べれば」
そうね」

髪を乾かし終えた百合子は、冷たい水をグラスに注いだ。

俊恵は、衣服を脱いで衣紋掛けにつるし、ベランダに掛けた。シャワーを浴びる間だけでも、外気に当って煙草の臭いを消すのが常だった。

穴ヶ岳、どうだったの」

ベージュのレースの下着姿のままの俊恵が百合子に尋ねた。勤務時間の関係で二人がこんな会話をする時間が、百合子の八ヶ岳山行以来、今までなかった。

すっごくよかったわよ。聞くと見るとでは大違い、とはまさにこのことかと思った。横岳っていう一番高いところがあるんだけど、そこからの見晴らしがね、もう最高。三百六十度の展望よ。北アルプスなんかもくつきりと見えたし。それに吉田さんって、お料理の手際がとても上手なの」

そうかも知れないね。あの方器用そうよね」
俊恵は、もう少し突っ込んで聞きたかったが、ま、いいか、また後にしよう、と思った。

着替えを胸に抱えて浴室へ向かった。俊恵は、百合子と吉田に間に何もなかったとはいえ、百合子が吉田に髪を愛撫されながら眠りについたとは、夢にも思わなかった。

編集作業の合間に電子メールをチェックしていた百合子は、ウィーンに滞在しているめぐみから、近況を知らせるメールが入っているのに気がついた。めぐみは、高校時代の同級生で、現在はウィーンでバイオリンの勉強をしている。メールによればなかなかの腕前らしく、今度コンサートを開くので気晴らしにヨーロッパまで遊びにこないか、とのことであった。無理には誘わないわよ、彼と一緒にでなければ、自分の部屋に泊まってもいい、とも書いてあった。彼」か、と百合子は思った。練習風景と思われる写真と、プログラムが添付ファイルに収められていた。

開催日は、仕事も一段落しそうなころだし、夏休みもまだとっていなかったので、百合子のこころはオーストリア行きにかなり傾いた。

深海のバブル・バー

吉田は百合子から、
折り入ってご相談に乗っていただきたい」という趣旨の、短い丁寧なメールを受け取った。おりしも、来日客との一連の打合せが終わり、箱崎のＴキャットで帰国を見送ってきたその帰りに、誰もいない自分の事務所へ寄ったときにそれを読んだ。近々には、相手の事務所を表敬訪問方々、交渉の詰めで渡欧することになるかも知れない。その準備もあり、スケジュール調整が立てこむこともあって、吉田はその場で百合子の携帯電話に連絡をとった。

吉田はその晩、新宿の都電通りに面した二階の焼き鳥屋で、百合子と待ち合わせた。時

間が遅かったこともあってか、奥まった落ち着いたカウンター席が空いていた。

百合子は、八ヶ岳山行にとっても感激したことや、吉田が作った山料理が美味しかったこと、スイス・アルプスにも行ってみたいことなどを楽しそうに話した。百合子は、鳥料理は、刺身であれ、焼き物であれ何でも良く食べたが、鳥皮やボンチなどの脂っこいものには手を出さなかった。だいぶ食べたし、酒も進んだ。さて、本題は何だろうと吉田は待ったが、なかなか、それが百合子の口から出ない。

あのう．．」

と、吉田が水を向けると、

それなんですが．．」

と、百合子が周囲を気にした。即座に察した

吉田は、

じゃ、ちょっと河岸を変えよう」

と、レジの方へ向かった。百合子は、ここでも話せないことはないと思ったが、大事なところなのでできればもう少し落ち着いたところで話したかった。吉田には申し訳ないが、彼のこころ遣いに甘えることにした。

吉田が百合子を連れて行ったのは、そこから十分ほど歩いたビルの地下であった。海の底をイメージしたというそのバーは、地下一階と二階の二フロアからなる。

地下一階はカウンター席で十五人ほどが掛けられる。普通、いろいろな酒のボトルが置いてある、客席の正面が全面的に水槽になっており、大小の色とりどりの熱帯魚がゆうゆうと泳ぎまわっている。客席の足元には真つ白な砂礫が敷き詰めてあり、客はその上をざくざくと歩く趣向になっている。照明は、水槽が明るいので部屋の中は落としてある。足元だけの照明が白い砂礫を照らしている。地上から、三十歩足らずで海底の雰囲気を感じることができるというわけだ。

まあ、きれい」

百合子は、吉田がなぜこんなに素敵なところを知っているのかしら、と思った。

さらにあと一階下がると、こちらは部屋の真ん中に水槽があり、魚は泳いでいない。その代わりに、水流が幻想的な照明の中で泡を立てながら上下にぐるぐる回っている。その水槽を炉端のように囲んで、カウンターのついた客席が三十席ほどある。客椅子は袖、背もたれとも二人用に布でできている。隣の席との境には曇り硝子が施されてある。水流の水音がある程度あるので、声がよそへ漏れることもないし、二人のプライバシーが確保できる。暗い部屋には、目の前の水槽から水色の光がもれている。

わ、素敵！

百合子は、一瞬、立ち止まってしまった。

そのひとつに、係りが二人を案内した。

吉田には、少し気恥ずかしいような環境だが、百合子には大いに気に入ってもらったようだ。

吉田はジンライムを、百合子はカンパリ・ソーダをとった。ウェイトレスが下がったところで、

じゃ、乾杯」

と、吉田がいて二人はグラスを合わせた。大きな白い襟のブラウスにワインレッドのセーターを着た百合子が、大きな目でずっと水流を見つめている。何か、いいにくそうだが、吉田はそう思った。促すのも躊躇われた。時の流れに任せよう。時々、百合子と目が合った。百合子は、赤いカンパリ・ソーダを一口飲んだ。

あの、いろいろ考えた末のことなんです、笑わないでください。そして、わたしはもう、そうしようと決めたことなので、ぜひ、ご協力をお願いしたいのです」

といって、百合子は、これは「ご協力」なのかな、と思った。

うん、笑いはしないけど、わたしに出来る

ことなのかな」

はい、吉田さんでなくてはできないことです。というより、吉田さんにぜひお願いしたいんです」

わたしでなくてはできないことなんて、何だろう。まさか、スイス・アルプスへ連れて行け、とか言うんじゃないだろうね」

と、吉田が微笑みながらいった。

スイス・アルプスの話が吉田のほうから出て、百合子は幾分話しやすくなった。

あの、それは半分当たっています」

半分？　・・・すると後半分は？」

吉田は狐に摘ままれたようだった。

百合子が、また一口、カンパリ・ソーダを飲んだ。吉田は、百合子が何か言い出しにくそうなことを悟った。そして、

あ、別に急いで言うことはないから。ゆっくり話してご覧」と、助けた。

水流が水色の光の中を、音を立てて、透明な泡をたくさん作りながら回っている。百合子はそれをじっと見つめている。

バッグからペンを取り出した百合子は、ペーパーナプキンに何やら書き付けてから、背をつくと伸ばして吉田にいった。

あの、吉田さんには唐突かもしれませんが、わたし、どういったらいんでしょう、なんていうか、もっと大人、になりたいんです。人をもっと、人と人との関係をもっと知らなくてはいけない時期に來ていると思うんです。女が何で、男がどういうものかをもっと知りたいと思っています」

百合子は、吉田を見つめた。

うーん、確かに唐突だね。意味がよくわからないけど、君はもう十分大人の女性じゃないか。少なくともわたしは、そのように接しているつもりだけだね」

吉田は、考えをめぐらせるようにしていった。

あの、そういうことではなくて・・・」

百合子は、少し前に書き付けたペーパー・

ナブキンに指を乗せていたが、やがて思い切るように、カウンターを滑らせるようにして、それを吉田の前に押した。

そこにはVIRGINと、しなやかな女文字で書かれていた。吉田は百合子を見た。百合子は、口をしっかりと結んでうつぶいた。文字を書くとき、髪を掻きあげて挟んだその耳朶に朱がさしていた。百合子の緊迫感が吉田の胸に迫った。

「どういうことかな。事情を話してご覧」

水槽の水音が、一段と大きくなったように吉田には聞こえた。

膝に両手をそろえた百合子は、北八ヶ岳へ連れて行ってもらって、横岳の頂上で、図らずもある考えにおぼろげながら到達したこと、またそれまでには、自分のこころや身体の中で何か納得し得ないものが、自分をせつついているようなことが鬱積していたこと、などを吉田に話した。吉田は薄緑色のジンライムを舐めながら、同意するでもなく否定もせず、また意見も挟まず、じっと聞いていた。

なるほど、よくわかった。それで・・・わたしへの頼みごととか、スイス・アルプスとかは、どうつながるのかな」

すこし、意地悪かったかな、と思いながら吉田は尋ねた。

「こういうことって、いくら若い人の考え方が変わったからって、あまりにも突飛かも知れないって、自分で反省しながらお話するんですが・・・非常識とかいわれそうだし」

百合子は、自分のVIRGINを密かに葬ってやりたい、と思うようになってきていた。幼いころ母が読んでくれた「アルプスの少女・ハイジ」が住んでいた、すがすがしい空気がいっぱい、小さい花がたくさ咲いている小さな緑の村。近くには雪におおわれたきれいなスイス・アルプスが聳えるその麓で、優しくそうしてやりたい、と思うようになってきていた。

そうすることによって、今までの漠とした

鬱積に何がしかの答えが出るような気がした。このまま、不燃焼のような精神状況で齢（わい）を重ねていっても、その先に何が見えるのだろう。

そういうことは、機会を待ちなさいと、よくいわれる。機会を待つといっても、それはいつ来るとも知れない。待ち続けるのか。待ち続けるだけでいいのか。そういうことを全幅の信頼を置いて任せられる男が現れるのだろうか。信頼が置ける男なら、誰でもいいのか。その男が自分を愛していなくても・・・。愛してもいない男に、そんなことをお願いするのか。それを吉田に協力して欲しい、と告げることは、告げることができるのは・・・、自分は吉田を尊敬していながら、実は愛してしまっているのだろうか！ そうなのかも知れない、と百合子は突然思った。そう思いつくと急に胸が高鳴ってきた。きょうは、そういう感情を吐露するつもりではなかった。きょうまで、まじめに考えてきたことを話し、それに吉田から理解をいただき、協力を取り付けたかった。

自分のこころが思わぬ方向へ動いたことで、吉田に話すことに若干の逡巡を覚えた。しかし百合子は、注意深く言葉を選び、直接的な表現を避けて、自分の気持ちを吉田に伝えた。冷静に話したつもりではあったが、手には汗を握っていた。心臓が高鳴った。

吉田はその意味を察した。驚天動地の驚きであった。グラスを落としそうでもあったし、ペア・チェアからずり落ちそうでもあった。目の前には、いままでの「俊恵の娘」の百合子ではない、女の「百合子がいた。百合子の目に大人の光があった。

百合ちゃん、そういうことはね・・・」

吉田は、持ったグラスの淵を親指で撫でるようにしながらいった。

解っています。申し訳ありません、お話を遮って。そういうことは、好きな人ができてその人をお願いした方がいいっておっしゃり

たいんでしょ。それは、そういう考え方もあると思います。でも、わたしも子供ではないし、もう三十も過ぎてしまっているし」

百合子は、限りなく立ち上る水槽の泡に目をやりながらいった。

年齢は考えない方がいい。いくつになってもいいじゃないか」

そうかもしれないが、そういう人って、わたしの前には現れないかも知れないじゃないですか」

現れる。君のような素晴らしい娘の前には、必ず現れるよ。それからでも遅くはない」

「・・・わたしって、そういう不確定なものに身を任せることができない性分なんです」

おむ。しかし、そんなことをいったら、恋なんかできないぞ。男と女の関係はすべてが不確定だからね」

だから、わたしには、いままで好きな人ができなかったのかもしれない。恋だって、明日になれば何が変わるか解らない硝子細工のようなものかも知れないけれど、少なくとも目の前の人は信頼できるでしょう？ 恋事態は不確定でも、目の前の人は絶対的に信頼できなきゃいけないと思うんです。わたし、今まで、そういう人に巡り会えませんでした。これからも、わかりません。・・・わたしの考えはおかしいでしょうか」

百合子は、大きな瞳を水槽から吉田に移していった、

おかしくはないよ。おかしくはないけれど、そんな大事なことを突然いわれても・・・」

「・・・あの、わたしのことってお嫌いなんですか。自分を買いかぶった言い方で申し訳ありませんが・・・」

百合子が、背を伸ばして吉田をじっと見つめた。うす暗い明かりの中で、水槽の水灯りに照らされて、百合子の目が柔らかに光っている。

さんでもない。わたしにとっては、君が一番若い女性の友達だよ。娘のいないわたしに

は娘みたいなものだ、とも思っている」

といってしまったあとで、吉田はその言葉とか、娘とかけた概念では捉えきれない感情が、これまでも何回も吉田のこころの中に現れては消えていった。寝しなに、百合子のことを思い出すことが、これまでもしばしばあった。

吉田はいま、百合子を傷つけまいと思っている。女性にとって一生に一度の尊い通過儀礼を、この娘はわたしに委ねようとしている。裸で跪いて懇願するほど恥ずかしいことを、赤裸々に依頼しているのだ。わたしが断ったら、彼女は深く傷つくに違いない。しかし、この申し出をわたしが受けるということは、どういうことになるのか。吉田は逡巡していた。

「こういうことって、先ほど吉田さんがおっしゃったように、時期を待ったり、そういう人が現れるのを待ったりするのがいいのかもしれない。でも、そういう考え方ってわたしにはふさわしくないと思うんです。わたしも、吉田さんがそこにいるから、とか、八ヶ岳へ連れて行っていただいたから、ということでお願ひしているんではありません。今まで、吉田さんと「甲斐」でお話をしたり、外でお食事をご馳走になったりして、吉田さんの素晴らしいところをたくさん教えていただきました。山なんかへ行くと、都会の中で会うのと違って、四六時中「一緒なので、何かしら気になるようなところが出てくると思うんです。でも、吉田さんにはそれはない」

そんなに誉めてもらっても・・・」

わたし、吉田さんを尊敬しています。こんなことは、考え付いても、いざ実行の段になると、なかなか適任者が見つからないと思うんです。でも、わたしは、この考えを思いついた瞬間に吉田さん、と決めました。ご迷惑は重々承知していますが、ぜひ、お願いいたします」

百合子は、とつとつと話してはいるが、雄弁であった。

スイスへ

百合子と話した日から何日間か、吉田はあわただしい日程をこなした。しかし、四六時中、百合子のが脳裏から離れなかった。百合子からとてつもなく大きな課題を突きつけられたような気がした。それ以前のように、百合子に言っただけ聞かせるようなわけには行かなかった。以前は、百合子が吉田に相談を持ちかけたいろいろな問題があっても、それは百合子の問題であり、少なくとも吉田の問題ではなかった。吉田は、百合子が不安から開放されるように、いくつかの事例や、自分の考えを話してやればよかった。

この度の話は、そうした相談事とは一線を画するものである。百合子と地下の水槽バーで話したことが、いつときたりとも吉田の脳裏を離れないのは、吉田の問題でもあったからである。

すでに自分の事務所には、誰もいなかった。明かりをつけ、冷蔵庫から氷を出しロックグラスに入れた。さて、きょうは・・・と思案して、ラム酒の上級なものをグラスに注いだ。静かに考えたい時は、スコッチよりラム酒の方を吉田は好んだ。甲斐にでも行こうかと思っただけ抱えていた問題が俊恵との関係で、あまりにも生々しく思え、足が向かなかった。室内の蛍光灯は、眩しすぎた。応接セットの傍にある白熱球のスタンドだけにした。セットされていたモーツアルトのCDをはずし、エリック・サティを流した。隣のビルの鮎屋に出前を頼んだ。

百合子は、自分では大人の女のつもりでいるが、吉田とは親子ほども年が違ふほど若い。いってみれば子供である。その百合子が、大

袈裟に言えば全存在を賭けて吉田に迫った。

百合子にしてみれば、理屈の上でのお願ひである。彼女にとって吉田は父親であり、兄であった。しかし、あの晩、百合子自身も気がついたように、それはお願いというより、告白であった。身体の疼きに押され、理屈で考えついたとはいえ、生娘が愛情も育めていない男に身を任せることがありうるのだろうか。一時の遊び心や事故ならともかく、真面目に考え抜いて、そんなことを本当に頼めるのだろうか。もし、百合子が自分の娘で、他の男にそんなことを頼むとしたら、吉田はどうアドバイスできるのかを考えてみた。

百合子は、あの晩以降、気持ちは幾分楽になった。しかし、以前にもまして、吉田のことを心情的に回想するようになった自分に気がついた。吉田の白い歯を見せる笑顔が浮かぶ。居酒屋で杯を選ぶ吉田の手。必ず箸置きを使う吉田。いつも少し緩めたネクタイ。そんなに気を遣わなくてもいいのに、会うときにはいつも百合子が贈ったネクタイ。コートを羽織るのに手を貸してくれる吉田。双子池で握った吉田の手の暖かさ。星を見ていたとき、耳にかかった吉田の吐息。興奮していたのに疲れてすぐ眠ってしまった吉田の腕の中。

百合子はわれながら、大胆なことを頼んでしまったものだと思った。考えてみれば、吉田とは「手を握るくらい」の間柄でしかない。それなのにあんなことを頼むなんて、やはり自分は吉田に強く心を引かれていたのかも知れない。自分では気がつかなかったが、自分のこのころの中には、気がつかないうちに、吉田が一番奥まで入り込んで来ているように思えた。

山縣は、百合子に対して優しく熱心でもあった。百合子も嫌いではなかった。何回も二人で食事をしている。話も面白い。うかつにも唇を奪われたことはあるが、それも嫌ではなかった。しかし、百合子はそれ以上、山縣

にのめりこんでいくことができなかった。

吉田は、百合子のことを考えながら、二杯目のグラスが終わるまでに、海外との電子メールのやり取りを終えた。その中で、来月にミュンヘンへ行く用事が発生したことを確認した。

そうだ。そのときがいい」

百合子に話してみよう、と吉田は思った。しかしこれは、俊恵には話さない方がいいと思った。話すべきときが来たらそうしようと思った。

考えさせて欲しい」

と吉田にいわれ、百合子は自分の性急さを悔やんだ。ここ数年間の吉田との関係の中で、百合子は吉田が百合子の考えにきっと同意してくれるだろうと、信じて疑わなかった。しかしそれは、なんて思い上がった考えだったのだろう。

吉田は、わたしにとってどういう人だったのだろうか。父でも兄でもなく、いつてみれば赤の他人ではないか。その赤の他人に、こんな大事なことをお願いして、簡単に「イエス」を引き出せると思っていたのか。いや違う。こんな大事なことをお願いできるのは、赤の他人ではなかったのだ。百合子は、そう自分を納得させた。

しかし、吉田は「考えさせて欲しい」と態度を保留してしまった。ということは「アー」もあり得るのか。百合子は、寄りかかっていた木が突然はずされたような不安感を覚えた。「アー」といわれたらどうしよう。吉田が「アー」といったら、吉田は赤の他人である。そのときは、百合子は赤の他人に、とんでもないことをお願いしたことになる。恥ずかしさもさることながら、大変失礼ながらも極めて私的なことを不躰にもしてしまったことになる。

吉田が「アー」と答えるであろうか。それ

より、なぜ「考えさせて欲しい」なんていったのだろう。百合子のこころは乱れた。しかし百合子は、自分の感性を信じた。吉田の目が想い浮かんだ。微笑みを想い出した。吉田は、必ず「イエス」というに違いない。そう思った。理由はなかった。

スイスにいつ行こうか」

と吉田が切り出したとき、百合子は天にも上る気持ちであった。大きな安堵感に包まれて目眩がしそうだった。吉田の腕にすがりたい衝動を抑えた。

その晩会ってからの吉田は、百合子の仕事の様子とか、最近の時事の話とか、そんな他愛のない話ばかりをしていた。早く言ってくれば良かったのに、もうつ、と百合子は吉田を潤んだ瞳で見据えた。

百合子は、夏休みをまだとっていないなかったので、一週間ぐらいの休暇が取れることを吉田に告げた。吉田は、商用でミュンヘンに行く用事があることを話した。その頃は、百合子の編集の仕事も一段落する時であった。

お母さんには、どう話すの？ 一人でヨーロッパへ行くといったら心配しない？」と吉田が尋ねた。

高校時代の友達がウィーンでバイオリンを勉強しているんです。二週間ほど前に、今度、初めてコンサートを開くからこないかって、メールをいただきました。母も知っている子なので、そこへ行くといえど・・・、それにわたし子供じゃないし」

そうだね、ハハハ・・・」

吉田は生ビールのジョッキをあおった。俊恵は、吉田のスケジュールを把握するほど、吉田に近いところにはいなかった。百合子が吉田にかなり近い距離にいることは、日々の親子の会話の中から察することができた。しかし、まさか二人が示し合せてヨーロッパで会うとは露ほども予想だにできなかった。俊恵にとっては、吉田は依然としてお兄ちゃん

のままで、二人の関係は大人として進展した話にまでは動いていなかった。

君に気に入ってもらえるかどうかからないけれど、スイス・アルプスの麓に、日本であれば上高地のようなところがある。インターレーケンという小さな街だけど、登山者には基地になるところだし、一般の観光客には高級リゾート地といった感がある。夜はカジノなんかも遊べる。そこから登山電車でコトコト登って行くとラウターブルネンという小さな村がある。そこに一度宿を取ったところがあって、わたしはそこが気に入った。仕事の帰りに時間を作って、アイガー北壁やユングフラウを見に行ってきたんだ。むかし、氷河が流れていた時にU字型に削っていった、その中にある村だよ」

わたしはどうやって、そこまで行けばいいんですか」

北周りでチューリッヒ、英語ではズーリックと発音するんだけど、そこまでエアで入って、あとはインターシティという国際列車で行くことができる」

大丈夫かなあ、わたし一人でいけるかなあ」
「けるよ。もう十分大人の女性だって、いつか胸はついていなかったっけ？」

でも、英語も満足に話せないし」

じゃ、止める？」

あつ、意地悪。そんなこといわないでください」

百合子が、口をきくと結んで吉田を睨んだ。

冗談だよ、冗談。ごめん、ごめん。ええと、国際列車は時刻表が驚くほどしっかりしているので、英語が話せなくても、駅の名前が読めればまったくオーケイだよ。乗り換えのホームの番線まで出ているから。だから、ラウターブルネンの、その宿で落ち合おう」

わー、でも、こんな遠くの日本から別々に出発して、スイスの小さな村で会うなんて、とっても素敵ね。吉田さんは、どうやってそ

こまでいかれるんですか？」

わたしは、ミュンヘンで仕事が終わってから、こちらも国際列車で向かう。ミュンヘンからオーストリアのインスブルックへ入り、ここから西へチューリッヒ、ベルンと走っていく。ま、一日旅行だね。できれば君が乗る列車にわたしも乗れればいいけど、君のフライトの到着が遅れる可能性もあるので、そうもできないだろうな。別に推理小説じゃないんだから、そんなに厳密に組み立てなくてもいいよね」

そうですね」

それにインターシティは、独特の、なんていうか清潔感が漂っていて、車窓からの風景とあいまって、異国情緒満点という感じだね」

まあ、ますます惹かれちゃいます」

百合子は、子供のころ遠足に行く前の晩のように、胸がときめいた。

小さな可愛いホテル

百合子に乗せた汽車は、コトコトコトコトと緑に覆われた山肌を登っていく。小さな集落がところどころに点在し、そして申し合わせたようにどこの集落にも必ず教会と思われる建物があり、屋根の上には十字架が掲げられている。一面に牧場のような斜面には、牛が数頭ずつ群れをなして、草を食んでいる。

遠方には、絵本で見たような、古い建築様式の住宅と思われる建物が見える。どの建物の窓にも真っ白いレースのカーテンがかけられ、窓には赤い花の鉢がいくつも取り付けられている。清楚な感じが住んでいる人のこころを偲ばせた。この登山列車が、次の角を曲がったら、ハイジがピヨンと飛び出してきそうなのがする。百合子は、知らない土地を旅する不安よりも、お伽の国に立ち入ったような感覚を楽しんでいた。

車内は六分くらいの乗客の入りで、観光客

がほとんどであった。東洋人は百合子が一人であった。

車窓からの景色に見とれ、感傷に浸っていたので、百合子は危うくラウターブルネンの駅を乗り越しそうになった。あたふたと重い荷物を下ろそうとしていたら、白人の大きな男性がその荷物を軽々と下ろしてくれた。

サンキュー、サー」

百合子は、ぺこりと頭を下げた。

マイプレジャー、テイクケア」

白人は列車から大きく手を振った。

さて、と。ここは確かにどこかの村の駅のようにだ。日本でいえば、農協直営の雑貨店とか郵便局くらいしかない田舎の駅に、その雰囲気が似ている。百合子は、吉田が書いてくれた略地図を見ながら歩き出した。十分くらいだといっていた。電話をすれば、クルマで迎えに来てくれるとのことであったが、英語を話すのが面倒なので、スツケースをガタゴト転がしながら歩き出したのである。吉田は、すでに到着しているかも知れなかったし、そうでないかもしれない。とにかく、暗くなる前には宿に入れる、ということであった。

吉田によれば、ホテル、といっても日本の民宿に毛が生えたようなもので、ベッド数が二十から三十くらいのホテルが、三つほどあるという。その三つのホテルはいずれも街道沿いにあり、百合子が目指すのは、その一番遠くのホテルであった。いずれも二つ星とのことであった。二つ星とはいえ、さすが観光立国のスイスだけあって、プールなどの遊興施設はないものの、家具調度の簡素さや清潔感、およそ日本では感じ取れないほど完璧、そういう無駄のないもてなしに好感が持てたと吉田はいっていた。

街道には、時折クルマが通って行くが、クルマの台数が少ないせいか、喧騒感も排気ガス臭さも感じられない。静かな小寒村の中を、百合子の引くスツケースの音だけが、妙に

目立った。

来るところまで来てしまった。もう、引けない。でも自分で十分考えて決めたことだし、吉田も同意してくれた。自分の考えは正しいと思う。いや、正しいかどうかは誰が決めるのだろう。たとえ正しくなくても、少なくともわたしにはベストな判断であった。わたしには？ わたしにはベストな判断？ それでは吉田さんにはどうなの？ 吉田さんにとってもベストな判断であったのだろうか。いや、ベストな判断なんて詭弁ではないのだろうか。衝動よ、女の衝動。じゃ、吉田さんは何なの？ 女の衝動の犠牲者？ それじゃ吉田さんは、格好よすぎない？ 吉田さんてそんなにお人よしかしら。・・・やっぱわたしは、吉田さんが好きになったんだわ。吉田さんがよく言っていたわ。女の人の言葉は当てにならないって。女の人を判断するのは、その人の言葉じゃなくて、結局、その人が何をしたかだって。女の人って、結局、嫌なことは絶対にしないセンサーがどこかに内蔵されているだともいったわ。

それでは、吉田さんは何で、わたしの企みに乗ったのかしら。理屈？ わたしの理屈に共感したから？ 男の人って、そんなに単純なのかしら？ 理屈が合えば何でもしてくれるの？ それではわたしがあまりにもかわるそうじゃない？ でもその理屈を作ったのは自分かあ。

百合子が訳のわからない空想にとらわれて、スツケースをゴロゴロ押ししていると、頭の上から女性の声が降りかかった。

「ヘロウ、ハロー。アアュー、ユリーコ？」
テラス状になった石造りのやや高台から、ジーンズに黒いセーター、黄色いリボンで髪を束ねた若い色白の女性が手を振って話しかけている。

はい、あ、イエス。マイネイムイズ、ユリーコ」

若い女性は、石段を飛び跳ねるように降り

てきて、短い歓迎の言葉を言った。百合子の荷物を軽々とテラスの上に運んだ。百合子の名前は吉田が伝えてあったに違いない。スーツケースとガタゴトと押してくる東洋人が入れば、それは間違いなく百合子である、と宿の若い女性は思ったのである。百合子と同年位であった。自分の名前をシャーリーと名乗った。

ホテル、と名前がついているとはいえ、ロビーがあるわけではなし、立派な受付けカウンターがあるわけではない。玄関の左右に食堂のような部屋がある。片方は材木の木地を生かしたログハウス風の小卓と椅子が三十人分ほどある。もうひとつの部屋には、青いテーブルクロスに真っ白なテーブルクロスがセットされている。多分、野生と思われる小さな花が、各テーブルの二輪挿しに生けてある。

シャーリーが、百合子に、食事の時間や場所、国際電話などについて簡単に説明をしてくれた。一休みしたら、ここへ降りてきてお茶でも飲まない？ そんなことをいわれたような気がした。部屋は最上階の三階であった。鍵を渡され、階段はその奥だ、と指を指された。

確か、階段といった。エレベーターはないのかしら。指差された角を曲がると、そこにはエレベーターはなく、広い階段が上に続いていった。踊り場の窓から陽が柔らかく差し込んでいた。

考えてみると、こんな瀟洒なチロル風の建物にエレベーターは相応しくない。それにこの地方を観光旅行する人たちは、多分ペアなのだろう。男の人がいれば、三階までの荷物はその間に苦にはならない。木造の階段に、実用的な清潔な絨毯を敷いた階段を、百合子は自分の荷物を一段一段持ち上げていった。

部屋にある二つの大きめなベッドや箆笥は、手造りのような風合いを残している。小振りの小卓と二つの椅子には、この地方の民芸織物のような掛け布がしてあった。床には濃紺

の絨毯。窓には同色系のカーテンと、真っ白なレースのカーテンが爽やかな雰囲気をも出し出している。

テレビがないことに気がついた。民放の騒々しくも品のないテレビ番組を見慣れている日本人は、どこへいってもテレビがないことには始まらない。テレビを点けていないと落ち着かないのだそうだ。こんな静かな自然に恵まれた環境の中に、テレビを持ち込んで外的な刺激を導入することにどれほどの意味があるのだろうか。ペアで来ているのだから、落ち着いたひと時を過ごすとか、時の流れのままにまどろむとか、内面からいずる情念の趣くままにしていなさい、テレビのない部屋は、百合子にそんな風に語りかけているようであった。百合子もべつに、テレビが欲しいわけではなかった。

レースのカーテンを引き、引き戸のガラス戸を開けると、正面はずっと遠くになだらかな緑の斜面が下がってきているのが見える。ベランダに出た。その斜面を、なんとトロツコのような赤い列車が下ってくるではないか。あたかも百合子の到着を待ち構えていたかのようである。乗っている観光客が、こちらに手を振っている。百合子も手を振り返した。

手前には教会らしき、長い時を経たような建物がある。まるでアニメーション動画を見ているようだ。百合子は、長旅の疲れなどはすっかり忘れたように、手すりに手をかけ、頂だけが夕日に照らされている冠雪のアルプスを見ていた。この地が、氷河時代に氷河が下って作ったU字型地形の底のほうにあるので、U字型地形の上はまだ陽に照らされているのに、百合子がいるホテルのあたりはすでに陰っている。

十分近くも荷物をゴロゴロ押してきたうえ、その荷物を三階まで運んできたので、少し疲れてしまった。部屋に入った百合子は、ベッドに仰向けに倒れこんだ。最上階のせいか天井が高く、三角形の一番上の尖がり帽子のよ

うな内側は、木目がそのままの丸太で組まれていた。

スイスの小寒村の、気取らないこのホテルを、百合子はすっかり気に入ってしまった。ベッドにひっくり返って、行儀悪いと思ったけどスニーカーを手を使わず、足だけで脱ぎ飛ばし、百合子はなんともいわれぬ安堵感の中に落ちていく自分を追っていた。

さとうとう来てしまった」

八ヶ岳の横岳での思いつきが、いよいよ実行する直前にまで来た。八ヶ岳から東京、東京での思案と熟考、吉田への依頼と自分の心境の新たな発見、成田、チューリッヒ、インターラーケン、そしてここラウターブルンネン。百合子は、瞳を軽く閉じて、これまでの自分のこのころの軌跡を追った。

吉田への依頼は、最初は「代理妻」のような「機能的」なものが基軸であったのに、吉田へ依頼する段になって、話しながら自分の頭を整理していくと、自分が今までに誰にもしたことがないほど、自分の内面を吉田に開示していることにハッと気がついた。また、百合子のそれまでの人生の中で、吉田はこちら側に一番深くまで入っている男であることに気がついた。

こんなことは、理屈の積み重ねなんかで人に頼めることではなく、相手への圧倒的な信頼感がなければできないことに百合子は改めて気がついたのである。百合子と吉田はたまたま親子とも年齢が離れているので、百合子は吉田を父親のように思っていたが、もっと原理的に突き詰めて考えてみれば、一人の女と男である。自分には、その都度気がついてはいたわけではないが、百合子の頭の中にはいつも吉田の存在があった。吉田の傍に居るときは、控えめだがいつも嬉々とした気持ちで脈づいていたし、別れたあとには大きな充足感があった。

もし、吉田が、百合子が単に俊恵の娘だけ

らという理由だけで百合子に接してきたのなら、百合子は吉田にこんなにも好意を感じることはできなかったであろう、と思った。百合子は、吉田のこれまでのひとつひとつの仕事の思い浮かべて、吉田にしても百合子に好ましい心情を傾けていたに違いない、と確信できる節がいくつも思い浮かんだ。

吉田が自分の世代であったなら、もっと積極的に百合子にいろいろと迫ってきたに違いない。しかし、吉田は、歳の差の分だけ大人であったのだろう。百合子の思案が熟成してくるのをじっと待っていた気配がある。

吉田がいつか酒席で「わたしは一人の女も幸せにできなかった」と過去形で自嘲した離婚も、吉田の百合子に対する情熱にボールを被せてきたのかも知れない。

あれやこれやと思いを巡らせるうちに、百合子はうとうととしてしまった。長い間眠ってしまったかと思ったら、十分ほどであった。うがいをし、化粧を直して「一階へ降りていった。

「一階の奥の調理場では、シャーリーとあと二人の女性が、夕食の支度を進めていた。三人とも私服で、年配の女性が母親、もう一人はシャーリーと姉妹のように見えた。ログハウスのような部屋に入ると、シャーリーがその気配に気がついた。

「何をお飲みになる？ 日本からの長い旅でお疲れのようだから、コーヒーより少し甘い飲みものの方がいいかも。お薦めがあるわ」

親指を立てて微笑んで薦めるシャーリーに百合子が頷くと、彼女は後ろ髪をなびかせて調理場のほうへ入っていった。シャーリーが持ってきたのは、小さなワイングラスに入った赤ワインのような色をした飲みものだった。

百合子は、それを少し口に含んでみた。コケモモのワインのようだが、上品なほのかな甘さが、百合子の嗅覚を慰撫し、舌に絡んだ。

取り憑かれそうな優しい甘さであった。百合子は、もう一口含んで、舌の上を転がし、口をすぼめて微かに息を吸いワインに巻き取らせた。ワインのことはよくわからないが、美味しかった。どのような食事に合うか、というより、きょうのような疲れた時に、このワインだけでよかった。百合子のところを和ませた。

グラスを手にして、テラスへ出た。テラスの下には街道が走っており、時折、クルマが前照灯を点けて疾走していく。空には、白い雲が夕日に照らされて赤く染まっている。ここはU字型地形の底にあるので、陽はどうに陰っているが、普通の土地なら、まだまだ明るいのであろう。

再会

電話が鳴った。百合子は、それが吉田からのものであることを直感した。胸が一気に高鳴った。シャーリーが応対している。百合子が到着しているか、駅まで迎えに行こうか、とかそんな会話のように聞こえた。

シャーリーが、駅までクルマで迎えにいくけど、一緒にいかないかと百合子を誘った。百合子は一もなく二もなくすぐ同意した。胸の鼓動は引き続き速く打っている。百合子は、クルマの中でシャーリーに吉田との関係を聞かれたら、どう答えたものか迷った。吉田に聞いておけばよかったと思った。しかし、日本の民宿のお人好しのおじさんではあるまいし、そのような私的なことは聞いてこまいとも思った。

クルマが駅に近づく、荷物を横において立っている吉田がすぐにわかった。吉田は車窓の百合子の顔を見て、手を挙げた。百合子には吉田が心なしかやせたように見えた。東京で最後に会ったのは、二週間も前になる。それから吉田は、ミュンヘンへ行き三泊したはずである。三日間の商談やら打合せで疲れ

気味なのだろうか。

百合子にとって、私服の吉田は珍しかった。スーツ姿の吉田より幾分若めに見える。

無事に着けたようだね。困ったことはなかったかな」

吉田は、荷物をクルマに乗せながら、百合子に気遣いの言葉をかけた。

はい大丈夫でした。なんとか来ました、一人でも・・・」

百合子は、吉田の優しい言葉を聞いて、遙か異国の地でやっと吉田に会えたかと思うと、喉にこみ上げるものがあつた。吉田の顔が涙で歪んで見えた。自分の両手を固く握り締めていた。

吉田が大きい荷物、百合子は吉田の手荷物をもって、三階の部屋に入った。

どうかな？ この部屋、気に入った？」

ええ、とっても」

吉田は、手を洗い、うがいをし、顔を洗った。振り向くと、そこに百合子がタオルをもっていた。吉田はタオルで顔を押えた。手首をぬぐった。

百合子と目があつた。一瞬の間を置いて、百合子が吉田の胸に吸い込まれるように凭れかかった。吉田がこれを静かに受け止め、百合子の両腕の上から包み込むように抱擁した。百合子の胸の鼓動は連打を極め、それが乳房を通して吉田に響いているかと思うと、百合子は消え入りたいほど恥ずかしかった。ハケ岳の時のように、吉田に促されて吉田の胸に入っていたのではなく、自分から飛び込んでいったことで、余計に耳朶が火照った。しかし、吉田が優しく受け止めてくれて、とても嬉しかった。忘我のような安堵感が百合子の全身を満たした。

吉田が百合子の顎をゆっくりと上向かせた。百合子は瞳を閉じたままであった。吉田の唇が百合子の唇を覆った。百合子は唇に痺れるような熱さを感じた。

吉田は百合子をベッドの上に優しく押し倒した。吉田の熱い接吻がふたたび百合子を重厚に襲った。百合子はなす術もなく吉田に任せていた。吉田の手が、百合子の胸をゆっくり擦っているのがわかった。いままで、誰にもされたことがないことを、吉田が一步、二歩、と着実に進めてくる。百合子は、身体に少しずつ変化が現れてきていることを微かに感じ取っていた。自分では赤子のようにどうすることもできない、快い呪縛感の中で羞恥心にまみれていた。

気がつく、吉田の顔が目の前で微笑んでいる。

「ごめんなさい。こんなことするつもりはなかったの。何か身体が勝手にそうなっちゃって」

謝ることはないよ。結構な出迎えの挨拶で大いに感激したよ」

「どうとう、来ちゃったのね。よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひしますだなんて、そんなに改まっていわれると、どうしていいかわからなくなってしまうよ」

「わからないのは、わたしの方です。・・・何か、起き上がってお顔を見るのが恥ずかしい・・・」

「そんなこといったって、今回の旅は君のアイデアだろ」

「あら、意地悪ね。わかってらっしゃるくせに、もう」

「そろそろ、食事の用意ができている頃だ。下へ行ってみよう」

「お洋服、このままでいいのかしら。ディナーって、正装しなくてはいけないって言うじゃないですか」

「大丈夫だよ、そのまま。ここは田舎の民宿みたいなところだし」

「百合子は、吉田の目を避けて乱れた洋服や髪をすばやく直した。やはり、吉田と目を合

わせるのは恥ずかしかった。吉田のあとにしたがって食堂へ降りていった。

階下の食堂は、スイスの小さな村の小規模なホテルによくあるように、居酒屋と兼用になっている。日本の居酒屋のような喧騒はなく、ヨーデルが静かに流れ、ログ・ハウス風の室内装飾と相俟って、いやがうえにもスイスらしい感じに満ちている。

献立も品数が少ない。決まりきった田舎料理が十品ほどあるに過ぎない。素材は、湖で捕れる魚、牛肉か羊の肉、鶏肉、鶏卵、それにチーズといったところで、これをどのように調理するかで献立に変化をもたせる。

外はまだ明るい、窓を小さく仕切っている、食堂の中は灯りが必要だ。日本のように蛍光灯を煌々とつけないで、白熱球が落ち着いた雰囲気を出している。

すでに三、四人の地元の住民らしき一組が談笑していた。ときどき笑い声が聞こえてくる。シャリーが出てきて、どこの席でもよいが、ここはどうかと、視覚的に二人だけの空間が確保できる角を案内してくれた。好意的である。

小卓の蠟燭が、吉田の優しくそうな目と白い歯、百合子の緩んだ頬をちろちろと照らしている。小さな村の小さなホテルとはいえ、丸太造りの小卓の上には、白地に紫や赤の小花をあしらった厚手のしっかりしたテーブルクロスが掛けられ、質感のあるナイフやフォークがきちっと並べられている。「輪挿しには、百合子も名を知らぬ白い花が生けられている。格式ばらない居心地のよいホテルだが、そこだけには、シャリーの客を迎える意気込みが感じられるようだ。

席の案内が終わったシャリーは、厨房からワイン・クーラーに入れられたシャンパンとグラスを持ってきた。

「えっ、シャンパン？」

百合子は、目を見張って吉田を見た。

うん、大事な日だからね。ちょっと良いものを用意してもらった」

吉田が微笑んだ。

シャーリーが栓を抜いて、吉田のグラスに注いだ。吉田はそれを一口味わい、シャーリーに頷いた。コルクが入ったのならともかく、ワインそのものが悪かろうはずはない。吉田は一級品を頼んでおいたのである。

百合子は、急に胸に込み上げるものを覚えた。これまでに、百合子は何回もシャンパンを飲む機会があった。友達の花嫁式やパーティ、あるいは母親のスナックで、酔客が遊びごころでシャンパンのボトルを開け、同席の客へ振舞ったときとかである。しかし、今宵のように、自分で仕掛けた企画とはいえ、自分のために、自分がこころから敬愛する男に、スイスの片田舎の瀟洒なホテルでシャンパンが抜かれるなんて、考えても見なかった。グラスからいくつも立ち上る小さな泡が、やがて涙でかすんで大きくなり、涙がひと滴、瞳の外にこぼれ落ちて、また小さくなった。どうした？ さあ、乾杯しよう。涙している時じゃないよ」

あ、はい。すみません。何か、とても嬉しくて・・・」

さ、乾杯だ。乾杯！」

乾杯」

吉田が百合子のグラスに、自分のグラスを合わせた。グラスに蠟燭の炎が揺れ、ヨーデルが心地よく流れている。

シャーリーが来て、飲みものと食事の案内を始めた。ワインは、地元のおいしいものをハウスワインとしてとってあるが、もちろん、フランス産のボトルもある、ということだった。百合子はこの小さなホテルで、スイスの田舎の味を知ってみたいとハウスワインを希望した。吉田も百合子の目に同意を送った。

料理は、シャーリーの勧めもあって、羊肉

と虹鱈を頼んだ。羊肉は、あらかじめ下料理で熱処理したものを串に刺し、小卓上で回転させながら炙って食するものである。焚き火やキャンプファイヤーなどの火は、人の感情を高ぶらせるものがあるが、この羊肉の炙り焼きも野外料理の趣を再現させる。

小卓での炙り料理が始まると、百合子は、あら」

とか

おうっ」

とか、火の燃える様の変化や、串の回転を調節しながら、そのたびに吉田と目を交わして声をあげている。

ときどき、シャーリーが料理の様子を見に来てくれた。卓上の炙り仕掛けの燃料が切れるころ、ちょうど首尾よく焼きあがるようになっていく。シャーリーが用意してくれたタレは、いかにもスイスというような風合いのもので美味しい。肉の柔らかさや美味しさは格別であるが、百合子はタレの原料とか、調理法をあれこれと推測しては口にし、吉田にも意見を求めたりしている。

でも、やっぱり、これだろう」

吉田は、ポケットを探って、ひとつの小さな包みを卓上に出した。それは日本の醤油を鉛筆上の包装に封じ込めたものであった。吉田はシャーリーの方を気にしながら、悪戯っぽく笑って、それを小皿に注いだ。料理は、作った人が、それが最上であると思った味付けをし、それに相応しい添え物とソースを用意される。したがって、その料理に、醤油や辣油、タバスコなどを料理に振り掛けるのは、料理をした人に失礼だ、ましてやその料理を口にする前はだ、百合子はいつか吉田がそんなことを言っていたのを想い出した。

あっ、それって、いいかも」

百合子は、海外旅行に醤油が有効だということとは、よく聞いていた。脂っこい料理には、醤油はなんともいえない重要な役割を果たす。しかし百合子は、今回は出発時にこれを用意

することは、思い出せなかった。吉田は、よく海外へ出かけるから、これは「常備薬」みたいなものだ、と百合子に説明した。この醤油は、虹鱒の香草蒸しにも、とてもよくあった。百合子は、日本から遠く離れたこの異国の地へ来て、醤油の味がなんともいえず懐かしく、自分がつくづく日本人であることを思った。

百合子は、食事をしながら、吉田がこれまでに訪れた幾多の国々の話を聞いた。食べ物、飛行機の降りる空港を間違えた話、米国のビジネス・パートナーと同じ飛行機でニューヨークからヨーロッパへ飛ぼうとして、相手がこなかったので一人で乗り、着いたヨーロッパから電話したら、自分が曜日を間違えたこと、あるいは商売についての考え方の違い、公衆道徳の違い、話は尽きなかった。百合子は、八ヶ岳へ行った時は、東京での背広姿の吉田とまた違った野性的な吉田を見出したが、今回は今回で、また別な吉田像があるのを発見した。吉田は、よく飲み、よく食べ、快活に話をした。

「こんなに飲んで大丈夫なのかしら・・・」
百合子は、横目でチラッと吉田の顔を盗み、はしたなくも食事の後のことを思い、そんな自分を恥らった。

食事は、百合子には、いつになくこころ華やぐものであった。食後に何を摂るか、とシヤーリーが聞きにきたので、百合子はアイスクリームを、吉田はブランデーを頼んだ。

アイガーが、まだ見えるかも知れない。外へ出てみよう」

ブランデー・グラスを手にして吉田が立ち上がったので、百合子もアイスクリームの器を持って吉田に続いた。外は夕刻の霞みがややかり始めていたが、まだ、十分に明るい。五坪ほどのテラスは、ホテルの前の道路より十メートルほど高く築き上げられた石垣の上にある。

下を走る道路は、遠くの方から左右に緩や

かに湾曲してこのホテルの方へ上り、ここから後ろへは平坦になる。前照灯を点けたクルマが、遙か遠くのほうに見えたと思ったら、二つの前照灯は見る見るうちに大きくなり、シュワーツとタイヤの音を立てて疾走していく。少しの静寂があり、また、同じように、小さな前照灯が大きくなり、目の前を走っていく。

静かであった。遠くの緑の斜面には牛が群れをなして滞留し、草を食んでいるのが見える。多分その牛たちのカウベルが、のんびりとした音をからんころんと送ってよこす。

テラスには、木製の椅子いくつかと大型のパラソルが組になって二組置いてある。吉田がそのうちのひとつに腰をおろした。百合子は、吉田の正面にしようか、隣にしようか一瞬迷ったが、吉田のとなりへ席を取った。嬉しかった。

あそこを・・・」

と吉田が右手のずっと上のほうを指差した。百合子がそちらへ目をやると、真っ白な雪に覆われた鋭いエッジが、夕日にピンクに染まっている。このあたりは、とっくに陰っているのに、高いアイガーにはまだ夕陽が当り、あたかもそこから光が出ているかのように、ピンクが実に鮮やかである。

まあ、あれがアイガーですか」

百合子は、しばし立ちすくんでしまった。その北壁は、人間が登攀することを頑なに拒みつけ、これまでに尊い人命をいくつも奪ってきたと聞く。しかし、いま百合子が見るアイガー北壁は、そのほんの上部にしか過ぎないが、何か神々しくも柔らかなピンクの光を放ち、百合子の気持ちを優しく溶かし込んでいくようであった。周りに夜の帷が緩やかに下り始めたせいか、その部分がいつそう引き立って見える。

あした、あれを近くで見に行く」

はい」

百合子は、そう返事はしたものの、実は迫

り来る今夜の方が気になって仕方がなかった。物見遊山に来たのではないのだ。とはいっても、考えても見なかったほどロマンティックな食事や、アニメーションを見ているような牧歌的な風景、夕闇に輝くばかりのアイガーの雄姿などが、今夜の全曲のプロログであるなら、それはそれはとても幻想的な、百合子には申し分のないものであった。ここまで来てしまったのだから、あとは吉田に任せるしかなかった。

夕陽に照らされているアイガー北壁の部分が、時の移ろいとともに上に小さくなっていく。やがてそれが一点になり、ぷちんと消え、あとには単色の威影が残った。吉田が手を差し出してくれた。百合子は、迷わずその上に自分の手を置いた。吉田がゆっくり握る。暖かい。百合子は、その手の接点から、吉田の体内を巡っている暖かさが自分の中に流れ込んで、全身が吉田の暖かさに満たされてくるような気がした。吉田が、百合子の手を緩やかに引いたのを機に、百合子は吉田の片腕を胸に抱え、顔をその上に預けた。吉田の目が微笑んだ。

思えば成田を出て、どのくらい経ったのだろう。旅の疲れと、美味しかったワインとで、百合子は吉田の暖かい腕にすがって、気だるくも心地よい雲の中を浮遊しているようであった。

中へ入ろうか」

吉田の声に、百合子は我に返った。ほんの短い時間であったのだろうが、長い間そうしていたような気もした。あたりは薄暗くなりかけていた。ホテルの食堂の窓には、地元の住民たちが談笑している影が見える。百合子は、吉田の暖かい手を握って、彼に続いた。

儀式

さうなるのだろうか」

百合子は、吉田のあとについて階段を登った。広い白木のような木製の階段に掛かった麻製の厚手の織物を踏みしめていく。踊り場には、可憐な野の花が一輪挿してある。

ここまでは自分で考えられた。しかし、ここから先は見当もつかない。部屋の入り口のところで、百合子は入社試験の面接の前のように、胸がどきどきしてきた。

部屋へ入った百合子は、窓へ寄ってテラスに出た。すっかり夜の帷に包まれて、外の明かりといえば民家の窓からもれる黄色い灯りしかなかった。電飾看板が皆無なので、人々が眠りについてしまえば、あとは星明りがその屋根を照らすだけなのであろう。星屑は、ドーム型野球場の内天井に貼り付けたように、この村全体を覆っているようだ。百合子は、部屋へもどって、高い天井から下がっている真っ白なカーテンと薄青のカーテンをゆっくり引いた。カーテンの合わせ目を背で握って、室内に向いた。

吉田は、ベッド脇のラジオを同調していた。むかしのままの、手でダイヤルを回して周波数を合わせるという方式のものだ。日本にはラジカセなどの電気電子機器として、世界の最先端技術を駆使した商品があふれている。そういう機器に親しんでいる百合子や吉田にとっては、まさに「骨董品もの」といえるようなラジオだった。しかし、そんなラジオがこのホテルにいかにも相応しく、百合子はかわいい」と、今風の若い女性の言葉でそう思った。

ヨーデルかクラシックしか流れてないようだね」

吉田は、クラシックに周波数を合わせていた。バイオリンとピアノの静かな室内楽であった。やがてフルートも絡んできた。

モーツアルトのようですね。違いかしら」
多分、そうだろう。二八五とか三五一とか。よくわからないけど」

吉田は、ケッヘルを番号をいった。モーツ

アルトはこの隣の国オーストリアの出身である。そんな彼の出身地の近くで彼の曲を、ステレオでもハイファイでもない 骨董品ものの「ラジオで吉田と聞いているなんて、そんな状況は百合子をいっそう感傷的にさせた。

疲れたろう。わたしはミュンヘンからだけど、君は日本からだからね。先にシャワーを浴びたらどうか」

はい、でも吉田さん、お先にどうぞ」

いよいよ始まるか、百合子の胸は、急に思い出したように動悸を打ち始めた。

でも、女の人って、出てからもいろいろあるだろ。わたしがあとでシャワーしている時に、ゆっくりそうすればいいじゃない。あ、そうか。ドライヤーがないか。わたしが下から借りてきてやるよ」

そういって、吉田は部屋を出て行った。百合子は、それもそうだと思って、シャワーを浴びることにした。浴室は、黒いタイルが張りめぐらされ、そこに象牙色の浴槽や洗面台、便器が配置されている。便器の横には ああ、これが・・・というビデが据えられている。

性愛を公に是認することに消極的だった日本では、このようなビデが堂々と普及することはいいなかった。ウォッシュレットの普及で、ビデの概念と機能が一気に普及していった。いってみれば、ウォッシュレットの副次的機能として登場し、普及していったのである。

タオル掛けには、大中小のタオルが二組、折り目正しく掛かっている。百合子は、衣服をすべて脱いで、壁一面の鏡の前に立った。乳房の下についてブラジャーの跡が、東京からの長旅を思わせた。苦しかったであろう自分の二つの乳房を、百合子は優しく撫で、柔らかに揉んでやった。いままでの男性も、この胸を見る事もなかったし、直接愛撫することもなかった。

身体も気持ちも快活に動けて、同世代の男

性や女性たちと食事をしたり、遊びに行ったりしていた二十代のころは、そんな自分に何のわだかまりも感じなかった。しかし、歳を重ねて「結婚」が最大のテーマであるようなことを自分でも感じ、周りでも囁し立てるようなトネルを抜けてくると、女がひとりであることって、何だろう、と思うようになってくる。ひとりであることに何か「区切り」が必要と思える。仕事面白い。男性にも負けないほどの質の高い仕事ができる。収入に不満があるわけでもない。だから何なのだろう。

百合子は、成熟しきった女の身体を鏡に見た。少し自慢しちゃうかなと思っている胸、最近気になる腰周りや二の腕の肉付き、どっしりとしてきたといわれそうな尻や腿。誰にも見せていないし、着痩せするたちなので、まだ救われていたが、最近の体型は自分がいちばん気にしていた。吉田に何と思われるだろう。

それより、今夜はこれからどうすればいいのか。

熱いシャワーを細かく強くして浴びた。ほろ酔い気味の身体に刺さるようなシャワーが心地よかった。胸の先をそつとつまんで揉み、シャワーで弄った。

充分すぎるくらい時間がかかってしまった。長い旅の疲れをとるにはバスタブにゆっくり浸かっていたかったが、そんなわけにも行かなかった。シャンプーをして身体を磨くように念入りに洗っただけなのに、かなり時間が過ぎたようにも思える。吉田に申し訳ないと思った。

バスタオルを使い終わって、百合子はたと迷った。下着をどうするのか。下はともかく、上はどうしたものか。狎れた二人ならそれなりに暗黙の手順もあろう。しかし今宵は、自分からそうなることを依頼しているとはいえ、自分にとっては初めてのことだし、吉田

とそうなることも無論最初であった。結城の小説を思い出しても、こういう場面はなかった。狎れ合った二人のように、下着もつけずに、素肌にバスローブだけなんて、自分には逆立ちしたってできないことである。よしんば下着を着けてもその上にバスローブだけで、こういう顔をして吉田に对面せよというのだろう。

いつそのこと、最初の考えのように、ちゃんと上下の下着を着けて、バスルームに持ち込んだ緩やかな自分の部屋を着たほうが、自分が気が楽であった。百合子は浴室を見回した。同じ浴室やトイレを、自分が使った直後に男性が使うことは、百合子にとっては初めてのことである。浴室をきれいにし、百合子は部屋へ出た。

お先に失礼しました」

お、出たか。それじゃ、わたしも浴びてくる」

部屋に備え付けの英文の観光案内を見ていた吉田はそう返した。

吉田がバスルームへ消えると百合子は、何か忘れてきはしなかったかと、あわてて身の回りのものや着替えた下着をチェックしてしまった。吉田が浴室にいる間、百合子は髪を乾かした。ホテルといっても何か民家の一室のような造作が、妙に百合子を落ち着かせた。三階のせいか物音ひとつしない。ドライヤーを止めると、静寂のベールに覆われた部屋で骨董品もの」のラジオから、引き続きモーツアルトが流れている。

吉田は、バスタオルで頭をごしごし拭きながら、バスローブ姿で出てきた。冷蔵庫から微炭酸入りの水のボトルを出し、二つのグラスに入れた。ひとつを無造作に百合子に勧めた。無造作だったけれど、吉田のそうした優しさが百合子は好きだった。しかし、吉田は多分、百合子だけではなく、いままでに彼が出会い、心が知れあった女性にはみんなそうしてきたに違いない。百合子の心の中には

嫉妬の小さい渦ができた。でも、そうしてくれたいまの吉田に百合子は自分への優しさを感じた。

吉田がヘア・ドライヤーを使っている間、百合子は日本からチューリヒへ来る機内の機内放送のこととか、機窓から見えたアルプスのこととか、チューリッヒ空港で列車の乗り場を訪ねたこととかを話した。吉田は、ドライヤーをかけたり、水を飲んだりしながら、百合子の話を、

あ、そう」とか

おーん」とか、相槌を打っていた。

突然、

あの、水、もう一杯あるかな」

と百合子に、話の流れにはまったく無頓着かのように頼んだ。

あ、気がつかなくてごめんなさい」

百合子は、あわてて冷蔵庫の方へ急いだ。しかし何だってまた藪から棒に水なんか頼むのかしら。わたしの話を聞いているんだか、いないんだか、どうなってるの、もう！

百合子は、多少ぶりぶりして冷蔵庫へ向かった。いままでの吉田は、大概是レストランや居酒屋で、小卓を前にして百合子の話に聞き入ってくれた。それは、レストランや居酒屋がそういうところだからかもしれない。しかしいまは、部屋全体が二人のための空間であり、吉田はそこで髪を乾かし、シャワー上がりで喉が渴いている。

百合子の話に耳を傾けるといふよりは、髪を乾かしながら」生返事をしているような状況だった。しかし百合子は、吉田がそんな風に話を聞いていても、自分の話を聞いてくれている人が、ひとりここにいることが、とても嬉しいと、吉田のグラスに水をいれて、取って返してくる時にそう思った。

そろそろ休もうか」

ひとしきり話をした後で、吉田がいった。
はい」

百合子は、蚊の鳴くような声でいった。それまでの寛いだ気分が、突然、緊張感につつまれ、胸の鼓動が聞こえてきそうだった。耳朶が急に火照るのがわかった。

吉田は、室内灯を枕もとの灯りに代えた。百合子は光の死角で吉田の目を避け、絹の寝衣に着替えた。迷ったけれど、胸の下着は外した。それが自然だし、いつも休む時はそうしていたからだ。

ツイン・ベッド・ルームだったので、百合子は空いている方のベッドに横になった。

このあと、どうなるのかしら。吉田さんのベッドへ行かなくてもいいのかしら。吉田さんがこちらへ来てくれるのかしら。おやすみなさいをいうのも、何か白々しいし。百合子は、どうしていいかわからなかった。心臓は、高鳴るばかりであった。胸に手を当てた。

左胸の方は心臓の鼓動が伝わってくる。両方の胸の先が固くなっている。こんなことが吉田に知れたら、恥ずかしくて困る、どうしよう。耳と頬が熱く火照っている。喉が渴いてきた。百合子は、落ち着くために大きく深呼吸をした。

それを機に、吉田が自分のベッドから百合子と呼んだ。百合子は、行き詰まった事態を、やはり吉田が切り開いてくれたことを嬉しく思った。吉田の声を聞いて、百合子は何の躊躇いもなく機械仕掛けのように、吉田が開けてくれて待っている寝具の中へ滑り込んだ。吉田のベッドへ一、二歩歩いていく時に、百合子は自分の身体が十分湿潤になっているのに気がついた。吉田に何もされないうちに、こんなになってしまって、吉田は自分を何と思うだろう。百合子は自分で制御できない自分の身体を恥じた。

吉田の胸元へ滑り込むと、吉田に背中をそっと搔き寄せられた。吉田の左手を腕枕に、百合子は胎児のように横に丸まって上手く収まった。自分の胸の前に祈るように両手を握

ると、手首のあたりに、珊瑚色の絹の寝衣の上から、二つの乳首がまだ固いままなのがわかった。目の前には、石鹸の香りがする吉田の胸板しか見えない。これから、どうするのだろう。黙々と始まるのだろうか。それって、そういうものなのかしら。百合子は、目をつぶって次を待った。すべて、この人の言うとおりにしよう。自分が選んだ人なんだから、たとえ結果がどうあれ、この人の成すがままだ身を任そう。でも、まだ何もしてくれない沈黙の今が、不安といえど不安であった。百合子は吉田に、何でもいから、何か言って欲しかった。

ちょうどそのとき、吉田が百合子の胸の内を見透かしたように言った。

百合ちゃん、固くなってるね。ほら．．．こんなに。しょうがないね、初めてだもんね。もっと力を抜いて寛がなくなちゃ」

吉田は、百合子の肩から腕へと、百合子の身体の感触を確かめるようにひとつひとつ握っていった。頷く百合子の髪を、優しく撫でた。

ほら、満員電車じゃないんだから、胸の手をほじめて、そう．．．、うん、この足もこんなに縮めていないで．．．、そう．．．ずっと伸ばして．．．ね、うん、そうそう．．．吉田が百合子の手首をとって伸ばしてくれたり、膝を柔らかく押し広げてくれるので、百合子は気分が次第に和んでいくのがわかった。身体の挙動とともに、吉田の手の感触が絹の寝衣をとおして自分の肌に伝わってくるのが快かった。今までにない感触であった。

百合ちゃん」

はい？」

大丈夫？」

はい」

何が大丈夫か解らなかった。相変わらず、胸の鼓動は続いているし、身体は今にも震え出しそうであった。吉田の片脚が、吉田によって緩やかに伸ばされた百合子の両足の間に

割って入った。吉田の脚が、百合子の湿潤な部分を押ししている。そこは、だめ。百合子はそう思って位置をずらそうとしてけれど、吉田の脚が重くてどうにもならなかった。

吉田の手が、絹の寝衣の上から百合子の乳房を緩やかに揉んでいる。膨らみを押しして優しく絞るようにしたり、指が乳首の周りを周回したりする。百合子は自分がどこかへ落ちそうな感覚に襲われて、吉田の寝衣をきつく握り締めた。胸が高鳴り、息苦しくなって唇を開けた。

大丈夫？ 気持ちいい？」

百合子は二度続けて首を縦に振った。言葉の返事なんか考えられなかった。吉田の言葉に反射的に首が動いたのだ。

ヤスしよう。こっちを向いてご覧・・・」

吉田の唇が、百合子の唇をそっと押した。柔らかくなぞった。百合子は、唇を固く閉めた。

口、緩めて・・・、そう、リラックスして、そう・・・」

百合子は、解らないまま、吉田の言うとおりにした。自分の意識なんか、とっくにどこかへ行ってしまっていた。吉田の手が、百合子の頬に添えられて、吉田のほうを向かせた。

吉田は、丁寧に、時間を掛けて百合子の唇を吸った。百合子にとって接吻は、初めてではないだろうが、聞（ね）では初めてのはずである。百合子のところが十分に準備できるよう、また、羞恥心からできるだけ開放されるよう、吉田はここを配った。

接吻で百合子の身体は、だいぶ弛緩してきた。とはいえ、長い時間唇をつけていると、苦しいと見え、時々自分から唇を外し、大きく喘ぐ。わずかに離れた唇を通し、吉田は百合子の吐息を吸い、百合子は吉田の呼吸を吸いながら、ふたりは陶然と戯れた。百合子は目をつぶったまま、無意識の内に唇で吉田を探した。吉田は、そんな百合子をいとおしく思った。これからも大事にしてやらなければ

と思った。吉田の唇は、迷える百合子の唇を受け止めた。

百合子が、唇を通して吉田に十分慣れたと思われたころ、吉田は百合子の胸に手をおろした。絹の寝衣の上から、百合子の乳房を包むようにして探る。仰臥しているのに、百合子の乳房には量感が漲っていた。あれ、こんなに大きかったかな。大事な品物を鑑定するように、吉田はゆっくりと揉みしだいていった。特定の角度から乳首の方へ吉田の指が這うとき、百合子が微かに声を立てた。反対の乳房にも入念な愛撫を加えた。空いている方の乳首を口に含んだ。乳首に吉田の舌が絡んだとき、百合子は脚をぎゅんと蹴るようにして、全身をびくんとさせた。

百合子は、吉田の接吻で身体が宙に浮いたようになってしまった。苦しくなって自分で吉田の唇を外し、やや楽になったと思ったら、再び吉田に責められ、今度は後頭部と両足が痺れたようになってしまった。

吉田の手が、胸を弄っているのがわかった。あ、だめ、固くなった乳首に気がつかないでいて欲しい。でも、解ってしまう。どうしよう。百合子はとても恥ずかしかった。

吉田の手が、自分の胸の特定のところに触れるるとき、思わず声が出してしまった。それでも声が出そうになったが、何とかこらえていたのだ。結城の小説の登場人物ではあるまいし、初夜からくぐもった歓喜の声が出てしまうなんて、百合子は自分を恥じた。声が出ないように歯をしっかりと噛んでいた。そうしたら今度は、吉田の舌が、こともあろうに知られたくなかった自分の固くなった乳首をつついた時、思わず全身に電気が走ったようになって、自分の体がびくんと瞬間的に波打つを感じた。

百合ちゃん、もっと楽にして・・・、あの、声、我慢しなくていいからね。自然のままで、ね、気持ちいいから出るんだよ。わたしもそ

の声を聞くと余計に嬉しいんだ」

百合子は、その言葉が嬉しかった。楽にするもしないも、もう自分では自分の身体をどうにもしようがなかった。声は自然に出てしまうし、身体も勝手に動いてしまう。もう、わたしなんかなかった。

こういうことは、初めてのときのことか女性の深層心理に深く焼きつくというのを聞いたことがある。初めての経験が、安心感と優しさの中でなされたのと、そうでないのでは、その後のその女性のセックス感到いに影響し、人生観すら左右しかねないというのだ。そのことの真偽は、いまの百合子には確かめるべくもないが、不安だらけだった初めての経験というものが、何はともあれ、極めて満足できる状況の中で進行していることに、百合子は限らない安堵感を覚えた。

いままで誰も入り込まなかったわたしの秘境へ、吉田さんは用意周到ともいえる優しさで足を踏み入れた。初めてのときは、歓喜も何もなくあつという間に終わってしまう、というのに、少なくともわたしの場合は、吉田さんが初心者向けの悦楽の皿をひとつずつ与えてくれ、「一緒に食べ方まで教えてくれる。ここまででも、わたしにはすでに十分であった。

吉田は、片膝で割り込んでいる百合子の太腿の片方を、自分の手で少し外側へ押しやった。百合子はやや抵抗したが、吉田が二度目にそっと開いた時、素直に従った。吉田が、そんなに、と思うほど開脚した。吉田は恥丘に手を置いた。百合子は一瞬ぶるつとしたが、開いた脚はそのままであった。百合子が恥ずかしがるといけないので、薄い寝具は掛けたままにしておいてやった。

レース飾りが施された絹の薄物は蒸れていた。吉田は、ははん、と思った。蒸れた薄物の上から、吉田はその形通りに、上の固い

ところから下の柔らかいところ、その周辺の唇までを優しく撫でた。何回も何回も繰り返し、時に脇を散歩したりした。吉田の指が湿った。吉田の唇は、百合子の乳首を弄んでいる。

吉田は、百合子の下着に手を掛けた。

百合ちゃん、ごめんね、ちよっと・・・」

あ、はい」

吉田が下着を脱がそうとして、百合子に尻を上げを促した。百合子は、消え入りそうな返事はしたもの、膝を閉じてその気配がない。

恥ずかしくないよ。わたしも脱ぐから、ね・・・、穿いていたらできないよ・・・」

吉田は、もう一度、百合子の尻を促した。

吉田に背を向けて丸くならせ、レースの薄物を尻の方からくりと剥いてしまった。

百合子は、吉田の手が開脚を促したとき、それだけではどうしても避けたかった。重厚な接吻と胸への愛撫で、自分のその部分が自分に関わりなく潤沢になっていくのが気になって仕方がなかった。きっと下着も外からわかるほど十分に濡れているに違いない。だから、脚はすぐには開けなかった。でも、いつまでも子供みたいにしてはいられないし、成熟した女性なら誰でもそうなるに違いないのだと、自分を無理やり納得させた。幸い、吉田さんは寝具を剥がさないで置いてくれる。

そうしたら、今度は、吉田さんはその濡れた下着の上に手を置いた。やだ、もう。百合子は、本当に死ぬほど恥ずかしかった。こんなに濡れるなんて、予想だにできなかった。そしたら今度は、吉田さんの指がデリケートな部分を行ったり来たりする。途中で止まったり、挟んだり、ゆすったり、ああ、もう、だめ。そこから頭の方や足のほうに、電流が断続的に強くなったり弱くなったりして走る。吉田さんの指に翻弄されて、頭の中が霧が掛かったようになったり、下半身が間歇的に

痺れている時に、下着を脱げ、だなんて言ってくる。次から、次へと難しいことをおっしゃらないで欲しい。もう、自分では何もできないのだ。いずれ下着は取らなくてはならないのだから、汚れているのなら自分で取りたかった。吉田さんに取ってもらうのなら、どこかのタイミングで新しい下着に替えなかった。しかし、いまはそんな意識も朦朧とし、身体はもちろん言うことを聞かない。

吉田さんのおっしゃるとおり、やっこのことで横を向いて背を丸めたら、くるくると下着は丸めて脱がされてしまった。あつ、その下着を明るいところへ出さないで。百合子はしきりに手を伸ばして、脱がされた下着を追おうとしたが、気だるい手にはそれができなかった。百合子は、顔から火が出るほど恥ずかしく、顔を見られないように、吉田の胸にしがみついた。

吉田は、百合子を優しく抱いて、髪を撫で、耳たぶに息を吹きかけた。百合子は、ぞくぞくと身震いをした。吉田は、百合子の手を柔らかく握って、耳元で自分に触るように促した。吉田は、まだ逡巡している百合子の手を、ゆっくり自分に導いた。

最初、吉田にちょっと触れた百合子は、熱いものにも触ったかのように、素早く手を引いた。今度は吉田が、それを握るように優しく案内した。百合子は、最初は戸惑っていたが、慣れてくると、それをじっと握り締めていた。

「これが、君の中に入っていく・・・、イメージしてご覧・・・、初めは痛いかも知れないけれど、そのうち、何回かしていると、だんだんよくなる。初めての時に痛くない人もいますよ」

百合子は、もっと小さいものを想像していた。こんなに大きいものがあそこに入るのだろうか。こんなに大きいと痛いかも知れない。でも、みんなしているんだし、痛くても我慢

しよう。

痛かったら、そういうんだよ。我慢することはないからね」

そういって、吉田は百合子に覆い被さっていった。下になった百合子は、離れて顔が見られるのが恥ずかしかった。瞼を閉じて、吉田の腕を握った。

脚を開いて、うんそう、あ、そんなに開かなくても大丈夫だよ」

百合子は、吉田の言うことに忠実に従った。百合子の入り口の周りを吉田のものが擦っているのが解る。指でされたのよりは、遥かによかった。濡れているのが恥ずかしかったが、濡れているから気持ちいいのかも知れなかった。吉田のもので固いところを刺激されると、腰の中に電流が走りまわるようだった。ふーっと息をついた。

じや、行くから・・・」

百合子の周辺を徘徊していた吉田のものが、百合子のいちばん柔らかいところへ押し入ってきた。あんなに大きなものが、と百合子は思った。百合子は自分の中に異質の膨張感を感じた。気持ちよかった。そこで、しばし戯れていた吉田のものは、急にもっと押し込んできた。

あつ」

百合子は、切れるような痛みを感じて、吉田の胸を両手で思わず突き上げてしまった。

あ、ごめん。痛かった？ 少しきついかも知れない。もう少しゆっくりしてみよう。大丈夫だから、静かにしていてね」

吉田は、再度試みたが、やはり、百合子は痛がって腰を引いてしまう。十分なほど濡れているのに、少し無理があった。

百合子には不安がよぎった。こんなに痛いものなのかしら。他の人は、この痛さを我慢するのだろうか。でも、ちゃんとするにはもっと痛いに違いない。出血もあるのだろうか。こんなに痛かったら、大出血になってしまう

のか。医者はいるのだろうか。

吉田は、百合子に優しい言葉を掛けながら、その周りを自分のもので丁寧にあ撫してくれる。何回も何回も試行してくれるが、百合子の身体は吉田を受け入れることはできなかった。百合子は気が急いた。わたしって、そういうことができない女なのだろうか・・・。

百合ちゃん、心配することはないよ。今日ハリーサルだから。明日は本番だからね」静かに笑って、吉田は百合子を抱き寄せた。自分が仰臥して、百合子に横になるように仕向け、片脚を自分の片脚に絡めさせた。百合子の熱く湿った部分が吉田の大腿部に押し付けられた。百合子に自分を握らせた。

百合子は、不安で一杯だった。吉田の目を見た。大丈夫だよ、吉田の目はそういつていた。何も一晩の内に、一気呵成にしなければならぬことはない、喜びは二晩に分けた方がいいだろう、明日は必ずできるから、ね、吉田はそういつて百合子の額を指先でこんこんと甘打した。百合子は、吉田の胸に顔を埋めた。吉田の胸が温かかった。吉田にずっと随いていきたい、と思った。

静かな朝だった。吉田はいつものように七時前には目を覚ました。カーテンを通して室内が薄明かるくなっている。百合子はまだ、しどけない顔で眠っている。夕べあんなに心配していたのに、こんなに熟睡できるのも若いせいかな、吉田は自分のむかしを懐かしく思い出した。散歩でもしたいが、百合子をそっとしておいてやりたい。こんな片田舎の小さなホテルには、新聞が届いているわけではなく、百合子が目覚めるまでゆっくり横になっていよう。向き合っている百合子の唇を見ていた。夕べ、わたしの唇を探しにきた、その唇。

百合子が、もそもそと動いた。起きるかも

知れない。そう思った吉田は、瞼を閉じた。

百合子がきよろきよろしている気配がしている。目をつぶっていても、そうしたことが解るのは、人間が発する電磁波をこちらが感じることが出来るからだ。やがて百合子は、指先で吉田の鼻をとんとんと突付いた。間を置いて、吉田の上下の唇を右へ左へとゆっくりなぞった。吉田は寝た振りをして、顔を物憂げに横へ向けた。

百合子は、吉田をそのまま寝かせておいてやろうと思った。吉田が目を覚ます前にシャワーを浴びようと思った。起き上がろうとして、百合子は一糸まとわぬ自分に気がついた。

「いやだあ」

こんなことは、いままでに一度もなかった。下着はどこへ行ったのだろう。吉田に見つかる前に探さなくっちゃ。百合子は、四つん這いになって、ベッドの足元の寝具をそっとまわって見た。見た。見た。

吉田が薄目を開けたのは、ちょうどそのときだった。百合子の大きな白い尻がこちら向きに開き、その向こうに乳房が扇情的に揺れている。吉田は、百合子に悟られないよう、二度、三度、瞼を開けたり閉じたりした。少年のころ、従姉妹の姉が風呂上りに着替えるのを覗いて、胸がときめいたのを思い出した。思わず自分を握ってしまった。下着を探し当たった百合子は、スリッパのところに、夕べのものをしまい、新しい下着を出して、シャワー室へ向かった。

朝食は、昨夜の居酒屋兼食堂と廊下を挟んで反対側にあった。日本人には薄暗いとも思えるほどの静かな照明が、気持ちを落ち着かせた。部屋の片方の壁際に、テーブルが据えられ、何種類かのパンや、近辺の野生の苺で作ったと思われるジャム、絞りたての何種類かの果汁、それに保温されている焼きハムやソーセージなどが置かれている。日本では、骨董品のような、焼き上げれば飛び上がってパンが出てくるトースターは、百合子を大い

に喜ばせた。全部、自分で用意する仕組みである。百合子は珈琲を、吉田は紅茶を、それぞれ手にして、窓際の小卓についた。隣の小卓に坐っている老夫婦と思われる二人組みと目があつた百合子は、朝の挨拶をした。それに答えて老婦人が微笑みながら、

「グッモーニン、トゥーユ」

とゆっくり返した。なるほど、貴女に良い朝を」か、トゥーユ」が付加された「グッモーニン」を初めて聞いた百合子は、大いに納得した。

百合子は、吉田と向き合つて席をとつた。

小卓には、今朝摘んできたばかりのような紫色の小花が一輪、小さなグラスに置かれていた。白地に赤の格子のテーブルクロスが可愛らしかった。

「おはよう」

吉田があいさつを言った。

「グッモーニン、トゥーユ」

百合子が、おどけて返した。言つてから百合子は、顔をやや下に向け、下唇を軽くかんで、上目遣いに吉田を見た。

「さっそく、覚えたね」

「トゥーユって、いい言葉ですね」

「そうだね。英語はいつも、わたしとあなたを明確にする言葉だからね。日本語は省略の美で成り立っているから、英語風にあなたのために、とかいったら、ちょっと野暮いな」

そこへシャーリーが入ってきて、パンなどの補給をした。百合子たちの小卓へ来て、食べ物などに満足しているか、と問うたので吉田は、百合子も自分も大変満足していると答えた。シャーリーはこぼれるような笑顔でセンキューと言って、厨房の方へ消えた。

吉田のトーストにバターを塗っていた百合子は、吉田の視線を感じた。目をトーストから上げる。吉田と目が会った。百合子は、全身の血が逆流するほど恥ずかしくなった。髪に隠れて吉田には解らないだろうが、耳朶が一気に火照るのを意識した。どきどきして

きた。

「そんな目で見ないでください・・・」

百合子は、消え入りそうな声で言つて、トーストにバターをこしこしつけた。

「あ、そんなに・・・、もういいよ、それくらいで」

「すみません。だって・・・、もうっ」

百合子は、珈琲をあわてて口に含んだ。とても熱かった。どうしようかと思つたが飲み込んでしまった。喉がひりひりした。すかさず、冷たい牛乳を飲んで、口を冷やした。ふーっ。皮が剥けるかも知れない。

「大丈夫？」

吉田が、心配した。

「大丈夫ですーっ、吉田さんて意地悪なんだからっ」

「はい？」

吉田は、おどけて聞き返した。

朝食を終えた百合子たちは、アイガー、メンヒ、そしてユングフラウという、観光客が憧れる、スイスの四千メートル級のアルプスの近くまで行つてみることにした。

ラウターブルンネンの駅から登山鉄道にことごと揺られていく。アルプスの青さとそれを覆う白銀の雪、一面、牧場のような百合子にとってはまるでおとぎに国のような世界を登山電車はゆっくりゆっくり、ことごと、ことごと、と登っていく。最大傾斜角度二五度というこの路線は、動輪のほかに、二本の線路の中央に敷設されたぎざぎざの線路に車両の歯車を噛ませて上っていく。汽車の進行にしたがつて、雄姿を見せる三山は、少しずつ形を変え、百合子を厭きさせない。

途中、停車する駅は、人影も少なく、駅員もいないようだ。小さな村の駅らしく、駅に回りに一、二軒の商店らしきものがあるが、看板を出していないので、気をつけてみてい

ないと、それとわからない。珍しい形の屋根瓦や、赤や緑や青など原色に近いその色、屋根の勾配など、これらの要素が織り成す異国情緒が百合子の旅情を倍化させる。

約一時間ほどで、登山列車はクライネ・シヤイデックという、やや高原状になったところにある駅に着く。ここは、インターラーケンを出発した登山列車が途中で二手に分かれ、ライターブルネンと反対側のグリンデルワルトを経由した線路が再び合流する地点でもある。標高二〇六一メートルだが、広い高原が広がり、のどかな平地を、乗り換え列車を待つ客が、散策を楽しんでいる。前を仰ぎ見れば左から三九七〇メートルのアイガー、真ん中に四九〇九メートルのメンヒ、そして一番右にはユングフラウ四一五八メートルが屏風のように迫ってくる。アイガーは百合子もその名を聞いたことがある山であった。

吉田の説明によれば、その北壁はほぼ一八〇〇メートルにわたって垂直であり、多くのロック・クライマーを魅了している、のとことである。しかし、挑戦したものの帰らぬ人となったクライマーも多いそうだ。百合子は、来る時の飛行機から見えたスイス・アルプスのいくつか、この山々なのだと思った。

ここで、別の登山列車に乗り換える。その線路は、最初は緩やかに上っていく。ずっと遠くに、列車が小さく見えるころ、列車は急勾配のトンネルの中に消えていく。ここから終点のユングフラウヨッホまでは、その行程の四分の三がトンネルだそうだ。アイガーとメンヒの胎内をえぐるように進んで、約一時間後終点に着くが、その駅も地下、といって標高三四五四メートルの岩山の中なのである。少女時代に読んだ秘密基地のように、その終点は、岩盤の中に休憩所や駅事務所室、売店などがゆったりと造られている。

途中列車は、駅とも休憩所とも、あるいは展望台ともいえるようなところ二カ所で、それぞれ十分くらいの休憩をとる。急に高度を

上げるので、体質が適さない人は高山病に掛かる。頭痛と気だるさで、ほとんど放心状態になる。そういう人たちが、休憩所の大部屋のような床に、目をうつろにして魚市場の鮪のようにたくさん横たわっている。列車が長い時間停車するのは、観光客が高所順応するのを待つ意味もあるのだという。

吉田が、盛んに百合子のことを気にかけて言葉をかけてくれるが、百合子はまったく平気であった。吉田のジャケットの後ろをつかんで汽車を降りる。覗き窓から見ると、何千年もの間その様相を変えないヨーロッパ最大のアレッチ氷河がとてつもなく大きな滑り台のようにずうっと下の方まで下っている。先のほうは雲の中で見えない。二十キロもの長さだという。

天然の氷河をくりぬいた「アイスバレス」では、ペンギンや白熊の氷彫刻が百合子を迎えてくれた。百合子は氷河をくりぬいたトンネルの中を、吉田の袖を握りながら随いていった。デイズ・ニールンドのトンネルのように、何が出てくるか解らないが、その期待感と不安感が百合子を面白がせた。トンネルの曲がり方や、展示物への照明によって、天然氷河の織り成す水色の鮮やかさが、幻想的な探検をしているようで、百合子は驚きや怖さで、何べんも感嘆の声をあげた。

終着駅ユングフラウヨッホは、メンヒとユングフラウの鞍部にある駅だが、依然として岩盤と氷河の山の胎内であった。高山病でふらふら歩く人もいたりする乗客に混じって、外へ出た。万年雪の上に建設されている広い展望台からは、目の前にぐんと聳え立っている白銀のユングフラウが迫っている。このまま、万年雪の上をずうっと歩いていくと、ユングフラウへ登っていきそうだ。現に、ずっと先まで歩いていった人が、小豆のように遠く小さく見える。

展望台の手すりに寄りかかり、清冽な空気を胸の奥まで感じながら、ユングフラウの雄

姿に見入っていた百合子の肩を、吉田が後ろから優しく抱いた。百合子の両の肩から前にたらしめた両腕を、百合子の胸の前で結んだ。

百合子の胸が、吉田の両腕を弾力で押し上げた。吉田の頬が百合子の耳のあたりを押した。

百合子は、吉田の呼吸を耳に感じ、身震いを必至にこらえた。今晩は、上手くいって欲しい。自分では、どうにもならないもどかしさの中で、万事を吉田に託すほかはないが、今度、上手くいかなかったら、どういうことになるのだろうか。百合子は、祈るような気持ちで、吉田の両手を自分の両手でぎゅっと包んだ。百合子のところのうちを感じたかのように、吉田が百合子の耳元で、

震えているね。今晩はきっと大丈夫だからね。心配しなくてもいいよ」

と、囁いた。百合子は、振り返って吉田に抱かれたかったが、恥ずかしくてそれができなかった。そうする自分が恥ずかしかったし、ほかの観光客の目もあった。高さが、百合子たちの足元にも及ばない、遠くの小さな銀雪をかぶった山々には、歩いて渡れるような雲が掛かっている。真上の空は、何の混じりけもない真空のような真っ青。百合子と吉田を吸い上げていきそうであった。

ラクターブルンネンの宿からユングフラウヨッホまでの短い一日旅は、百合子を大いに満足させた。小さいころ絵本で見、最近では旅行ガイドブックで写真を見ていた、その実際の風景の中に自分がいるだけで、百合子は興奮した。やはり、聞くと見るとでは大違いなのである。牧草地でゆっくり草を食んでいる家畜のカウベルの音や、ごとごととゆっくりだが力強く斜面を登っていく車両の振動、アイガーやメンヒやユングフラウといった名山と自分との間に、レンズやスクリーンといった一切の遮蔽物なしに、直接向き合っていることも、自分の実在を確実に実感させてく

れた。

吉田は、浴室で百合子に優しくしてやろうとしたが、そういうことに馴れていない百合子が、かえって緊張してはいけないと思い、自分の思いやりと欲望を抑えた。昨日のように、百合子に先に使わせた。

昨夜は、少し無理をすればできたはずだ、吉田はそう思った。百合子に多少の辛さはあっても、良かれ悪しかれ通過儀礼なわけだし、百合子もそれを承知しているはずだと思った。世の中の若い人たちには、たとえふたりが深く愛し合っていても、最初の時が、惨憺たるものであった場合も多々あることである。何回試みても、何日もなかなか和合できない組もある。しかし、ふたりの緊張がとれ、お互いを理解しあうようになれば、そういう経験は、あとで皆、笑って話せることなのである。

しかし、百合子の場合は、心底惚れ込んだ男と自然にそういう時期を迎えたわけではない。自分でそういうことにけじめをつけ、精神的な高見を目指したいと希求しているのだ。

吉田は、百合子のそうした願望実現の請負人として指名された。とはいえ、通常のビジネスのように条件が双方を満たせば成立するというものではない。そこには、人格や情念といった人としての尊厳が絡んでくる。百合子が、いくら現代っ子で割り切った考え方をするとはいえ、理屈だけでこの「案件」を吉田に頼んだのではなからう。

吉田にしてみても、百合子の理屈を聞いただけで、こんな「大仕事」を引き受けることはできない。百合子がこのような、極めて私的なことを自分に頼んでくるからには、自惚れかも知れないが、彼女が自分を信頼し、愛し始めていたに違いないと思った。百合子は自分の一途さから、自分がわたしを愛し始めているということに、気がつかなかった。少なくとも、新宿のあの深海バーに潜るまでは、そういう自覚がなかったと思われる。

吉田は、素直に考えて、百合子を初めて会ったときから気に入っていた自分に気がついた。しかし、吉田が百合子を知ったのは、俊恵がいたからである。かつての俊恵は、いまの百合子のように、吉田の傍にいた。そのころ俊恵は、まだ高校生で、吉田の周りを子犬のようにまわりついていた。早熟な都会の高校生である俊恵の胸は、吉田のことで、日に日に膨らんでいった。デモや集会や勉強会とかで吉田が下宿に帰らないときは、階下の俊恵はまんじりともせず朝を迎えたものである。吉田は晩生であったのか、俊恵の胸の内を知るよしもなかった。

百合子は、俊恵の店の開店記念パーティーで、吉田と巡り会った。会うたびに吉田という人物が、これまで自分が遭った男と違うということに興味を持った。何を聞いても、相談しても、百合子なりに納得できる答えが、いつも得られた。それは、坂本とは、また違った味があった。

母・俊恵が若いころは、はきはきして、世話焼きで、長屋のおかみさんのところがあつた。百合子は、話し振りも静かで落ち着いた雰囲気がある。それゆえか、歳より老けて見られることが多い。しかし、熟慮断行というか、思ったら断固やりとおす意志の強さを感じさせる。

そんな百合子が、吉田に電子メールをよく送ってきた。お話がある、お話を聞きたい、といった他愛のないものである。会えば、何かしらテーマを持っていて、熱心によく聞いた。メモとってもいいですか、とか、どうして、そんなにたくさんのかを知っているんですか、とか、吉田が酔いにのっていったことまで、真に受けるところがあつて、吉田はよくそれを楽しんだ。

吉田は、百合子との逢瀬のような時間が嬉しかった。世の中の娘を持っている父親を、羨ましいと思った。しかし、吉田の気持ちの中にも、百合子の存在が少しずつ大きな空間

を占めるようになってきていた。会っている時に、百合子の唇や、胸や指が気になり始めていた。また、ひとりで風呂に浸かっていたり、床に就こうとしたとき、あるいは出張先のホテルで歯を磨いている時などに、百合子を思い出すことがある。若い人たちなら、そんな時、すぐに電子メールを打ったり、電話をしたりするところだろう。吉田も電子メールの発信ぐらいいは、技能的に何ら問題はない。しかし、吉田はそうしなかった。百合子にとって見れば、吉田はもともとは俊恵の店の客である。それが、百合子の信頼できる相談相手になった。ただ、百合子は吉田が学生時代に、俊恵の家に下宿していたことは、多分知らない。俊恵は、そこまでは娘には話していないであろう。

単なる酒場の女の子と客が親しくなったのと、訳が違うのである。吉田は、自分の百合子に対する心情を、曖昧（おくび）にも出さなかった。自分の父親ほど歳が離れている男が、自分にそんな感情を持っていることがわかれば、百合子に心理的に大きな抑圧になると思ったからである。

吉田は初め、百合子が自分に会うのは、母親の伝（つて）を活用しているちゃっかりした娘といった印象があつた。別にそれは、吉田の不快感を喚起しなかった。吉田も俊恵の娘なら、という気持ちがあつた。しかしほどなく、ふたりからは俊恵の存在が遠ざかっていった。百合子は吉田に対して、尊敬の念をますます高めていったし、吉田は百合子を俊恵の娘というより、自分の仮想娘のように感じていた。ふたりのこのような、相手に対する感情が、それぞれの表層的相互認識から、深層心理的認識へと至るには、それほど時間はかからなかった。

百合子は、自分の吉田に対する感情を正確に理解しないまま、吉田に一生一台の依頼事をした。ことに重大さは重々承知していたが、自分の気持ちの分析に気が回らず、吉田に依

頼事をしている最中にそのことに気がついたのであった。

吉田は百合子から相談を持ちかけられたとき、若いころなら、実はボクも、と告白したであろうが、そういう立場にいないことを知っていた吉田は、物分りのよい大人として振舞った。もし自分が、百合子を愛していないなら、かつては思いを寄せられた俊恵の友人として、娘百合子のこの申し出を、彼女が傷つかないように撤回させるのにかなり腐心したことであろう、と吉田は思った。

百合子が浴室から出てきた。
着替えておきなさい」

寝衣になっていない百合子をみて、吉田はそう声を掛けて、浴室へ入った。百合子が、いつそうすべきか迷ったりしないように配慮したのだ。

百合子は、不安といえど不安であった。今夜こそ、と思ってはみても、こればかりは自分の意気込みではどうにもならなかった。子供ではあるまいし、このままずっとできないとは思わないが、今夜決着をつけないと、東京へ持ち越すことになる。吉田には、無理を言って東京でそうなるようお願いすれば、多分受け入れてくれそうであった。しかし、それでは憧れのスイスで葬ることはならない。この期に及んで、百合子は自分の幼児性に厭された。鏡の自分向かって、ばあか、といい、さらに、いー、という顔を作った。

昨夜の絹の寝衣は、濡れてしまったので、上着の方だけを素肌につけた。下着は、この旅行を機会に母ともよく行くランジェリー・ショップで買い求めたものであった。薄い色合いとおとなしいレースの飾りが気に入って買ったが、人に見られることを意識して下着を買ったのは、その時が初めてであった。その上に何を穿こうかと迷ったが、適当なものがないので、百合子はそのまま、夕べ吉田と休んだ方のベッドへ入った。坐って後ろに寄

りかかり、毛布を腰まで上げて、枕もとの観光案内所を手にした。

今日、ここまでは割と平静のためか、胸にも身体にも昨夜のような変化は、まだ出ていなかった。少し、潤沢になっていたほうが、そのとき円滑なのではないのだろうか。この時点で、何の変化がなくても大丈夫なのだろうか。そういうことって、自分で用意するところなのだろうか。それとも男の人を煩わせるのが自然なのかしら。百合子は、何をしたいかわからないまま、自分が時々するように寝衣から手を忍び込ませ、胸の先を指の腹で優しく撫でたり、両の手で胸を押し上げたりしてみた。

そのとき、がちやっと扉の音がした。ベッドからはその入り口は見えないが、吉田が浴室から出てきたのがわかった。百合子は、飛び上らんばかりに驚いて、あわてて寝衣の胸を合わせた。このようなところだけは、なんとしても吉田に悟られたくはなかった。

吉田は、冷蔵庫に寄って、ペリエをグラスにあけると、

君はいいの？」

と、百合子を見た。

はい。わたしは・・・」

百合子は喉が渴いていたが、まだ、飲んでいなかった。自分が飛んでいって、吉田のために用意してあげなくては、と思ったが、下に下着しかつけていないので、どうにもならなかった。こんな不精女で、先にベッドで待つような不躰な自分を、吉田がどう思うだろうか、とても気になった。恥ずかしさと切なさで、気落ちしてしまった。

吉田が、髪を乾かし始めた。こんなに離れていては、話もできない。傍にいてやりたかったし、お水くらい、お安い御用であった。自分も髪を乾かす吉田の傍にいて、いろいろな話がしたかった。話がなくても傍にいたかった。自分が早々とベッドに入り込んでしまったことが悔やまれた。

吉田は、百合子がすでにベッドに入っているのを見て、あれっ、と思った。疲れたわけでもあるまいし、どうしたのかな。吉田はドライヤーで髪を乾かしながら、そうか、と合点した。そうに違いない。吉田はドライヤーを止めて浴室へいった。

吉田を見ていた百合子は、吉田がドライヤーを止めて浴室へ消えた理由がわからなかった。

吉田は、浴室から乾いたバスタオルをつかんでくると、それを百合子のほうへ、

ほうれ」

といって、投げてくれた。意味を理解した百合子は、ベッドを降り、それを腰に巻きつけて、恐る恐る吉田の傍へ行った。百合子は、ほっとした。そんなことに気がついてくれる吉田がますます好きになっていく自分を感じた。

ドライヤーを止めた吉田は、百合子が注ぎ足してくれた残りのペリエを一気に飲んだ。

百合ちゃん、お願いがあるんだけど」

飲み終わって、吉田が百合子に言った。

はい、なんでしょうか」

「いやならいいんだけど。背中を踏んで欲しいんだ」

えっ・・・、背中を・・・踏む？」

そうだ。わたしがうつぶせになるから、その上に乗って踏んで欲しい」

なんですか、それって」

つまり、背中が凝っているんで、揉んでほしいんだが、揉むより上に乗って、膝で圧して欲しい。サウナでマッサージのおばさんによくやってもらうんだ」

そんなこと、やったことがないけど、わたしにできるかしら」

大丈夫だよ。簡単だ」

と、言って吉田はベッドにうつぶせになった。手は頭の上に投げ出している。

吉田の言うとおりにするには、腰に巻いた

タオルを取らなければならない。そんな格好で、吉田の上に乗るなんてできないわ。下着が丸見えじゃないの。でも、吉田さんはうつぶせだし、見えないか。それに、そうすることによって、吉田さんが楽になるなら、やってやろうか。百合子は、吉田の説明を上空で聞きながら、そんなことを思っていた。

わかった？」

はい、わかりました」

百合子は、吉田に言われたとおりに、タオルを取って、吉田の背中に注意深く乗って、正座した。吉田の肩のあたりに両膝をあて、膝立ちする感じで、一步一步、左右互い違いに下がって、踏んでいく。腰のあたりまで下がって、また、上り返す。これを繰り返した。

百合子は、吉田の身体がとても固いのになにに驚いた。それは、背中が凝っているという固さではなく、男の身体がこんなに固い仕組みになっていることへの驚きであった。肌も、自分や母親のようにぽってりしていなくて、固く厚い肉の下が、すぐ骨の構造体になっているような感覚であった。これまで、百合子には父親や兄はいないし、こんなに親しく身体を触れ合う男もいなかったもので、いま初めて正気のままで男に触ったことになる。その驚きであった。吉田は、気持ちよさそうに、百合子の膝が背中を圧すたびに、うん、うん、と言っている。

百合子は、落ちないように気を使って、吉田の背中の上を膝歩きしているので、少し疲れてきた。ちょうどそのとき、吉田が予告もせずに寝返りをうった。

きゃっ」

百合子は重心を失って吉田の上から、その横へ転げ落ちた。上手い具合に、吉田の腕の中に収まった。

どうも、ありがと」

すかさず吉田が百合子の唇を軽く吸った。転げ落ちて、吉田の腕に収まって、そして接吻と、まったくリズムミカルにとんとんとと、

ことが進められ、百合子はただただ、流れに身を任せるしかほかなかった。甘えた文句を言おうにも、口を吉田の口でふさがれると、全身がふわっとなくなってしまっ、どうにもできない。

舌で愛撫され、胸を擦られていると、身体がじわっと変化するのがわかる。他の女の人もそうなのかしら。わたしの身体だけが、いけない反応をしているのではないかしら。身体は敏感に反応するのに、できないなんて・・・、いろいろと頭には浮かぶが、吉田の動きの変化に伴い、考えは統一を欠いたものになる。意識が薄ぼんやりになったり、つながったりして、身体がじんじんと間歇的に痺れていく。

吉田が、誉め言葉を耳元でかけてくれる。嬉しい。ありがとう、が言葉にならなくて、頷くだけが精一杯であった。吉田の手が、また、脚を開く催促をしている。やはり、それは恥ずかしい。また、たくさん濡れてしまっている。吉田の手が、静かに脚を押してくる。百合子は、抗うことができなかった。こんなになったのも、わたしのせいじゃないのよ。あなたがそんなにするからだわ。百合子は、そんなに開かなくてもいいんだよ、と昨夜、吉田が言ったことを思い出して、少し膝を開じかけた。あつ、そこにはすでに吉田の大きい手が挟まっていて、それ以上、膝を狭めることはできなかった。

吉田が耳元でまた何かを囁いた。恥ずかしいようなことをいわれたような気がしたが、はつきりとはわからなかった。腰の痺れが、脚の方に広がっていった。吉田の手の動きが心地よかった。わたしだけでいいのかしら。吉田さんはどうなのかしら。百合子は、初めて吉田のことを氣遣った。

吉田が、自分のものを百合子に握らせた。百合子も「サハーサル」は終えているので、驚くことはなかったが、いよいよことが始まるのだ、と思った。吉田は、これが君の中に

入るんだよ、イメージしてご覧、と囁いた。動かしてもいいんだよ、とも付け加えた。

百合子は、今日は、どうしてもひとつにたがった。どんなことも我慢しようと思つた。吉田が、必ず上手くいくからね、力を入れないでね、といっているのが臆けながらに聞こえる。百合子は、一生懸命頷いた。吉田と一緒に、吉田のものを自分へ向けた。吉田のものが百合子の周りを、優しく練り歩いているようだ。ああ、ここまではとても気持ちがいい。ずっとそうしていたかった。

吉田が、優しく合図をして、押してきた。あつ、やっぱり痛い。吉田が一時引き、また押す。百合子は、知らないうちに、吉田の胸を両手で押し上げている。あ、ごめんなさい、そういつて突いた腕は緩めるものの、吉田に圧されると、どうしても突いてしまう。

力を抜いて・・・ね、そう・・・そして、息を吸ってごらん・・・はい、吐いて、そう、もう一度、はい、吐いて」

そのとき、一瞬、鋭い痛みが腰を走って、吉田の腕を力の限り掴んだ。何かが壊れたような音が聞こえたような気がした。痛い。吉田さん、動かないで。

大ったよ。もう少し入れるから」

う、はい」

そういつて吉田は、さらに押し入ってきた。何がどこまで入っているかわからないけど、痛の中に窮屈な感じがおなか一杯に広がった。ややあつて、吉田がゆつくりと動き出した。百合子は痛い中にも別な感じがにじみ出てくるような気がした。吉田の動きに連れて、自分の身体も大きく揺れているのがわかる。えつ、こんなに動くものなの？ 百合子は、男と女がひとつになることは知っていたが、こんなに揺り動かされるものとは知らなかった。百合子は、自分の身体が自分のものでなくなり、吉田に完全に占拠されてしまった気がした。

たく新しい世界であった。

人の思いを、こういう形で受け入れ、悦楽の宇宙の中で全身がこれに無意識に反応していく。終わった後での肉体の完全なる充足感、相手への信頼感、そして精神的な満足感。百合子はいまそういう男と女のかかわりの入り口に立った。自分が尊敬する女流作家や、女流芸術家、女性の先輩、そして慕ってくれている女性の後輩たち、あるいは世の中の大部分の女性たち。彼女たちにも、このような極めて私的な背景があったのだな、と百合子は改めて思った。

百合子は、片脚を吉田に絡ませ、火照る自分を吉田の太腿に押し付けるようにして、やがて眠りに落ちた。吉田は、自分の腕に頭を持たれ掛け、微かな寝息を立てている百合子の唇を指でなぞった。

ユングフラウヨッホ

翌日、ふたりは、ミューレンからシルトホルンへ行った。氷河が造ったU字谷の底に二人が宿泊している宿がある。シルトホルンは標高二九七一メートルで、アイガー、メンヒ、およびユングフラウとこのU字谷を隔てて反対側にある。シルトホルンはその三山に比べれば高さはないものの、周囲にそれほど高い山はないので、三百六十度の展望に優れる。

ラウターブルンネンから、急勾配の登山鉄道とケーブルカーを乗り継ぐと、U字谷の上の淵に出る。そこがミューレンという集落である。住宅も密集しておらず、あそこにひとつ、こちらにひとつ、といった具合で、村人の人影も少ない。観光客もそんなにいるわけではなし、とくに東洋人は皆無といつてよい。

住宅は大きな二階建てか三階建ての木造で、ログハウス風である。申し合わせたように、どの窓にも一様に白いレースのカーテン

が取り付けられ、これまた一様に、どの窓辺にも小さな植木鉢がいくつも括り付けられ、深紅の花が白いレースのカーテンの色と相俟って爽やかな印象を与える。

U字谷を隔てているとはいえ、まん前には、白く冠雪したアイガー、メンヒ、およびユングフラウの三巨峰が聳え立ち、背後の紺碧の空とのコントラストで、息を呑まなばかりの素晴らしさである。

ふたりは、清冽な大気を胸一杯に吸って、三巨峰を見ながらゆっくり、シルトホルンへ向かうケーブルカーの駅へ向かった。百合子は、話をして吉田と目が合うのが恥ずかしかった。男と女とはいえ、あられないほど開脚し、痛い痛くないのと甘えた自分を思うと、明るいところでは消え入りたいほどであった。できれば、吉田がそんなことを思い出していないことを願った。

百合子は、吉田から離れて歩くのは、何かふたりのところが離れているようで、心もとなかったし、そうかといって腕を組んで歩くのも躊躇われた。結局、昨日のように、吉田の袖を指で挟んで半歩後ろから突いていくような格好をとった。それでも改札口やケーブルカーの中で、ふたりが寄り添っても不自然でないようなところでは、吉田の腕を胸に抱いた。しかし、自分の胸の鼓動が吉田に伝わるのが何となく決まり悪くて、すぐに離してしまったが、それがまた悔やまれた。

それもさることながら、歩いていると、股間になにか挟まっているようで、気がかりであった。そういうことが、吉田に悟られないように、できるだけ知らん顔をして歩いたが、自分としては、昨夜の自分のあられもない姿態や吉田にされたことが、いろいろ思い出されて、吉田の話し掛けにうつろな返事をして、いる自分に気がついてハッとしたりもした。

シルトホルンの頂上からの眺めは、迫力満点であった。目の前の三巨峰は霧に巻かれた

り、その合間から全貌を現したりして、自分がその自然空間の中に置かれたような臨場感があった。説明によれば、かつては007の映画の撮影が、ヘリコプターを使ってここで行われたそうであるが、その景色は、内容が恋物語にしろ、活劇にしろ、あるいは諜報物にせよ、どのような映画にもよく合うように思えた。

頂上の大食堂に入った。一時間で一周するその大食堂は、ちょうど食事の所要時間に合わせたのであろう。入り口には、欧米には珍しく、献立が写真入で掲げてある。しかも各献立には番号が付けられているので、注文時には番号だけを言えばいいのが、非常に便利だ。食堂内には、ドイツ語と英語が併記された献立表があったが、もちろんそれは無用であつた。

百合子はその便利さを吉田に話したら、番号といえば、ソウルの地下鉄も駅名にはハングル語の表記に加え、番号も付けられているのでハングルが読めなくても不自由はしないと話してくれた。

いつもの百合子と違って、吉田を見つめて話すことをしない。吉田はそれに気がついたが、百合子の気持ちを慮って、その理由を尋ねなかった。吉田の世代では、目上の人と話すときに、相手の目を直接見て話すのは礼を欠くと嫌われた。相手の口元とか、喉のあたりを見て話すことが上長への礼儀であつた。

ところが、百合子のみならずその世代の若年層は、直接、相手の目を見て話す。多分、学校でもそういう教育をしているのであろう。皆、一様に、平気で年配者の目を見て話す。実は、吉田はこの方法に慣れている。外国人相手の仕事が長い吉田は、外国人の場合は相手の目を見て話す「アイ・コンタクト」が、普通の方法であり、相手への事業説明なり、商談でもこれが極めて当たり前のことである。ところが日本人の中には、かなり高い職位の人でも、横の植木を見て話していたり、目を

つぶつて話し、外国人を戸惑わせることがよくある。国際化が進んだ中で、日本の美德が世界的には非常識とみられてしまう一例である。

なにはともあれ、今日の百合子は、吉田と視線を合わせることを無意識の内に避けている。吉田はそこに日本女性独特の恥じらいを見た。百合子は、年齢は吉田よりずっと若い、性格や作法的所作は吉田に近いものがあった。俊恵の教育のせいかもしれない、と吉田は思った。

下界からは雲に見えるであろう霧が、下から吹き上げるように大食堂の窓硝子をおおつた。百合子は、横に飛ぶような霧に見え隠れするメンヒやユングフラウを眺めていたが、吉田のほうを向いて、

あの・・・、わたしたち、このあとどうなるんでしょうか」

と言った。そう言つたあとで、わたしたち」と言う言葉に多少のときめきを覚えた。

どうって・・・、君はどうしたいの。わたしは、当初、君に頼まれた大役を何とか果たせたと思つて、ほつとしていたところだ。これからはどうなるんだろうな。・・・君の好きにしたらいと思う」

「・・・そういう言い方って、・・・淋しい。・・・嫌です。それは・・・もともと、わたしがお願ひしたことだし、それが終わったら、確かに吉田さんのお役は済んだかも知れないわ。吉田さんもお解りなつていらっしゃると思いますが・・・」

ああ、ごめん、そういうつもりで好きにしろ、と言つたんじゃないくて、君も今回のことをひとつの糧として、いまの仕事の面でもいろいろと発展が期待できると思う。また個人的にも、新たな職業への挑戦とか、より飛躍するためにいろいろなことが考えられる。そんな風に自分を育てていく上で最善の方法で邁進して欲しい、と言うことだ。もちろん、わたしはいままでどおり、君の良きサポータ

ーでいたい」

吉田は、そこまでは理屈の話をした。その次に自分の心情を吐露しようかと考えたが、百合子の負担になりそうだったので、それは飲み込んだ。私は、百合子に与えるだけでいいんだ。わたしの愛のすべてを捧げる。わたしはその代償を一切期待しない。

百合子は、吉田の言葉を聞いて少し安心した。しかし、百合子は、巷間よくあるように、いちど闇をともしたら、後は関心を寄せられないとかいった類の低次元での不安ではなく、自分をあんなに優しく導いてくれた吉田が、いまは家庭教師のような四角い話しかないことに軽い苛立ちを感じた。それはそれで、大変嬉しいのだが、吉田と他人ではなく、なつたいまは、もうひと言が欲しかった。

大食堂がそろそろ一周を終わろうとするころ、ふたりは帰途についた。天候が崩れ、陽は陰り、少し風が出て肌寒くなってきた。山の気候は変わりやすい。二人組みの観光客は、老いも若きも寄り添っている。吉田が腕を差し出したのを機に、百合子はそれにすがって胸に抱いた。

黙っているときに、ふたりがいちばん分かり合えるような気がした。話せば、言葉は話した人の話したいことを正確に、そして充分に伝えられない。百合子は、いつか吉田が、人間は自分の気持ちを上手く話せないし、聞いた人は、話した人の言葉の十五パーセントくらいしか理解できない、と言ったことを思い出した。相手と話すと言うことは、十五パーセントを接点に、お互いがどんどん離れていってしまうような気もする。こうして吉田の腕を抱きながら歩いていることで、百合子は大きな安堵を覚えた。

翌朝、百合子と吉田はラウターブルンネンの村をあとにした。アルプスの少女ハイジ」

が出てきそうな、牧歌的な小さな村・ラウターブルンネン、シャーリーがとても気を配ってくれた清潔な感じの民宿風の小さなホテル、食後に見上げた、夕陽に染まったメンヒほかアルプスの巨峰、そして、登山列車で上ったユングフラウヨッホの山頂駅からの三巨峰、さらには、U字谷の反対側にあるシルトホルン。このような大自然そのままの地域は、スイス・ベルン州の高地と言う意味でベルナー・オーバーラントと呼ばれているが、百合子はここを大いに気に入ってしまった。ここを選んでくれた吉田に大いに感謝した。

そんな素晴らしい自然環境の中にある、世界からの隠れ家のような可愛いホテルで、百合子は二晩にわたって吉田の丁寧な手ほどきにより、自分の処女を葬った。葬ったと言うには主体性がなかった嫌いはあるが、鄭重に葬ることができたと、満ち足りた気持ちで一杯であった。百合子にとっては、女の最初の節目であった。

吉田はチューリッヒで列車を降り、空路、成田へ向かった。百合子は久しぶりにひとりになり、そのまま国際特急列車でウィーンへ向かった。そこで、高校時代の友人、めぐみのコンサートへ行ったり、モーツァルトやベートーヴェンの墓、シュールブルン宮殿などを見物して翌々日、東京への便に乗り込んだ。

台風一過

ちょうど一週間ぶりの東京であったが、百合子はかなり長い間、外国にいたような気がした。バック旅行で行く一週間の海外旅行は、毎日がほとんど同じようなのに、今回は同じ一週間でも、ずいぶん多くのことがあったような気がしている。

ラウターブルンネンという、物語に出てくるような、小さな可愛い村で、百合子の感情

は歓喜で極みにまで達したし、その反動で、東京に帰ったらまたひとりに戻ってしまうのかも知れないという不安にも、シルトホルンの山頂の大食堂で襲われた。しかし、その村周辺での吉田との圧縮された数日間、百合子の人生観を大きく変質させるに充分であった。吉田がそれまでの吉田ではなく、男として百合子の心の中に大きな楔を打ち込んでしまったように、百合子には思える。

しかし百合子は、帰国後、初めての出勤から帰宅への道を歩いている時、いままで靄が掛かっていたような精神的な不明朗さが、台風一過のように一掃されているのに気がついた。それまで、別に悩み事があったわけではなかったが、常時頭のどこかにへばりついていた何かが剥がれ落ちたような感覚がある。爽快であった。

いまごろ、吉田は何をしているのだろうか。携帯電話で吉田の電話番号を表示させはしたものの、何となく気恥ずかしくて、通話のボタンをクリックできずにいた。ラウターブルンネンで吉田とひとつのベッドにいたことが走馬灯のように思い起こされ、耳朵が火照った。吉田の電話番号は表示されたままであったが、まだクリックできずにいる。あのポストまで行ったら押そう、あのコンビニまで行ったら押そう、と思いながら、なかなか押せなかった。

結城先生の次号掲載の原稿に、スイスから帰って初めて目を通した。スイスへ行く前は、結城の原稿は、百合子にとっては耳年増の栄養素のひとつであった。少なくとも、そこに表現されている関事に関しては、誰がどうすると言ったような具体的なことは、百合子にとっては未知の分野であり、それなりに興味はあった。軽い驚きがあったり、解らないことも若干あった。しかし、そのころの百合子はそれなりに興味がある内容であったので、多分、百合子のような読者には相応に人気がある

のであるろう、と編集者として思っていた。

こうして、スイスから帰国後に読む結城の小説は、筋書きの進展もさることながら、ことの進展に関わる男女それぞれのころの推移をもっと知りたい、そこが書き足りない、百合子にはそんな風に思えてきた。結城がこの小説にどういう姿勢で向かっているかは聞いたことがないが、少なくとも編集側としては、楽しいラブ・ロマンスが現代風の乗りの中で表現されていれば良しとしているわけで、そこに純文学の香りを求めているわけではなかった。ただ、百合子はそういう点にまで目が届くようになった。

スイスから帰って、百合子は吉田を想い出さない日は一日たりともなかったが、ついぞ、「通話」のボタンをクリックすることがないまま、二週間以上も過ぎてしまった。役目を終えた吉田は、帰国と同時にあの日以前の吉田に戻ってしまったのだろうか。吉田に何も求めはしないが、電話ぐらいしてくれてもいいのではないか、と思うのはわたしのわがままなのだろうか。

百合子は、胸に微かな張りを感じていた。少し固くなつてわずかな痛みがある。生理の始まりの兆候であった。いつもより少し早めであったが、それは吉田と接触したからかなあ、とも思った。いつもはまたか、と思うのであったが、今回はそんな気持ちには微塵もなく、吉田への思いに、より一層の拍車が掛かった感じである。百合子は、化粧室へ入ってひとりになると両胸を抱いて膝を固く閉じた。いてもたってもいられなくなった百合子は、吉田に電子メールを送った。スイスから帰って、すぐお札の手紙をしたためた。このメールは帰国後の第二便である。

その後、如何お過ごしですか。不寐で恐縮ですが、お時間ができるようでしたら、お食事にお誘いいただければとても嬉しいです」このメールの文章を打ち上げるのにも、どいう表現がいいかいろいろと逡巡したが、

発信ボタンを押すのにも、また思い迷った。どうしよう。吉田から誘いがあるまで待つべきか。でも、それはいつかわからない。いま、会いたい。すぐ会いたい。メールを見た吉田は、きつと二つ返事で了解してくれるに違いない。しかし、そんなことを当然のように思う自分が不遜ではないか。床を一つにしたくらいで、そんな、すぐに会いたいなんて言うわがママを、誰が言っているのか。百合子のころは千々に乱れた。吉田が、東京にいるかどうか解らなかった。

東中野

吉田へのメールを打ったあと、百合子は新年号の特集の企画書作成に取り掛かった。吉田へメールは打ったが、今日読んでもらえるわけではなし、ましてや今夜会うことになるとは夢にも思っていなかった。

そんな時、百合子の携帯電話に着信の振動があった。文字盤がその電話が吉田からのものであることを知らせている。百合子の動悸は一気に高まった。周囲の同僚は、どっち道、業務電話と思っているのに、百合子にしてみれば吉田からの電話であることが、皆に知られてしまったかのように大いに慌てた。電話を持って立上がり、廊下へ出る時に自分の椅子をいやというほど蹴飛ばしてしまい、大きな音を立てた。周囲の編集者が訝しげな顔をして百合子を見送った。

あ、百合ちゃん、ご無沙汰。メールありがとう」

「ちらこそ、ご無沙汰しております。いま、会社ですか？」

「や、札幌。千歳空港だ」

あれ？ では、メールはどこでご覧になったんですか？」

あ、それは、携帯でも同時に受信できるの」
そうですか」

「しばらく連絡がないから、嫌われたかと思つて」

「さんでもないです。嫌いになるなんて」
それはどうも。ところで、今夜はどう？ 今から乗るから、そうだな、羽田には六時くらいには着けるけど。今夜は、わたしはその後とくに用事はないので」

え、今夜ですか！」

急すぎるかな？」

そんなことないです。嬉しいです。どこにしましようか」

銀座と言うわけにはいかないね」

吉田は、俊恵の店を意識していった。いか
ないわよ、何考えてらっしゃるのかしら、もう！ と百合子は思った。

新宿は如何ですか」

新宿か、そうね、もう事務所へも寄らなくていいから、そうしようか。それまでに何を食べたいか、考えておいてね」

百合子は、吉田と落ち合う時間を決めて電話を切った。今日会うなら、それなりの勝負服」で来たかったが、そんなことより、急ではあったが、会いたい気持ちが満たされて嬉しかった。腕組みをする格好で、両乳房をそっと掴んだ。

百合子は、吉田とはチューリッヒで別れてから、ずっと会っていなかった。誰が決めたわけでもなかったが、会いそびれていた。普通の女と男であったなら、帰国するやいなや、毎日でも会うであろう。実際のところ、百合子も吉田がフィアンセであったなら、仕事の方は何とかやり繰りして逢瀬の時間を見つけたであろう。居ても立ってもいられなかったのである。吉田のことを片時も忘れたことはなかったし、電車の中や通りを歩いている時、吉田の使っている整髪料の香りが鼻を掠めると、胸が俄かにときめいたりもしたものだ。吉田の存在は、百合子の中でそれほど大

きくなっていた。

スイスへ行くまでの気持ちや身体の中のモヤモヤしたものは、帰国と同時に霧が晴れたようになくなり、仕事にも以前にまして意欲が増強したが、その代わりに、今度は吉田への思いが百合子のころの多くの部分を占めるようになった。

和食がいいという百合子の要望にしたがつて、吉田は歌舞伎町にある比較的新しい割烹料理の店に入った。気の置けない板前のいる店もあったが、それでは百合子が話しくかろうと思って、この店を選んだ。この店の造作は、一組の客がそれぞれ独立した空間を確保できる点にある。引き戸などで仕切った個室ではなく、ちよつとした衝立などの配置で、他人の目を避けられ、落ち着いた話ができる。和食ということで、吉田は清酒を選んだが、百合子は知り合ったところから水割りしか飲まなかった。結構いける口なので、おいおい清酒の味も教えてやろうと思ったが、何事も無理強い禁物だ。小卓を挟んで正面向き合いでは、向こうとこっちという感じは免れないし、二人並ぶのも園児のようでいけない。吉田は、九十度の角度で百合子の席を作った。何か、久しぶりという感じがするね。会いたかったよ。元気だった？

はい、わたしもお会いしたかったです」百合子は、ほんとうに久しぶりに吉田の瞳を見た。スイスの吉田の優しさが急に思い出されて、百合子は目を伏せてしまった。胸が高鳴ってきた。吉田に酌をしようと差し出した手が震えそうである。それを気付かれるのが、恥ずかしかった。

どうしたの？」

「え、べつに・・・」

「べつに、どうしたの」

「だって・・・、はい、どうぞ！」

百合子は、吉田に酒を勧めた。

「うういう時って、どういうこあいさつをす

ればいいのかしら」

あいさつって？」

だって、大変お世話になったでしょ、スイスで。だから・・・」

「いいよ、別に、そんなの。あれでよかったのかな？」

知りません！」

百合子は、吉田がスイスでの夜のことを思い出しながら話しているかと思うと、顔から火が出るほど恥ずかしかった。こういうことは、明るいついでで切り出す話題ではないな、と思った。しかし、自分としては大いに満足した旅であったので、何とか自分の感謝の気持ちを吉田に伝えたかった。

吉田は、百合子を冷やかすつもりは毛頭なかった。ただ、百合子が今後、吉田とどのような関わりを持っていきたいかということが気がかりではあった。吉田は、スイスの二晩で、百合子が自分の腕の中で安らかな寝息を立てているのを見ていて、自分自身が大きな安堵感の中にいるのを感じた。女性に、身もこころも百パーセント信頼されて、自分自身も悦楽のピークを超えたあと、あのように女性と同化した生暖かい静寂の中に棲息しているかのような感覚は、ずいぶん久しぶりであった。いや、初めてであったかも知れない。若いときのセックスは、男にとっても女にとっても、欲望というエネルギーを爆発させるスポーツのようなものである。その悦楽は、全力疾走の後の悦楽に似て、肉体的悦楽が大部分を占める。吉田が百合子を抱いて感じたような感覚は、吉田が相応に人生経験を重ねてきたからかも知れなかった。

いずれにせよ、吉田には、それが、人間の原点であるように思えた。理屈抜きに寄り添って、交接して頂点を極め、お互いの呼吸を吸気とするような悦楽（はらく）のまどろみの中に漂う。百合子にとつては夢中な二晩で、そんなことを考える余裕はまったくなかったであろうが、吉田はそれを充分噛み締めるこ

とができるひと時であった。人間には、食欲、性欲、睡眠欲があるが、吉田はそれまで、自分の性欲を大切にしていなかったのではないかと、そのとき思った。自分の欲望を率直に吐露できるとすれば、吉田は百合子との関係をそのままずっと続けていきたかった。

しかし、百合子は自分の子供ほど若く、自分のこれからの人生を持っている。吉田がそれに倅差すことは相成らなかった。吉田が、自分のこのころの内を口に出したり、態度に表したりすれば、百合子は戸惑うに違いない。それは、大人として避けたかった。百合子の成長を側面から援助できればそれでいいじゃないか、吉田はそう思った。吉田は、百合子に与えることだけで満足しようと思った。

百合子は、自分の初めての相手が吉田であることを、大変ありがたいことだと思った。他の男性には真似ができないだろうと思われた。同世代の、例えば山縣にもあのような優しさはないだろうと思った。自分がこれから、どのような男性に巡り会い、どのような夫婦生活を送ろうと、その出発点がこんなに素晴らしいかったことを、生涯忘れることはできないと思った。

実は百合子は、初めての夜があんなに艶かしく濃厚なものになろうとは、夢にも思っていなかった。吉田の優しさには期待していたが、行為はもっと簡素化していて、こちらもそんなに動かされるとは思っていなかった。この誤算に、百合子はどう対応してよいか、自分でも御しきれないでいる。

スイスの想い出や、百合子の携わっている特集の企画のことなどを話しているうちに、時間はあつという間に過ぎてしまった。

吉田は出張帰りで、しかも少し酒が入ってしまったので、タクシーで帰ることにした。吉田のマンションは東中野なので、そこを經

由して百合子のマンションの西落合までそう遠くはない。百合子が先に乗って、吉田がそれに続いた。吉田が乗り込む時に、百合子の手を差し伸べた。吉田の手が百合子の手を包んだ。割烹料理店では、二人は手も触れていなかった。タクシーに乗って、スイス以来はじめて手を握り合った。百合子の胸は再び高鳴った。いままで何を話してきたのだろう。もっと、たくさん話したいことがあったのに、特集の企画なんか、どうでも良かったのに、わたしは何てつまらないことを話題にしてしまったのだろう。吉田の手が暖かかった。握っているその一点から、吉田の精気が流れ込んでくるようで、百合子は身震いをしそうであった。自分がじわっと濡れていくのが解った。

吉田のマンションの近くの信号のところで、吉田は、百合子に車代を握らせ、じゃあ、おやすみ、といってタクシーを降りた。百合子にとっては、えっ？ というほど、簡単に吉田はタクシーを降りてしまった。別に何をしてくれというわけではないが、そんな、ティッシュペーパーを捨てるように簡単に降りないで！、百合子は切なかった。

吉田は、振り切るようにタクシーを降りた。妙な思わせぶりな、百合子を混乱させる。いまままでおりでいいのだ。吉田は辛かった。路地を曲がって、もう少しで自分のマンションの入り口という時に、携帯電話が鳴った。今ごろ誰だろう。表示板に百合子の名が出ている。あれっ、タクシーに忘れ物でもしたかな？ と吉田は思った。

もしもし、百合ちゃん、どうしたの？」「あのお、わたし、タクシー降りちゃいました」

えっ？ なんだって。タクシー降りたって？ そして、どこにいるの？ どうして？」そんなにぼんぼん言わないでください。ご迷惑じゃなかったら、もう少し「緒にいたかって・・・」

あ、ごめんよ。で、いまだこなの？」

あの、吉田さんが降りたところの次の信号のところで降りました」

「ま、そこへ行くから。動かないで。コンビニがあるでしょ。その中にいて」

はい。ごめんなさい」

吉田は走った。早くいってやりたかった。

吉田の姿を見つけて、百合子がコンビニから出てきた。

「ごめんなさい。お疲れでしょうが、わたし・・・、もう少し一緒にいたくって・・・」
そうだったの。この辺は、何にもないので、部屋へ来るかい？ 散らかっていて驚くだろうけど」

吉田は、鍵を取り出し錠を開けた。百合子を先に入れ、百合子に背を向けて錠を掛けて居間へ行こうと振り向くと、そこに立ちふさがるようにいた百合子が、吉田の胸にしがみついていた。ひゅっと息を吸い込むようにした百合子が、目を閉じて上を向き、唇をさ迷わせた。吉田はそれに自分の唇を重ねた。最初、軽く触れた程度の口付けであったが、軽く一呼吸のあと、二人は貪りあうようにお互いの唇を吸い、濃厚に舌を絡めあった。百合子は、膝が崩れ、その場に座りそうになるのを、吉田がかるうじて支えた。

向こうへ行こう」

吉田に促されて、百合子はダイニングキッチンへ入った。吉田がいうほど散らかってはいなかった。白い壁に白木の食卓があり、窓には紺のカーテンが掛かっていた。百合子は、吉田にスイスの件を依頼した深海のようなバーを思い出した。サイドボードの上には、何枚かの写真が、それぞれフレームに入れられて飾ってあった。外国人との集合写真が二枚、国際的な銘柄の旗の前で年配の外国人と写っているのが一枚、男の子と女の子の幼児の写真が、それぞれ一枚ずつであった。

「これは？」

幼児の写真について百合子は吉田に尋ねた。

ああ、女の子は娘の小さいころ、男の子はその息子、つまりわたしの孫ということだ」

えっ、お孫さんがいらつしやったんですか」

吉田は、歳の割には若く見えるので、孫がいるとは誰も思わないだろう。百合子にも少し意外であった。このくらいの子が男の子がいるということは、娘さんはわたしと同じ年齢かも知れない。しかし、それを聞くのは控えるべきだと思って、聞かなかった。

何か飲むかい？」

あ、わたしはもう結構です」

じゃ、紅茶でも淹れるか」

あ、わたしがします」

百合子は、立ち上がり、吉田に替わった。

百合子が手を洗っている間に、吉田は百合子に茶器や茶葉のありかを教えると、上着を脱ぎ、ネクタイを外し、洗面所へ行った。

吉田が、洗面所から出てきてソファに腰をおろした。

驚いたよ。でも、わたしも君がそうしてくれたことが嬉しい」

ほんとですか？ほんとに？わたし、たまになくなっちゃって、タクシーが信号で止まったところで、ここでもいいですって降りちやっただんです。それからお電話したものかどうか考えて。だって、出張からお帰りになって疲れていらつしやるかと思って、時間も遅いし」

全然疲れていないよ。君と会っているといつも元気になれる。こうしてきてくれて、かえって嬉しい」

吉田が、百合子の肩に手を掛けるのと、百合子が吉田の胸に崩れるのと、ほとんど同時であった。吉田は百合子の背中を優しく撫でてやった。百合子の胸の鼓動が、乳房を通して吉田の胸板に伝わってくる。吉田の手の動

きに連れて、百合子がときどきぶるぶるっと震え、深く息を吸っては吐いた。

吉田が手を貸すと、百合子は吉田の膝の上でゆるゆると上向きになって、吉田の左腕を枕に乳児が抱きかかえられたように収まった。吉田の右手が、百合子の胸を優しく掴んだ。

「うっ」と、と声を詰まらせた百合子は、また大きく息を吐いた。詰めていた膝頭が、緊張を失って離れていく。百合子の身体はすでに百合子の制御から外れてきていた。

百合子の、普段は理知的に見える唇が、半開きの淫らな様相になって吉田を探するようにさ迷っている。吉田は、意地悪く、自分の舌で百合子の上唇をちよんちよんと突付いた。求めるものに行き着いた百合子の唇は、少し突付かれただけで離れてしまった吉田の唇を追った。吉田は今度は百合子の下唇にずっと自分の舌を這わせた。

百合子は、肩で息を吸うように詰めると、自分の唇を舌先で舐め、吉田の口を懸命に求めた。百合子の膝が割れ、スカートがずり上がり、みずみずしく張りを持った太腿が付け根辺りまで、露わになった。吉田は、息を呑んだ。女性が自分を飾り立て、隠すべきものを隠すつもりでいるものが、本人の意思に関わりなくその役割を果たさなくなった、その意外性と百合子の太腿の色香に吉田は俄かに疼いた。

吉田は、百合子の唇に自分の唇を被せた。百合子の唇が柔らかく熱かった。百合子は吉田にしがみつこうようにして、吉田の口を貪った。舌を絡め合い、歯がぶつかり合った。吉田が胸のつまみを揉んだりすると、うーん、と両足を突っ張ったりした。

途中、息苦しくなった百合子は吉田の唇を離して肩で息をすると、また、唇で吉田の唇を追った。百合子は、吉田の手を腿できつく挟んだり、膝を大きく開脚したりした。吉田は小動物を抱いているような気がした。普段の知的な百合子の面影は微塵もなく、性的衝

動に突き動かされている一匹の小動物がいるが如くであった。吉田自身も牡と牝とが番うが如く、極めて原始的に激しく振舞う女性を抱くのは、多分初めてかもしれないかった。吉田は、そんな百合子を永遠に離したくなかった。

ひとしきり抱擁したあと、二人はソファに座りなおした。百合子は、髪を直したり、ブラウスやスカートを整えなおした。惚（ほお）けたようにとろんとした目で吉田を見た。吉田が微笑み返した。百合子は、えへへ、と照れて、また吉田にもたれかかった。心地よかった。このままずっとそうしていたかった。百合子は、自分がかかなり濡れているのに気がついた。白いスカートまで汚れてしまうかも知れない。

あの、ちょっといいですか？」

「うん？」

百合子は化粧室へ立った。

百合子が居間へ戻ると、吉田はそこにはいなかった。続きの部屋からヴィヴァルディが聞こえている。そつと覗くと、そこは寝室で、吉田は自分の背広を衣紋掛けに掛けているところであった。

君も脱いだらいい」

はい」

百合子は、どうしたものかと思った。

吉田が近づいて、百合子のブラウスの釦を外しにかかる。百合子はされるがままにしていた。スカートを脱がされ、ストッキングを剥がされ、下着をずり下げられてしまった。まるで幼稚園の幼児のようだと思った。下着の濡れたあとが吉田の目にもとまったであろうけれど、それほど恥ずかしいとも思わなかった。吉田の肩に手を掛け、下着を片脚ずつ外した。最後にブラジャーを外された時、百合子の乳房がぷるんと揺れるようにはじけ出た。両方の乳首が固くとがっていて、これはさすがに恥ずかしく、下唇をかみながら両手

で覆った。その手を吉田が軽く払い、片方の乳首を口に含んだ。

あっ」

百合子は、びくと震えた。自分が熱く濡れて溢れるのが解った。

吉田に押しやられるようにベッドに横になった。乳首に舞う吉田の舌で歓喜の糸をはじかれるように、百合子は陶酔の境地へとさ迷い始めた。吉田の頭を両手で抱えて自分の胸に強くこすりつけるようにした。

これとっていいですか」

百合子は吉田の下着を脱がせた。こんなことをして、はしたなくはないだろうかとも思ったが、手が自然に動いた。あつ、百合子は手を止めた。吉田のペニスが脈動していた。

握ってご覧」

いいですか」

うん、どうぞ、というのなんだけど。そう、少し動かし、うん、気持ちいい」

「うすると気持ちいいんですか」

百合子が男のそれを触るのは、生まれて初めてであった。

ああ、とつても。もったきつく握って、うん、そう」

痛くないですか、こんなにきつく握って」

大丈夫だ。もっと速く動かしてみて」

はい。こうですか。気持ちいいですか」

吉田は、百合子の手をなせるままにして、百合子の胸を柔らかく揉みほぐした。百合子の唇をついばむようにしながら、やがて深く唇を合わせ、中に入ってしまった。百合子の手がなおざりになって、動きが止まった。肩で大きく息をしている。

百合子の入り口は、しとどに濡れていた。

それからどのくらい経っただろうか。

百合子は、胎児のように丸くなり、当て紙を股に挟んだまま、吉田の腕の中で健やかな寝息を立てている。閨事 ねやごと) 中は、充分調教された動物のように、吉田の手の手

よっとした押しで、脚を開いたり、尻を高めたり、態を入れ替えたりと、まるで閨事に習熟した中年女のような仕草をした。吉田は、そうしたことが少しも感に触れず、むしろ自分がさせたいことを先んじていく百合子に好感を持った。こういうのが巷間よくいわれることとの身体が合うということなのかも知れないと思った。

声が高くならないように殺しているのが、吉田をととても刺激した。歓喜にともなう顔にできる皺や頤の反りも、吉田を一層欲情させた。吉田の律動があわただしくなり、吉田が弾け散り、百合子も頂点を極めるであろう頃合いに、吉田は百合子の首を軽く締め上げた。その後、百合子は四肢を投げ捨てたように正体がなくなり、吉田は百合子の鼻に耳を近づけ、呼吸を確かめたほどであった。

そのあと、しばらく吉田を啜えたままの百合子の身体は、意識不明の百合子に替わって吉田に快楽を送りつづけた。やがてとろっと吐き出された吉田は、自分の始末を見ると、今度は百合子の始末をしてやった。腕や脚を動かしても、ぼてんぼてんと蒟蒻の固まりのようになっている。百合子の入り口は、充血して赤くぼてりしており、そこだけが生きているようにゆっくり動いていた。優しく舐めてやると、百合子はうっと声を上げるが、目覚めるわけでもない。吉田は、そこでひとしきり戯れると、清浄してやり、新しい紙を挟んで脚を閉じさせた。

吉田は、眠りつづける百合子の乳首を、指の腹で優しく掃いた。下から上に、上から下に、そしてそっとつまんで左右に細かく揺すった。

うーん」

百合子がうめいた。まだ目覚めていない。吉田は、百合子の乳首の横を小指の爪でそっと掻き揚げた。三回ほどしたところ、ぶるぶると震えた百合子は自分の手で乳房を覆い、

とろんとした目を開けた。

あ、すみません。寝ちゃったのね。どうしてかしら。ずっと気持ち良くて頭の中がだんだん白くなって、あと、わからなくなっちゃったの」

よく眠っていたよ」

あつ、やだあ、してくれたんですか。ありがとうございます。知らなかった。ねえ、見たでしょ」

百合子は自分の股間に異物を感じて手を伸ばし、それがティッシュペーパーであることがわかり、すこしふくれてそういった。

うん、見たよ。目つぶっていたらできないからね」

ああ、もう、いやらしいんだから」

百合子は、瞳を閉じて吉田の唇をせがんだ。

吉田がそれに応えた。

起きたくないな。このままいたいな。いい気持ち」

百合子は、吉田の乳首を人差し指でのの字を書くように弄っている。

そうだね」

ねえ、吉田さん」

なに？」

わたし、異常かしら」

なにが？」

だって、こんなこと何回もしていないのに、すごく気持ち良くなっちゃうし、する前も熱くなってる濡れたりしちゃうんです。本なんか読むと、最初のころはなかなかそんなにすぐ良くならないって、書いてあるでしょ。だから」

結構なことじゃないか。嫌いな、こういうこと」

うーん、まだ、解らないけど。吉田さんが優しいから、スイスでも余り痛くもなかったし、辛いことや恥ずかしいこともあまりなくできるんだと思います。でも、きょうなんか、昼間から、吉田さんのことを考えると、身体が熱くなってきて、トイレで・・・解るで

しょ？　そして、いやらしい言い方でごめんなさいですけど、きょうは早く吉田さんにして欲しかったの。わたしって異常じゃないかしら。こんなこと誰にもいえないわ。吉田さんにだって、お洋服を着たらもういえないと思うの。こうして裸の時って、わたし、吉田さんに何でも言える気がする。恥ずかしくもないの。わたし、毎日でもして欲しい。ねえ、異常でしょ」

そうねえ、でも、正常ってどんなことかな。百合ちゃん、わたしはね、男と女の関係なんて言うのは、何が正常で何が異常、あるいは何が平均的なんっていうことはいえないと思うよ。それぞれの個別ケースがどうあると、それがそれぞれ真実であることには違いないと思う。こんなことを朝昼晩している二人がいても、二人がよければそれはそれでいい訳で、それが異常か正常かなんていうことは、判断のしようがないじゃない。逆に、月に一回しかなくても二人がそれでよければ、それはそれで二人には正常なことなんだよ」

おーん」

だから、セックスのやり方でも、縛られながらしたり、屋外でするのが刺激的でいいといっけたり、あるいは人に見られながらすると興奮するとか、いろいろなペアがいるわけ。でも、それが社会的に迷惑を及ぼさないなら、それはそれで、あり、なんだと思うよ」

そうなんですか」

うん、そう思うよ」

あ、可愛い・・・」

百合子は、大人しくなった吉田のものを両の掌で挟みながらそう言った。

ああ、そんなことをしたら、また大きくなっちゃうよ」

え？　まだ、大きくなれるんですか。わたし、このくらいが好きだな」

百合子は、半分くらい元気な吉田を両手で転がしながらそう言った。吉田は、好かれていいのか、冷やかされているのか解らなかつ

た。何言ってるんだ、さっきまでは大きくな
ったそれで、散々、悶えて、あらぬことを口
走っていたじゃないか、吉田は、そう思って
自分にエネルギーをぐんと送った。

あ、また、大きくなった。わあすごい。え
いっ」

わっぐ、あ痛た」

百合子は、はしゃいで吉田を握り返した。

吉田は、百合子の額をノックするようにコ
ンと甘打した。

吉田さん？」

なに？」

あの、わたしこういう事していて、何か失
礼なことをしたらいけないと思って。もし、
いけないことをしたら、すぐ叱ってください
ね」

何言ってるんだ。こんなことに失礼も屁っ
たくれもない。本能のおもむくままにすれば
いいのさ。人前でするわけではないんだから。
したいようにすればいいのさ。ご飯食べるの
と一緒だよ。ご飯はひとりで食べる時には行
儀を正さなくて、動物のようにむしゃぶりが
から食べるのがベストなのよ。なぜ、食事の
マナーが必要かというのは、他人に不愉快な
思いをさせない、という配慮なんだね。セッ
クスも同じさ。人に見せるわけじゃないし、
人に迷惑を掛けるわけでもない、だから、二
人で本能のおもむくままに振舞えばいいのさ。
わたしは君がどんなことをしようが、叫ぼう
がいっこうに構わない。かえって君の本能が
覗けて嬉しい」

わたし、叫んでなんかいないもん」

おーん」

なによ。その言い方」

百合子は、吉田の胸毛を抜いた。

痛いっ。痛いよ」

吉田は、突然のことなので飛び上がりそう
だった。

あ、ごめんなさい。そんなに痛いとは思わ
なかったの、痛いのか？」

うん」

ごめんなさい。大丈夫？」

吉田は、百合子の髪を撫でてやった。百合
子はほっとした。

あの、こんなこと、とても恥ずかしいこと
なんですけど、笑わない？」

なに？ 何も聞かないうちは笑うも何も」

じゃ、笑わないって、約束できる？」

できるよ、何でもいってご覧、恥、かかせ
ないから」

ああ、吉田さんでそういうところが優しい
のね。でも、そういう優しさが怖いのよね」
どうして？」

だって、男の人、皆が皆、そんなに優しい
わけではないでしょ。吉田さんに捨てられた
ら、わたしどうしよう」

えっ、捨てる？ 何で、捨てるなんていう
ことが浮かんでくるの」

ねえ、吉田さん、わたしが結婚してからも
会ってくれます？」

百合ちゃん、話が飛ぶね。ところで、何に
笑わなければいいの」

あ、それね、それはね。あのう、なんてい
うか。本当に笑わない？」

笑わないよ」

わたしね、異常と思われてもいいんだけど、
ど、わたし、いつでも吉田さんに抱かれたい
の。異常でしょ。朝昼晩でもいいの。して欲
しいんです。でも、さっきもお話したように、
こうして裸でいると何でもいえるんだけど、
お洋服を着たら、そんなこととっても恥ずか
しくって恥ずかしくって言えないんです。吉
田さんもスーツを着てらっしゃると、とても
立派な方に見えるし。だからきょうも、吉田
さんがタクシーから降りちゃった時、何で言
えないのかって、とても悔やんじやったの」

吉田は、百合子をそっと抱き寄せた。百合
子は、吉田の腕の中でとろけそうであった。
百合子は突如、目の前にある吉田の手首を軽
く噛んだ。徐々に力を加えていった。

あ痛たた・・・」

吉田がいつても百合子は力を緩めなかった。

吉田は、痛さより、百合子の暖かい吐息や歯の圧力がむしろ艶かしくて、心地よく受け入れていた。自分が充実して来るのが解った。

百合子がやつのことで噛むのを止めた。

百合子の目がつんとしている。手首には百合子の歯形がしっかりとついていた。

「ごめんなさい。痛かったでしょう。でも、噛みたかったの。大丈夫？」

あのね、都々逸にね、痣 あざ) の出るほど抓 つね) っておくれ、あとで惚気 のろけ) の種にする、っていうのがあるけど、抓るかわりに噛むっていうのは過激だね。これじゃ手首を人前に出せないよ。腕時計で隠すか」

「ごめんなさい。なぜ噛んだか、自分でもわからないの」

「だけど百合ちゃん、よく言ってくれたね。それは熟年の婦人でもなかなかいいなことだよ。して欲しいなんて」

「でしよ、わたしが異常なのよね。わたし、遅くなってから初めてこういうこと知ったでしよ。だからかなあ。同世代の早い娘だったら、もう十年も前からこういう事をしてるわけでしょ。わたし、自分ではそうは思っていないけど、身体が十年分を早く取り返そうとしているのかなあ、と思ったりもするんです」

「それはそれでいいじゃないか。わたしでよかったら遠慮なくそういえばいい」

あの、お解りないなっていらっしやらないわ、吉田さんて。わたし、他の男性とこんなことをするなんて、怖くてできません。ましてや、したい時にしてくださいなんて、死んでもいいない」

「うん、だから、わたしは自惚れるわけではないけれど、わたしでよければいつでも言うて」

「あのお、それがいいないんです、もう！」

それなら、こうしたらどうかね。その、抱

いて欲しい時にはわたしの耳をつまむ、どうだろう」

「あつ、それは、いいアイデアだわ、そうしたら会っていない時は？」

「えっ？」

「あん、ほら、欲張り女っていう顔しているわ」

「そんなことないよ。そのときはね、そうだね。携帯にハートマークを入れておいて、ね。どうしてもって言う時はハート三つとかね、どう？」

「いいアイデアだわ。でも・・・」

「でも何？」

「でも・・・、聞いちゃおうかな、どうしてそういうアイデアがずっと浮かんでくるの？前にそういうことをしたことがあるんですか」

「おいおい、何を言っているんだ・・・」

「いいえ、そうでもいいんです。吉田さんは魅力的な方だし、いままで女性がいなかったなんていうことはありえないし・・・」

「百合ちゃん、そんな心配をさせてごめんよ。そんな人はいなかったよ。いれば一緒に住んでいるだろうね。君もこの部屋に入らなかったかも知れない」

「吉田さん、わたしこそごめんなさい。くだらない嫉妬をしちゃって。仮にそんな人がいたとしても、それは吉田さんとその人の問題で、わたしにはどうにも出来ないことなのに。大丈夫よ、もうそんなことは言わないわ」

「百合子は吉田の胸に顔を埋めた。脚を吉田の脚に掛け、自分の股間を吉田の脚に押し付けた。吉田は脚に、百合子の湿った熱さを感じた。吉田は百合子の額に軽く歯を立てた。百合子は吉田の乳首を弄んだ。」

出張

百合子は、毎日の仕事に芯が入ったように

張り合いが出てきた。編集企画も何本もまとめて編集会議に出せるようになり、毎月十本ほどの特集のうち百合子の企画がいつも二本以上であった。当然、百合子が主体的にその主題に取り組み、若手の記者や社外レポーターを使って精力的な取材をさせ、自分がアンカーとしてそれをまとめた。

これに加えて、結城肇の担当もある。結城との折衝は相変わらず百合子の役ではあるが、原稿を引き受けてからの作業は、百合子の監督下で若い編集者にさせた。

副編（集長）やデスクの間でも、それまでのおしとやかで知的な百合子が俄かに活発になってきてきたことが話題に上るようになった。資質的に優秀でも企画力がなくなってきたり、フットワークが衰えてくれば、出版社では花形部門の雑誌編集から外して、出版部の方へ回すのが百合子の勤める出版社の傾向であった。夏休み前の百合子のままであれば、ほどなく出版部への口が掛かるところであった。

しかし、夏休み明けの百合子は、自分でも驚くほどはつらつとしてきたし、若い記者連中の飲み会の誘いにも積極的に加わり、自分の温めている企画を熱っぽく語るようになってきた。

俊恵も百合子の変わりようを別の角度から気がついていていた。百合子の身体には、以前にも増してみずみずしい張りが出てきたし、身体の線が丸みを帯びてきた。俊恵は自分の身体が古い、娘の身体がより女らしくなっていくことに、女としては嫉妬していたが、母親としては嬉しく思っていた。

百合ちゃん、あなた最近きれいになったわね」

何よ、急に」

二人は久しぶりに一緒に風呂へ入っていた。肩から腰、尻へかける線がなんともいえぬ色香を漂わせている。俊恵は、ひよっとしたら

百合子に男ができたかも知れない、と思った。三十路を過ぎた独身娘をもつ母親にとっては、娘に男ができることは願ってもないことだったが、自分の娘がその方面では晩生 おくて）な方なので、性質（たち）の悪い男に出会って、狂わされ、ぼろ雑巾のように捨てられるのが怖かった。娘をそんな風に育てた覚えはないが、こればかりは本人がいったん狂ったら、他人にはどうすることもできなかった。嵐が過ぎ去るように、じっと我慢するしか方策がないものなのだ。

あなた、おっぱいがきれいだわ。少し張りが出てきたんじゃない？」

そうかしら、自分では毎日見ているから解らないけど。でも最近ブラが少しくつくなっ

たみたいだな」
でしよう。すこし触らせて。あら、弾力があつて羨ましいわ」

お母さんだって、まだまだ大丈夫よ。わたしより大きくない？」

でも、あなたみたいに芯がないのよ。ほら、触って」

百合子は俊恵の乳房を触った。たわわな量感はあるが、全体がぼてっとして柔らかな。ブラがなければ形が整わないような気がした。でも、大きくても可愛い感じのおっぱいだった。

百合子は、脱衣所の等身大の鏡で、桜色に染まった自分の身体を見た。両の手で乳房を少し持ち上げた。自分でもきれいだと思った。見てくれる人ができたことを幸せに思った。半年前にはない感情であった。腰や尻周りのはのかに豊かになったように見えた。そこではなくて、胸の方がもう少し豊かになって欲しい、と百合子は思った。

もしもし、百合子です」

ああ、百合ちゃん、君か。どうした？ したくなかった？」

やだあ、いきなり。そんなこと言わないでください。昼間ですよ。いまだちらなんですか？」

ああ、事務所だ」

だったら、誰かいらっしゃるんでしょう。

聞かれるじゃないですか」

それは大丈夫だ。みんな出かけているし、秘書はジェットロに使いにいつている」

それならいいんですけど、でも吉田さんにそんな軽口叩いて欲しくないんです。ジェントルマンでいて欲しいんです」

いつもになく百合子がかりかりしているのを聞いて、母親にしかられた悪戯坊主のように、吉田はすっかり恐縮してしまった。

吉田さん？」

あ、はいはい」

聞こえます」

聞こえているよ」

そのことはもういいわ。それより、きょうは何時くらいまでお仕事なんですか？」

きょう？ きょうは、そうね、八時半ごろには終わるかな」

そのあとは、お食事のお約束とかあります？」

いや、きょうはない」

それはよかった。きょう、わたしも比較的早く上がれるんです。だから、お料理しようと思って。いいでしょ、吉田さんのところで。なににしましょ？」

そう。それは嬉しいな。わたしは何でもいいよ。嫌いなものはない」

パスタとか、大丈夫ですか」

オーケーだ。じゃ、わたしはワインでも探していこう」

吉田が自分のマンションの部屋のドアを開けると、百合子が腕まくりをして大奮闘中であつた。

お帰りなさい」

百合子は、慌てて出迎えに出てそう言った。

ああ、ただいま。こんなあいさつを交わすのは久しぶりだな」

百合子はいつか吉田が、彼の別れた奥さんが、いつてらっしゃい、も、お帰りなさい、も、ほとんど言わなかったと話したことを思い出した。

ちょうどよかった。もうできます」

じゃ、ワインは抜いておこう」

そういつて吉田は、赤ワインを抜いて食卓に置き、白ワインは冷蔵庫に入れた。

ネクタイを外し、うがいをして洗顔が終わると、そこには百合子がタオルを持って待っていて差し出してくれた。吉田にタオルを渡すと百合子はすぐにキッチンへとつかえし、料理を続けた。吉田は、着替えに寝室へ向かう途中、調理台に向かって作業をしている百合子の後姿をみて息を呑んだ。腰から尻にかけて立ち上るような色香が漂っている。これまでに百合子のこのような後姿を見たことはなかった。作業に連れて、薄紫色のタイトスカートに包まれたそのふくよかな尻が微妙に動くのに、吉田は自分の悪戯ごころを抑えることができなかった。百合子の後ろにそっと忍び寄り、両方の手で臀部を両手でむんずと掴んだ。

きやあ、こらあ、もう」

両手がふさがっている百合子は咄嗟に、かかとで吉田の足の甲をどんと踏み下ろした。

あ痛てて・・・」

こら、いけないぼくちゃんねえ」

百合子は、料理の手を止めずに、肩越しに吉田を優しく睨んだ。

吉田は、尻尾を巻いて寝室へ逃げ込む途中、百合子に見えないところで舌を出した。男はいつになってもそんな好色ごころを捨てられないものだ。これを電車の中で知らない女性にすれば痴漢だが私的な空間でするなら痴戯として二人の性的感情を盛り上げることになる。これを制御するのが、いわゆる常識なのか、と吉田は思った。

百合子は、その晩の食卓では饒舌であった。

吉田のグラスにワインを注ぎ、自分でも元気に飲んだ。若い記者たちと行った珍しいレストランのことや、取材記者が聞いてきた更年期の女性のホルモン療法の話など、吉田にも興味のある話題であった。

吉田さんは、どう思います？」

と、ときどき百合子が尋ねるので、吉田も知っていることを話すと、

どうして、そんなことをご存知なんですか？ 普通の、吉田さんくらいの年配の男性って、そんなこと知りませんか？ どうしてなんですか」

どうしてって、わたしがそんなことをなぜ知っているかなんて、考えたこともないよ、君だってそうだろう」

でも、吉田さんて若い人が興味あるようなことも良くご存知だし、難しそうな話題でも、わかりやすく話されるから、わたし、いつも感心しているんです」

その晩のパスタの原料とか産地なども、吉田は百合子にかいつまんで話して聞かせた。

百合子は、たまたま取材上知りえた料理法を試しにやってみただけだが、まさかその原料の解説を吉田にされるとは思ってもみなかった。

しかし、吉田が、

うまい、うまいね」

と言いながら食べてくれるのを見ると、百合子はとても嬉しかった。考えてみれば、百合子は男性のために料理をするのは、実は初めてだったかも知れないと思った。父親も兄弟もいない家庭で育ったので、食事をして帰るような男の客もいなかった。

百合ちゃん」

はい？」

「この料理がね、とつてもうまいんだけど、どうしてだと思う？」

ううん、わたし、実はあまり料理に自信が

ないんです。言い訳じゃないですけど、わたしの家って、あまりお客さんもこないし、だから、そうね、実績がないんです」

それはね、百合ちゃん、料理のね、腕も大事だけど、一番大事なのは、作る人が食べる人が誰か、を知っていて調理するからなんだ。作る人が作りながら食べる人の顔を思い浮かべるんだよ。美味しいと言われる料理でも、食券や仲居さんを間に挟んでの注文や配膳では、作る人と食べる人のところが通っていないんだ。ところが、家庭料理や気の効いた割烹では、作る人が食べる人を意識して調理している。わたしが知っている店では、そこはそんなに高級店ではないよ、だけど、板さんがピョコンと顔を出して、あいさつするのね。だから美味しいんだよ。今夜だって、百合ちゃん、自惚れた言い方で悪いけど、わたしに美味しく食べて欲しい、と思いながら作ったんですよ」

ええ、それはもう、ほんとにそのとおりで・・・」

だから、美味しいのさ。ああ、少し酔ったかな。能書き言ってごめんね。でも、外で食べるより全然おいしかったな」

そういわれると、わたし、とても嬉しい。毎日作っちゃおうかしら」

おいおい、職業婦人が無理するなよ」

やだあ、職業婦人なんて、キャリア・ウーマンっていつてくさい」

吉田も、実のところ、ネクタイを外し、革靴を脱いで、落ち着いて和やかな食事をしたのは、何年ぶりだろう、というほど思い出せなかった。自分で築き上げ得なかった家庭というもののへの感傷が、吉田の身体の中を秋風のようにさっと吹きぬけた。

吉田は、さて、と思った。音楽を、である。

食後でもあるし、モーツァルトやショパンもないだろう、とCDラックを眺めた。チック・コリアやリー・リトナーでもいいが、もうち

よっと通俗的なものの方がリラックスできそうだった。手にしたのは、サム・テイラー、サックスのCDであった。吉田にとっては、青春のひとつの懐かしもののアルバムだが、若い百合子にとってはクラシックの部類に入るかも知れない。案の定、食後の洗い物をしながら「ハーレム・ノクターン」を耳にした百合子は、振り向いて、

やだあ、こんなの持っているんですか。吉田さんて、ひょっとして音楽的には浮気者かしら」

浮気者はいんじゃない。まあ、雑食性かな。あの、その洗い物そのままにしておいていいよ。明日は休みだし、自分でするから」

はい。でも、もう終わります」

吉田は、洗い物をしている百合子を見て、噴出しそうだった。というのは、百合子はバスタオルを洋服の上から、湯上りの女性が素肌の上によくするように胸に巻きつけていたからだ。なるほど、そうすれば、勢いよく食器を洗って水が撥ねても、洋服に飛ぶようなことはなかった。吉田は、体裁より実用を重んじる百合子を好ましく思った。

百合子が洗い物をしている間に、吉田は百合子に好みを聞いてからミント・フレーバーのアイスクリームを二つ用意した。スイスへ行っている間に、百合子がすっかり気に入ったアイスクリームであった。吉田は、ワインの買い物のついでに、密かに買ってきていたのだった。

洗い物を終えて、百合子が吉田の隣へ坐った。

ねえ、手がこんなに冷たくなっちゃった」あれ、お湯使わなかったの」

はい、使うほどじゃないと思っていたんですけど、ほら、ね」

百合子は、冷えた両手で吉田の頬を挟んだ。

うっ

吉田が顔をそむけた。

「こら、逃げちゃダメ」

百合子は吉田の顔を挟んだ手を前にずらし、唇をゆがめるようにした。

あ、お口可愛い。こうしちゃおう。えい」

「こら、やめろ。ふんぐふんぐ・・・」

吉田の意思は声にならない。

手で挟んでいて歪んだ吉田の唇に、いつもと違った興奮を覚えた百合子の胸は俄かに高鳴った。百合子は、その歪んだ唇に自分の唇を押し付けた。吉田に吸い返され舌を絡められて、百合子の手は緩んだ。崩れ落ちそうになる百合子の身体を吉田が支えた。百合子は吉田の首に手を巻いて、かろうじて自分を支えた。

ソファでひとしきり吉田に抱擁されたあと、百合子がブラウスや髪のを直している。

遅くなってしまったね。きょうはどうもありがとう。美味しかったし、とても楽しかった」

わたしの方こそ・・・吉田さんに喜んで頂いてとても嬉しかったです・・・」

タクシーが拾えるところまで送っていい」

あの・・・」

うん、遅いから、タクシーが拾えるまで一緒について行く。じゃ、行こうか」

あの・・・、吉田さん、わたし・・・今夜、帰れないんです」

えっ、どうして？・・・お母さんと何かあったの？」

そんなんじゃありません」

じゃ、どうしたの？」

あの・・・、わたし、きょう出張なんです。

出張で泊まることになっているんです」

なに？」

だからあ、出張できようは、このホテルに宿泊することになっているんです！」

えっ、ここに？・・・」

はい、母にはそう連絡しました。吉田さん

のところ泊まるとは話していませんが、急な取材出張で出かけるので今夜は帰らないからって。ホテルは現地のビジネスホテルを取るから、急用があったら携帯に電話をする事になっているんです」

それで・・・」

それでって・・・、あのご迷惑でしょうか。

「ご迷惑でしたら出張は取りやめにしますが」

「や、あの・・・、その・・・、迷惑だなんてことは全然ない、全然ないよ。だけど、その、なんちゅうか・・・」

それでは、よろしいんですね」

うん、全然構わないけど・・・」

うわあ、やったあ。ありがとうございます。

嬉しい」

百合子は、吉田の胸に飛びついた。飛びついて、吉田の頬に短い接吻をいくつもした。

吉田にとっても、スイス以来何ヵ月ぶりかで、落ち着いて百合子と肌を合わせることができたことは願ってもないことであった。

これまでに外で食事をして、二人でタクシーで帰る途中、自分のマンションの近くで降りる時、ひと言、百合子に声を掛ければ、間違いなく吉田についてくる百合子の胸の内を、吉田は十分承知していた。しかし、それは吉田がしてはならないことだということを、吉田自身、十分に認識していた。

元はといえば、百合子が自分の女性としての通過儀礼を冷静に組立て、逆立ちしてもいえないような含羞の思いはあれ、その時点でもっとも信頼できる母の友人である吉田に、思い切って依頼したのが発端である。吉田も、最初はその依頼の受諾に躊躇はしたが、百合子の真摯な情熱に打たれて、その企画の支援役を請け負った。

ところが、百合子はその依頼を理性的にしていると自認していたが、自分の吉田への依頼の台詞が進むうちに、自分の気持ちの中にある吉田への信頼感は、実は恋ごころであることに気がついて瞠目の思いをする。

スイスでの幻想的な小さなホテルで、吉田に優しく導かれていくうちに、百合子は完全に吉田にところを奪われていく。自分では、通過儀礼が終われば、吉田とは再び礼節をわきまえた知人関係に戻るつもりではいたが、自分の行動は、自分の考えどおりには行かない。そこが大人でない女の考えの及ばないところであった。

実は吉田は、それをもっとも心配していた。百合子は若いだけに、また、これまでに身を任せて恋するような恋愛もしていなかったの、指南役の吉田との性的関係ができると、自分でも制御できないほどの勢いで、恋の暗闇へ転げ落ちていくようであった。女として可愛いといえばこの上なく可愛いし、愚かといえば愚かかもしれない。

しかし、吉田にしてみても、百合子の前では、極力、分別のある大人の男を演じては見るものの、百合子を慈しみ、独占したい気持ちは目を追って高まっていった。百合子と親子ほども年が違わなければ、百合子ともう一度やり直してみよう、とも思うが、結局のところ、百合子は相応の若い将来のある男と所帯を持つことが彼女のもっとも幸せな道だと思えるのであった。したがって、スイスから帰国以来、連絡をしてくるのはいつも百合子の方であり、吉田は一度もしたことはなかった。百合子は百合子で、吉田から百合子に連絡をさせるのは失礼と思い、若い自分の方からせつせと連絡をしているのであった。

今夜、百合子がここへ泊まることになれば、二人の関係はより一層濃密になり、百合子の弾みに歯止めが掛からなくなりそうであった。濃密の度合いが深くなればなるほど、結果的に百合子が大きな傷を負うことになるのではないか、吉田はそれを考えていた。そうならないためには、吉田が潔く身を引けばいいことであり、それだけにズルズルと百合子の可愛い誘いを断りきれない自分の狡さを責めた。

泊まってい、という吉田の承諾を得た百合子は、鼻歌などを口ずさんで上機嫌であった。

吉田さん、シャワーされるでしょ？」

いろいろ考えていた吉田の頭に、百合子の声が突然のように飛び込んできた。

あ、そうだね。でも、君、先に使ったら？」

はい、でもわたしは後から。バスタオルとかお持ちしますが、どちらでしょう」

あ、いいよ。自分のうちだから自分でするよ」

そういつて吉田は、着替えやらバスタオルなどを取りに寝室へ消えた。

バスタオルや替え着などを持ってきた。ひとつのバスタオルと男物のパジャマを百合子に渡した。吉田は脱衣所へ消え、やがてシャワーの音が微かに聞こえてきた。

百合子は、脱衣所へ行った。そこに脱ぎ捨ててある吉田のシャツや下着などを、折り目正しく折たたんだ。どっち道、下着は洗濯機へ入れられ、シャツはクリーニングへ出さなければならぬのだから、折りたたむことはなかったが、何故かそうしなかった。折りたたんだ吉田の下着を、そっと鼻に当ててみた。吉田の、微かではあったが、覚えのあるその体臭が百合子の鼻腔を一瞬のうちに満たし、百合子はくらくらとした。下着は汚れてはいないが、吉田の体臭は強烈な麻酔薬のように瞬間的に百合子の頭の中を真っ白にした。百合子は壁につき、自分を支えた。

湯上りの吉田は、ベッドに仰向けになってみると、風呂上りの心地よさとワインの酔いとで、ずとんと眠りに落ちてしまった。どのくらい眠ったのだろうか。ふと目を覚ますと、灯りは枕もとだけ灯され、隣には吉田のパジャマを着た百合子が横になっていた。

あ、ごめん、ごめん。寝ちゃったんだ。どのくらい寝ちゃったかな。起こしてくれれば

よかったのに」

だって、気持ちよさそうだったから・・・、それに朝まで「一緒なんだから、傍にいないだけでもいいと思って起こさなかったの。でも、起きてくれて嬉しい・・・、ねえ、キスして」

吉田は、百合子を引き寄せ、最初は額に、次に半開きの唇に口付けをした。百合子が切なげな声を漏らし、体をよじるようにした。口を離すと、百合子の唇がそれを追った。

百合子の手が、吉田の耳を弄っている。吉田は百合子がいとおしかった。なにもこんなところで耳をさわる合図を送らなくても、それをするために泊まったのではないか。そんなことを申し合わせ通りにする百合子の几帳面さが、吉田にはたまらなく可愛く感じられた。吉田は、耳を触っている百合子の手をそっと外し、腰の方へ下げて吉田を握らせた。

百合子の手は、一瞬躊躇ったが、

触っていいですか」

といって、懐かしそうに握り返してきた。遠慮がちに律動させる百合子の手に、吉田の衝動は一気に高まっていた。

その晩の百合子は、実に自由奔放であった。いつか百合子が言ったように、晩生 おくてであった十年を取り返さんとばかりに、吉田との交わりに熱中した。殺している声が、ときどき制御できなくなつて破裂し、寝室を満たした。吉田の腰を追ったり、活きのよい魚のように跳ねたりもした。明るいところでは想像もつかない、清楚な百合子の秘めたる姿態であった。

閨事以外でも、何をするにも、

「・・・していいですか？」

というのは、百合子の前々からの口癖でもあり、いまの若い女性の流行の言い方でもあった。要は、相手に対する要請を ああしてください、こうしてください」という具合に直接に表現しないで、自分の要請に対して相手の許可を得るという方法をとる。これによつ

て対人関係を円滑ならしめようということだろう。英語なら、メイアイ・・・、とかウツジウマインド・・・のような感じだろう。

聞事の最中に、性的な要請を ああして」

「うして」などといわれると、ずいぶん下劣で淫乱な感じがしないでもないが、百合子のように依頼されると、何もそんなに遠慮しなくてもいいじゃないかと思うし、時々突然、「・・・して！」とか極めて直接的にいわれると、当方も激情を異常にそそられて新鮮なこともある。

疲れた？ 大丈夫？」

百合子は、おとなしくなった吉田のものを両手で優しく包むようにしていった。

大丈夫だよ。どうしたの？」

吉田は、百合子のパジャマの上から固い乳首を優しく探った。

あん・・・、あの・・・、なにかわたし、自分が怖い気がするんです」

どうして？」

どう言ったら良いかわからないんですけど、なにか、こう、吉田さんにこうして優しくしていただくたびに、どんどん、何ていうか、気持ちが悪くなっていった、もう止められなくなってしまうのではないかと、ほら、ドラッグを常用すると、そんな感じなんですよ。よくわからないけど」

「・・・もう、止めたっていうこと、こういう状態を」

あん、そんなことじゃないのよ。止められないわ、もう。わたし、吉田さんに何ていわれても良いけど、こういうことって、嫌いじゃないみたいなんです。あ、吉田さんに負担になるんなら止めてもいいかも。でもわたし、吉田さんとかこういう事するでしょ。すると、気持ちが悪くなりすぎるし、体調もすごくいいのよ。嘘じゃないわ。それに、吉田さんに抱かれているときって、独りじゃないんだって、吉田さんにすこく愛されているんだっ

て思うんです。わたしの自惚れかも知れないけど。吉田さんに揺すられて、繋がっているところから、ほら、二人で一体になっている人たちがいたじゃないですか、その人たちにはお気の毒なんですけど、わたし、吉田さんと一体になったような感じがするんです。血も体液も全部そこからわたしに流れ込み、わたしから吉田さんに流れていく。二人じゃないのよ。独りになった感じ。だから、いつも一緒にいたい。ね、吉田さん、わたしのこ

と好きでしょ」

うん、好きだよ」

ああ、嬉しい、ほんとに好き？ ねえ、もっと百合子のこと好きって言って」

百合子は、吉田の乳首を口に含んで舌を這わせた。吉田は手櫛で、百合子の髪をやさしく梳いた。百合子の生ぬるい艶かしい吐息が胸に心地よかった。

それでね、わたしって、吉田さんにずいぶん甘えていると思うんです。いつもわたしが電話して、お時間を作っていたでいて、抱いていたでいて。わたし、いままでにお電話して吉田さんにお断りされたこと、いちどもないわ。まわりの若い娘の話を聞いていると、彼がなかなか時間が作れないとか、急用でデートをキャンセルされたとか、よく聞くの。でも、わたしって、そういうこと一度もないですよ。それはそれで、とても嬉しいのよ。でも、それは、きっと吉田さんがいろいろ無理をされて、わたしに合わせていたでいていると思うんです。わたし、馬鹿なのね。最近それに気がついたの」

そんなことはないよ。それは君がいつも気を遣ってくれて、わたしが時間が取れそうな時とか、わたしの方から君に会いたいなあ、とか思っている矢先に電話があるんだ。君は、勘が良いんだよ。わたしは、とくに気を遣っていないよ」

そうかしら。本当にそうなら良いんですけど。それから、ベッドでも優しいわ。優しい

のは嬉しいけど、やはり若い娘の話を聞いた
り、結城先生の小説を読んだりすると、男の
人っていろいろ要求するそうじゃないです
か」

何を？」

何って、その、何か、ああせい、とか、こ
うせいとか、いやらしいことをさせるよう
ですよ。吉田さんて、健全ていうか、そうい
うことないじゃないですか」

百合ちゃん、そういうことしたいの？ そ
れは、前にも言ったように二人の問題じゃな
いか。他の男がどういおうが、それはそちら
のペアの話であって、わたしたちには関係な
いだろう。いや、君がそういうことをしたい
んなら、しても良いけど。わたしたちがそう
いう機運になったら頼むかも知れないな。そ
れで良いだろう？」

そういうわれればそうですが・・・。吉田さ
ん、わたしとこうすることって満足していま
す？」

百合ちゃん、きょうはどうしたの。ずいぶ
ん懷疑的だね」

ごめんなさい。わたし、別に吉田さんに突
っかかろうと思っただけじゃないんです。た
だ・・・」

ただ？」

わたし、吉田さんに優しくされると、自分
だけよくなっちゃってるんじゃないかと思
うんです。こんなことを言うのは恥ずかしい
けど、吉田さんに優しくされて、だんだん気持
ち良くなって、そして、入れてもらうでしょ。
もう、自分がわからないほど夢中になっちゃ
うんです。そして気がつく、すべてが終わ
っていて、吉田さん、いつもわたしをきれい
にしてくれて、ティッシュユまで挟んでくれ
て、もう、そっちの方がぜんぜん恥ずかしいわ。
ねえ、吉田さん、わたしとしていて気持ち
いいですか。わたしにせがまれて仕方なくっ
ていうことはありません？」

「ら、百合ちゃん、生意気いわないの。わ

たしに気を遣ってくれるのはとても嬉しい。
でもね、君のように経験の浅い娘には、そう
そう、セックスの最中に相手のことにまで気
は回らないもんなんだよ」

そうなんですか？ でも、わたし、いつも
自分だけよくなっちゃっているようで、吉田
さんてすごくクールに見えるんです。お顔だ
け見ていると解らなくて、固く大きくなって
いるあそこを触った時に、ああ、吉田さんも
気持ちよくなっているんだ、って思うんです。
それなら、もっと気持ちよさそうな顔をされ
れば良いのに」

なるほど。百合ちゃん、よくわかったよ。
今度そんな顔をしてみよう。そして、そのう
ち、いろいろお願いしよう。楽しみだ」

うわあ、何か、いやらしい目つきだ」
何言ってるんだ。自分から言い出したんじ
やないか」

吉田は、話を聞きながら撫でまわしていた
百合子の恥丘のへアをまとめて柔らかく引き
上げた。

キャッ」

百合子は腰を引いて、吉田の胸を拳でドン
と叩いた。

フランスへ

百合子が働く雑誌と競合誌とは、発行部数
の点では、ほとんど変わらなかった。営業か
らは、編集企画さえよければ部数も伸び、部
数によって有力広告主を長期で契約できると
いうプレッシャーがいつもあった。編集企画
の良さだけを追っていた若いころと違って、
最近の百合子は編集長、デスクに次ぐ立場に
あるだけに、編集企画の良さもさることなが
ら、泥臭い部数拡大にも充分配慮した誌面構
成を意識しなければならなかった。

競合誌の中には、老舗のプライドはどこへ
やら、主婦の性的告白首記ものを売り物に部
数をかなり伸ばし、百合子が勤める雑誌を追

い抜かしたような新しい情報も入っていた。それだけに、ファッション、化粧品、化粧品、健康もの、食べ物、海外紀行もの、そしてセックス関連といった、従来からあるジャンルだけでは、どう趣向を変えても、一年立てば一巡するような企画で、したたかな読者を取り込むのは難しかった。

編集企画を立てるときは、競合誌はもとより競合関係にない女性誌や男性誌、あるいは日刊紙などによく目を通しておくが、海外の女性誌も有力な情報源であった。

百合子の先輩達は、航空便で取寄せた各国の類似誌を参考にしていたが、百合子は吉田に手ほどきを受けた英語のインターネット検索で海外の類似誌などの情報を入手していた。もとより百合子は英語がそんなに堪能ではなく、ましてやフランスやスイスの女性誌となればフランス語のホームページなので、辞書を片手に奮闘しなければならなかった。しかし、ホームページのレイアウトや写真、イラストなどで内容はおおかた見当がつくし、あとは興味と情熱で必要情報を「解明」していった。最近ではインターネット上の英和辞典や仏和辞典を使う術にもなれ、従来の辞書を繰るより大幅なスピードアップが可能となった。

百合子はそのような作業に倦むことを知らなかったばかりか、以前にも増して積極的な情報収集に励んだ。外国の雑誌の企画をそのまま日本の雑誌企画にしては、あまり意味はないし違和感もある。収集した情報をいっぱい頭にストックした百合子は、歩いている時やホームで電車を持っているとき、料理をしている時、風呂に入っているときなど、思いついたアイデアを片っ端からメモしていった。新聞の折込広告の白い裏を利用した文庫サイズのメモ用紙は、バッグの中はもちろん、風呂の入り口や台所、枕もとにまでおいてある。アイデアがそのまま編集企画になるわけ

ではなく、ホテルのテイルームで作家や取材先の人と待ち合わせる時に、このアイデアとこっちのアイデア、と言う具合にメモ用紙をいろいろと組み替えてはあれこれと思案するのであった。

ここ一年くらいの間に、百合子の編集会議への提案案件が増えたばかりではなく、内容的にも他の編集者を納得させるのは、このような地道な努力があった。しかも外国雑誌ネタの二番煎じではなく、それを充分考慮して、日本人読者にぴったりとした企画に仕上がっているところが、他の編集者を唸らせた。また、提案内容の説明に続く、取材方法、編集外注プロダクションの活用法、印刷入稿までのスケジュール、それに予算案まで、終始一貫して筋が通っており、編集長もデスクも、これじゃ自分達の出番がないとばかりに、外国人のように両手の内側を上に向け肩をすくめるしかなかった。二人はここ一年ぐらいの間に、百合子が大きく育ってきたのを感じた。

あるとき、百合子は吉田のマンションで食器を洗っている時に、ふと思つて手を休めた。吉田のほうを振り向いた。吉田はクルヴオアジェを片手にルノアールの画集を繰っていた。手をぬぐってエプロンを外した百合子は、吉田の横に自分のコーヒークップを持って坐った。

ありがとう。おいておいてくれればわたしが洗うのに」

はいえ、とんでもない。それより、チョット聞いていただきたいんですが・・・」

何だね。また編集企画の話かな」

わかります？」

わかるよ、君の話は大体見当がつく。明るいとこでは編集の話、暗いところでは・・・暗いとこってなに・・・あつ、いやらしい、もうっ、吉田さんの頭の中はどうなってるのかしら」

百合子は、吉田の背中をドンと叩いた。

あ、茶化してごめん、で何？」

あのね、真面目な話なんですけど、フランスに『ランタン』という女性雑誌があるの」

あ、いつか話していたやつね」

そう、その『ランタン』なんだけど、提携しようかと思うんです」

ほう、面白いね、どうして？」

吉田は、画集を押しやりグラスを置いた。そこがまだ、いまいちクリアじゃないんだな、わたしの頭の中は。いまのとき、右脳の直感かな」

海外雑誌と国内雑誌の提携は、今までに例がないわけではない。いくつか知っているだろ？」

はい。経営誌とかスポーツ紙とか・・・」

君がどうして提携したいか、まあ、頭を整理中としても、こういうことが言えるかな」

吉田は、ブランデーを一口含んだ。

つまり、海外雑誌と提携すると、井の中の蛙の情報状況にある日本の読者は、海外の情報が入ってくるので、そこに接しているだけでも満足だった、うん、『だっだ』。つまり低い次元での舶来崇拜だね。婦人誌もそうじゃないかね」

そうですね。婦人誌はまずファッションがそうでしたよね。でもそれは、確かにイタリアやフランスには洋装的には学ぶものが多かった。こちらが洋装という点では次元が低かったからそれは仕方ないでしょ」

そうだね」

でも、いまの日本の読者って先端的な部分の人たちは、もう、ほとんど海外と差がないくらいに洗練されてきていると思うんです。とくにウチの本の読者ってそういう鋭さがあるのね」

なるほど」

あ、話しているうちにだんだんわかったきたわ。あのネ、こういうことかな。おかしかつたら言ってくださいね。今まで、競合誌は海外の雑誌の記事を二番煎じ的に記事化して

きたの。これって、ちょっと野暮いけどね。

でも、それはそれなりにその手の読者には受けるのよ。でも、ジャーナリズムってそういうものじゃないでしょ。読者に受けなければいい、ましてや二番煎じでは読者を愚弄してるわ。

読者にはわからないかも知れないけど、わたし達にはネタもとは明らかなんだし。だからわたしは、そうではなくて、海外の記事をヒントに日本の読者に相応しい企画を考えてきたんだわ」

その努力は認めるよ。最近、ここにもあるけど、広告の裏を使ったメモがあちこちにおいてある」

あ、すいません」

それは、どうでもいい。でも、君の言っていることはいい線いつているかも知れない」
そうかしら。どういう点ですか」

つまり、従来の雑誌にない提携、と言うことだね、とくにお宅の雑誌の読者にとって、と言う意味だ」

うーん、どういうことかな」

「今までよその雑誌がしてきた、君が言うところの二番煎じの記事、ま、これを仮にファースト・ステップとしよう。次に、君がしてきたように海外雑誌の記事をヒントに読者にマッチした企画を考える、これがセカンド・ステップだ。つまり簡単にいうと、ファースト・ステップでは、お母さんが外国にあるケーキを真似して作った、砂糖も多めだ。でも、子供は美味しいといった。セカンド・ステップのお母さんは、外国の料理のレシピは基本的に自分の子供に合わない。だからその料理にヒントを得て、自分の子供に相応しい料理を作った、ということだな」

なるほど、そういえるわ。その先がありそうね」

うん。君が考えている提携というのは、ま、これを仮にサード・ステップとしよう。お母さんが、舌が肥えてきた自分の子供を見て、外国の選りすぐったケーキや料理を宅配便の

ようにすぐ届けるから、あなた方、自分で味わってみて、とまあ、こんなことじゃないのだろうか。お宅の読者は比較的洗練されているということだし」

「うわー、まさにそうだね。わたしの直感を上手に解きほぐしてくれたのね。左脳的分析、かしら。ファースト・ステップやそれ以前では、翻訳記事も舶来品で、その香りだけにくらくらくしていた時代だったけど、確かに吉田のおっしゃる通りに、比較的ハイセンスなうちの読者は翻訳記事でも、もう、直接吟味できるレベルにまでできているのよね。うん、そうだね。わあ、吉田さんて素晴らしい」

百合子は子供のように吉田の首にまとわりついた。

「いやいや、わたしが素晴らしいのではないよ。考えついたのは君だし、そうできたのは君がいつも読者を意識していたからじゃないかな」

「いええ、このようにクリアに分析していただけなかったら、わたし、一二週間、悶々とするところでした」

「昼も夜も、悶々じゃ、大変だね」

「はい？ あっ、こらあ」

『フランタン』との提携話は、その後、百合子によって取締役会への上申・企画書としてまとめられた。例によって百合子の企画書は、企画背景、読者の嗜好分析、競合誌の編集傾向とヒット企画、仏誌『フランタン』との提携と競合誌との差別化、提携内容、提携までの手順、予算案など、あらゆる角度からの視点を網羅した一貫した内容であった。百合子は役員会での説明を求められ、ラップトップ・パソコンとデジタル・プロジェクトを駆使して、ビジュアル的に効果的なプレゼンテーションを行なった。

百合子のプレゼンテーションの後、プレゼンテーションの内容をハードコピーの資料と

して配布を受けた役員からは、質問らしい質問はほとんどなかった。百合子はプレゼンテーションにあたり、役員の年齢を充分加味したわかりやすい内容にし、カタカナ語もできるだけだけ日本語で表現したため、役員にとって理解しやすかったし、何よりも企画内容の説得性が高かった。競合誌に勝つための斬新なアイデアが役員の賞賛を受け、満場一致で採用された。百合子の胸には熱く込上げるものがあつた。吉田に一刻も早く報告したかつた。

提携の企画内容は、ひとつは、次号の先方の企画内容から、当方の読者に「受ける」と思われる記事および写真の相互交換掲載である。従来からよくある方法であるが、実はその先方の記事に制作段階から当方の意見が反映されているのが目新しいところである。

二つ目は、編集会議を国際テレビ電話ですることである。和仏・仏和の同時通訳をこれに頼ませる。それぞれ先方の企画に意見を挟むことで、自分の雑誌に相手国編集者の独特の視点からの意見を反映させることができる。これにより編集内容に従来より深みを加えることができ、通り一遍の翻訳提携記事とは異なった記事が仕上がる。編集者を一人、相手国の編集会議に出席させるより国際テレビ会議のほうが、たとえ同時通訳を雇っても、内容的にも充分で、コスト的にも大幅に削減できる。

これに付随した企画として、当方の企画に先方の記者が絡む企画を入れ、取材と執筆を先方の記者がする企画があつた。これは主に、レストランやエステティック、著名人などへの取材であつた。自国だけではありきたりの切り口や取材になってしまふのを、相手国の記者の目を通して新鮮な角度からメスを入れていくものだ。

百合子の企画の柱の三つ目は、デジタル・マガジンの発行である。もちろんカラー写真、

イラストなどが含まれる。ファッションやコスメティックスといった女性関連の情報は新鮮さが命である。きょう釣った魚はきょうの内に食卓へ運ぶように、女性情報は迅速な配布が肝心である。そのためにはすべての情報を月一回の雑誌で運ぶには、あまりにも鈍足すぎる。そこで、生活情報や読み物系の、鮮度があまり重要でないものは企画内容で勝負し月一回の本紙掲載とし、足の速いファッションやコスメ系の情報は本誌より一足速、デジタル情報として公開していく。

この企画のさらにユニークなところは、写真入の記事に読者の書込みを可能にしたことだ。これにより、従来、編集者から読者への一方通行だった雑誌作りが、相互通行プラス読者間通行も可能にし、ユニークなコミュニティが形成されるようになる。

さらに、このデジタル・マガジンはメンバーシップが採用され、希望者は購読申し込みが必要である。安かろう悪かろうの無料情報と一線を画し、雑誌のブランドを高く保つ策であった。

最後のデザイナー

百合子の企画案は、さっそく採用され百合子が企画した手順に従って翌月からスタートした。百合子は『アランタン』企画担当の副編集長に昇格し、専属の秘書的女性記者が配属された。彼女はフランスからの帰国子女であり、小学校高学年のころ父親の転勤で渡仏し、大学は日本の私大を出ている。文体等の格調はともかくフランス語の読み書きと会話には不自由はなかった。

フランスの『アランタン』誌とは、企画の前交渉として委員会の決着が得られれば提携できる旨、あらかじめ了解を取り付けてあったので、この企画の第一歩は、契約書の作成と先方へのその打診、そして調印であった。

百合子の生活は、『アランタン』企画の実施とともに、目まぐるしい日々となった。契約書の草案の起草、国際弁護士との打ち合わせ、『アランタン』の担当者とのメール往復、これは英語でよかった、外注先プロダクションやアート関係者との打ち合わせ・・・、いつも夜、シャワーを浴びる時になって、きょうのランチは何を食べたっけと、ぼってりとなってきた下腹を伝わる湯に優しく手を絡めながら思うのだった。

百合子は、このことは吉田には電話で報告と同時にお礼をしておいたが、急に忙しくなってきたので、二人の時間を見つけることはなかなかできなかった。吉田のほうも、何かヨーロッパに共同で法人を設立するとかで、日本を空けることが多くなっていた。

忙中閑ありというのが、実感で感じられるように、百合子は翌週にぽっかりと三日間ほど時間が空いていることがわかった。申し訳ないと思いながら、吉田の都合なんかに関わりなく、ひたすら吉田に会いたかった。吉田の柔らかな微笑と悪戯っぽくもはきはきとした声の調子の中に、我が身をどっぷりと浸けたかった。

メールをするのもどかしく、百合子は吉田の携帯電話の番号を登録から選り出し、若干逡巡はしたものの、エイッとばかりに発信ボタンをクリックした。

吉田は、五回ほどのコールのあとに電話に出た。

もしもし、わたしです。百合子です」

あ、久しぶり。元気？」

はい、いま電話、よろしいですか、どちらですか」

あ、いまね、ホテルのロビーで人を待っているところだ。スイスから成田へきて、リムジンバスでここへ向かっている。電話、大丈夫だよ」

よかった。お久しぶりです。わたしは、この間、電話でお話したように新しい企画が通

ったので、とても忙しくなってきたんです。
吉田さん、お変わりございません？」

うん、元気だ。君も元気そうな声をしている、何か、張りが出てきたようだね、彼でもできたか」

また、そんなことおっしゃって。そんな人はいません。あの、お電話したのは、わたしの都合で恐縮ですが、来週くらいにお時間、とっていただけると嬉しいんですけど」

何かあったの」

「いえ、何もないけど、でもわたしたち、お会いするのに理由があるんですか」

百合子は、甘えながら吉田を少し詰（なじ）った。

「いやいやいや、そんなに尖がらないで。来週なら木曜日にスイスへ発つことになっているけど、それまでなら時間を調整できる。今日くる人は木、金は仕事の打合せをするが、土、日は東京観光と箱根の温泉に案内して、月曜の朝にはさよならだ」

それでは、月曜の夜いいですか」

百合子は、できるだけ早く会いたかった。わたし、また新しいレシピー覚えましたから、お宅へお伺いしてもよろしいですか、もし、ご都合よろしければ」

わかった、じゃ、月曜日はディナーのアポを入れないでおく。いつも悪いね」

おんでもないです。やだあ、他人行儀みたいで」

百合子には、吉田との久しぶりの会話がとても嬉しかった。吉田の軽口はいつものことだけど、その軽口に少し拗ねたり、吉田を詰ったりする幼児的な自分を可愛いと思った。何日も水を遣り忘れた小花に水をかけてやったように、身もこころもたちまち潤んでくるのがわかった。

月曜日の夕方、百合子はいつも遅くまで頑張ってくれている自分の秘書に、劳いの言葉をかけてやり、早く帰れるときは早く帰るよ

うに言葉をかけた。わたしもそうするから、と彼女が帰りやすいように言葉を追加した。

吉田のマンションでは、自分の方が吉田より当然早く到着したと思っているので、チャイムも押さずにドア・キーを回して中へ入った。

「？」

玄関の明かりがついており、吉田のものと思われる靴が脱ぎ捨てられたままで揃っていない。

買い込んできた食材の包みをそこに置き、吉田の靴を直して再び食材の包みを手にしたとき、吉田が奥から出てきた。着替えもしてなく、スーツの上着を脱いでネクタイを緩めたままであった。そんな着崩したなりは、一緒にお酒を飲んで興に乗ってきたときなど何回も見えて知っているのでなんとも思わない。むしろ上着を着たままの吉田より、そんなカジュアルな格好で熱く語る吉田のほうが、百合子は好きだった。

しかし、今日はそんな吉田と少し違う。髪の毛も後ろの方が寝癖のように立っているし、何よりもいつもの吉田らしい精気が感じられない。病んで身づくろいを忘れた猫のようだった。

おう」

あら」

二人は同時に、あいさつともつかない小さな声を上げた。

「いらっしゃったんですか。てっきりまだかと思っってチャイムもならさないで、失礼しました」

うん、少し早く片付いたものだから・・・
吉田は、百合子の手から荷物を引き取りLDKへ向かった。

何か、お元気なさそうだけど、どうかされました？」

LDKへ通じる廊下を吉田のあとから歩きながら、皺の寄った吉田のワイシャツの背に

声を掛けた。

「いや、とくになんでもない。時間があつたものだから、少し横になっていた」

あ、そうでした。それならいいんですけど。

髪が立ってますよ」

百合子は吉田の飛び上がった髪を手で優しくなでてやった。へへ、といいながら吉田は自分で髪を直した。吉田の頭上で百合子の手に触れた吉田は、百合子の手を握ったまま下に下ろし、百合子の目を見つめた。百合子が瞳を閉じて顎を上げた。吉田は百合子の唇に自分の唇を重ねた。吉田は、この前百合子とこうしたのはいつだったか、記憶の糸をたどっていた。百合子は久しぶりの吉田の唇に全身の血が一気に逆上しそうであった。百合子の胸が二人の間で歪んだ。しばし、唇を重ね舌を泳がしていた吉田は、そっと口を放した。

あん、もっと」

百合子がせがんだ。

百合子は、久しぶりだったせいか、吉田の唇がいつもより温かいと感じた。いつもはやや冷たい吉田の唇の外側が、確かにいつもより熱いと感じた。吉田の手が百合子の胸に忍び寄る。

あ、待って、待って」

百合子は意を決して現実に戻った。

「こんなことしたら、お料理が始まらないわ。ね、シャワーまだでしょ。お先にどうぞ。

わたしはすることがたくさんあるから」

ああ」

吉田は気のない返事をして、着替えやバスタオルを寝室に取りにいった。

あれっ。

百合子は別に期待しているわけではないが、いつも吉田は離れ際に、百合子が後ろを向いたとき、去ると見せかけてずっと近づいては、後ろからお尻や胸をむんずと掴んだり、さっと撫でたりする。それがなかった。期待しているわけではないが、そうしてくれれば

ぞくぞくとし、身もこころも高揚する。それがなかった・・・。

吉田がシャワーから出てきてすぐ食べられるように、とりあえず小皿料理を作るのがいつもの方法であった。吉田は、何でもいいよ、簡単なものでいいしてくれる。しかし、スイスへ行ったときや国内で飲食をとにもするとき、話を聞いているとかなりの食通であることがわかる。山へ行ったときは、そのときで、重量制限のあるなか、持っていた食材からいろいろな食べ物を瞬く間に作り上げる。わたしも女だし、負けて入られないとは思うものの、なかなか得心のゆくものが出来上がらない。しかし、吉田が「うまい、うまい」と頬張ってくれることがとても嬉しかった。その笑顔を見ていると、本当に美味しいんだろ うな、と窺い知ることができて気が落ち着く。

今日は、簡単なテリーヌを作る。作るといっても仕込みや馴染ませに時間がかかるので、それは自宅で済ませてきており、ここではオーブンで焼くだけである。外側をベーコンで巻くような形にし、なかには牛肉を一枚ずつ広げて敷き詰め、途中、にんにくとパセリを散らす。これに赤ワインをふりかけラップをして冷蔵庫でねかしたものである。

テリーヌが焼きあがるまでは、小皿料理を作る。きょうはとりあえず生ハムとチーズのサンド。モッツアレッラ・チーズと生ハム、バジルの葉を三段重ねにして、適当な大きさに切る。これにプチトマトを添え、エキストラ・バージン・オイルを少しかければ出来上がり。百合子はこのレシピには自信と実績があった。友達を自宅に呼んだ時、大好評だったのである。見た目にも、トマトの赤、バジルの緑、チーズのアイボリー、そして生ハムのピンクととても可愛い。

この小皿とテリーヌの中継ぎには、鮪と春菊の刺身サラダを用意した。鮪と春菊に加え

て、生しいたけと玉葱がいる。鮪は適当に切り、醤油と酒の合わせに若干つけておく。シイタケは石突をとりオーブントースターなどで両面を香ばしく焼いておく。玉葱は薄く切って軽く塩もみをし、辛味を除いてから冷水に浸けてしゃきっとさせておく。これに醤油、ごま油、サラダ油、それに酢、砂糖などで合わせたタレを絡ませればよい。この手の生魚を使った料理は、吉田の大好物であった。

ちよっといつもより長い感じがしたが、吉田が浴室から出てきた。

おっ、美味そうだね」

そう見えます」

うん、早く食べたい」

と、そのとき、百合子は流しに向かって一瞬背を向けた合間に、吉田の両の手が百合子の両尻をむんずと掴んだ。

あ、こらあ」

「こうされるの、いやかい。手を放していい？」

吉田は百合子の耳元で囁いた。

あん、だめ、放さないで、でも今忙しいの」で、どうしたらいいの、放していいの、このままがいいの」

ああ、もう、そんなこといわないで！そこへ坐ってください」

料理皿を手にした百合子に肘で静かに押された吉田は、いつもの自分の席に坐った。いつものまにか自分で持ってきたエプロンをほどこいて畳んだ百合子も、吉田と直角の位置に坐った。

もっと早くお話、したかったのよ。でも、急に忙しくなってしまうって。役員会で決まったら、即、実行なの。わたしも秘書の娘も翌日に辞令が出たわ」

それだけ、競合状況が厳しく、早く手をつけたかったんだろうな、役員会も」

「この前、ここでいろいろお話したの、いつでしたっけ。お蔭様で、わたし、自分の頭の中が整理できて、とても助かりました。アラ

ンタン』にも通訳電話ですぐ話を伝え、具体的な内容もお話、したのよ。そしたらすぐく乗り気で、嘘みたいに話がまとまったの」

ヨーロッパのプリント・メディアもデジタル・メディアがどんどん台頭してきているので、気が気ではないのだろうな。プリントにせよデジタルにせよ、基本的には企画が勝負だけれど、デジタルは速いからね。いずれにせよ、両方を抱き合わせた君のアイデアはプリントの出版社にとってはタイムリーなものだったんだな」

そうでしょうね。でも、アイデアの半分は吉田さんのものだし」

そんなことはないよ。アイデアは君のものだ。わたしはヒントをほのめかしただけだよ。それを企画に纏め上げ、社内も先方も説得して納得させたのは君の力さ。たいしたもんだ」
「うわあ、ずいぶん持ち上げていません。はい、どうぞ」

百合子は、赤ワインを吉田に勧めた。この前、吉田が新宿の伊勢丹で探してきたボルドーのフルボディに近いもので、美味しいねって二人で喜んだものである。吉田のグラスが今日は少し進んでいないような気がした。

契約書がほとんど出来上がり、いま国際弁護士に最終的なチェックをお願いしているのよ。再来週にバリへ担当常務と飛んで調印することになります」

え、再来週？ 再来週のいつ？ いや、わたしは今度ヨーロッパへ行くのは少し長くなる。ひょっとしたら向こうで会えるかな？」

えっ、そうなの。嬉しい。ほんと？ ウチの常務も今回は、久々のヨーロッパなので古いお友達に会いたいから、調印の後、休暇を取ろうかなんておっしゃっていたわ。ちよっと待ってね」

百合子は自分のバッグから手帳を取り出し、予定を確認した。ちよと吉田がジュネーブから帰国しようとする日が、百合子たちがパリで調印する日であった。

その晩、吉田はあまりグラスを重ねなかったが、百合子との話を楽しみ、百合子がどんどん成長していくのをとても喜んだ。百合子は自分が成長しているとは実感できなかったが、仕事の面で、自分をどんどん押し上げてくるエネルギーを感じていた。誰にもいえないが、吉田にもっと多く、もっと激しく狂わせて欲しいとも、日に日に思うようになった。吉田に抱かれることなく、今後の自分が成り立つとは思えなかった。

その晩、深夜に吉田の胸の中で目覚めた百合子は、吉田が引き止めるのにもかかわらず、後ろ髪を引かれるおもいで、吉田のマンションをでた。

着替えもなかったし、俊恵に急な「出張」と告げるにはあまりにも遅すぎた。百合子は、吉田に激しく何回も翻弄されたことで、歩くのもままならぬほどであった。気のせいであったかも知れないが、吉田の瞳が潤んでいたように思う。いつにないことであった。

こんなあつけない日常的な別れ方が、二人の永久の別れになるとは、百合子も吉田も、夢にも思っていなかったであろう。

ローザンヌ

百合子はパリには二回きたことがある。いずれも私用の旅行で、話に聞く「花の都パリ」を自分の目と舌で確かめたかったからである。普通のOLの感傷旅行であった。学生時代の気の置けない友達と割安のバック旅行で来た。

この度の出張は、そうした私用のバック旅行とは趣きが全然違う。第一、飛行機の席からしてビジネス・クラスである。背もたれを後ろへやれば、日本女性の百合子にはベッドも同然の余裕があった。食事もワインも、やはり「ひとクラス上」を充分実感できた。

常務という中年男性と二人ということもあるが、仕事のためにわたし自らが会社を代

表してパリに乗り込もうとは、夢にも思っても見なかった。いつから自分はこんなに逞しくなったのだろう。自信がついたのだろう。シャルル・ド・ゴール空港に機体がドローンと着陸したとき、百合子はこぶしを握り締め、唇をかんだ。

空港まで迎えにきていた先方の出版社の係りの案内で、フランスの代表的な国産車・シトロエンの後部座席に常務とともに収まった。百合子はこんなに大きなシトロエンを見たこともなかった。

とりあえず出版社の応接室に通された百合子と常務は、そこで編集の最高責任者の手厚い歓迎を受けた。日本の経営陣と違って、ブロンドの髪にベージュのスーツ、パステル・グリーンのシャツ、しかもノー・ネクタイで、まるでどこかの映画スターのようであった。常務と彼が握手をしている時、百合子是不謹慎ながらも自社の常務を「かわいそう」と思ってしまった。社内でもダンディで通っている常務ですら、そんなありさまであった。

お疲れだろうから、と、ひとまずホテルでの休憩を促され、夜八時からディナーを用意してあるので、先ほどの車を七時半にホテルへ向けるとのことであった。

ディナー会場は、市街地から少し離れたところにあった。昔の小さな城の跡であろう、ちょっとした森の中に黄色い暖かな光が車窓から見えた。イヴニング・ドレスの長い裾に気をつけながら、常務にしたがって係りのものについて行った。入り口にはウェイティング・ラインを作って、先方の出版社の役員クラスと思われる面々がそれぞれ婦人を伴って微笑んで歓迎してくれた。フランス語の通訳が常務と百合子に一人ずつつき、不自由ないコミュニケーションに配慮してくれた。

高い天井には、由緒があるのであろう宗教画のような絵が描かれている。壁には、やはり歴史の一コマであろうシーンを描いた大きなタペストリーがかけられている。三方の壁

のタペストリーの内、ひとつはどうやらフランス革命のことを描いているようだった。広い室内の一角には、四、五人からなる室内楽団が配され、静かな楽曲を奏でている。

日本のパーティのように、格式ばった内容もなく、最初に先方出版社の会長が、それこそ「ア・フュー・ワーズ」に相応しく短い歓迎のスピーチをしただけであった。あとはそれぞれが通訳を介して勝手に話をして、時間がくればお開きであった。

それでも、先方はいろいろ手を尽くしてくれたのだろう、こちらから話し掛けなくても、先方から夫婦ペアでやってきて、握手をし、日本の他愛のない話題を持ち出したりして談笑してくれた。お蔭様で常務も百合子も先方の出席者のすべてと話をすることができた。

食べものは、着席料理ではなく、立食式なのでフィンガーフーズ的なものだが、そのひとつひとつにフランス式にお洒落な気品を盛り込ませ、百合子は俊恵に「お持ち帰り」してやりたいくらいであった。エスカルゴにフオアグラなどフランス料理をすべて持ち出したように、食べ物彩りも食器のあつらえも、百合子には今までにない素晴らしいものであった。

翌朝は十時から先方の会議室にて調印式が行なわれた。内容的にはすでに相互で充分吟味され、あとは署名をして、その契約書を一部ずつ持ち帰るだけであった。百合子は昨夜とは打って変わって、きりっとした紺系のビジネス・スーツに身を包み、化粧は薄めにしっかりとし、マニキュアも透明にした。昨夜、談笑しているだけに、みな親しそうな対応で、なかにはウインクをしてくる役員もいて、百合子を惑わせた。

百合子は調印後、常務とわかれてパリからジュネーブ行きの便に乗った。乗る前に化粧室で化粧を直した。少し濃い目の口紅をつけた。鏡の向こうに吉田が微笑んでいるよな

気がした。自分も微笑み返した。

短い機中ではあったが、百合子はそれまでの緊張が解けたのか、うとうとした。

高い山のお花畑は、白い小さな花が地面いっぱいに咲き誇っている。爽やかな風に、一斉に首をかしげるようになびく。後ろは冠雪したスイス・アルプスだろうか。真っ青に澄み切った空――。

と、登山姿の吉田が現れる。バンドナを締め登山用ベストには高度計、気温計、湿度計を一体にした自慢の器具が下がっている。微笑んでいる。やがて、二歩、三歩と後ずさりしたかと思うと、ふっと体を返して向こうへ遠ざかる。

あつ、吉田さん！ どこへ行くの。わたし、こっちよ」

すうっと流れる霧雲で吉田が百合子の目から霞む。

「いやつ、吉田さん、どこへ行くの」

霧が途切れて吉田が見える。振り返って手を振る。また、霧雲が流れる。

肩を軽く叩かれて、百合子ははっとわれに帰った。隣の中年の女性客が心配顔で除いている。

ホワッツハプントウユ？ アーユオーケイ？」

オウ、アイムソリー、アイムオーケイ。センキュー、マム」

百合子は、何が起こったか瞬間的にわからなかった。それが夢であったことがほどなくわかった。掌は汗でびっしょりであった。胸の間をツツツと伝い落ちるものがあった。

機はまもなく着陸する間際で、窓の外には景色がすごい速さで後ろへ飛んでいる。重量感のある静かな衝撃振動とともに機体は着陸した。

百合子の胸は激しく鼓動している。嫌な胸騒ぎがする。まさか。夢は夢に過ぎない。わたしが疲れていたんだわ。それで吉田の夢を

見たのよ。でも、何で行ってしまうの。

ジュネーヴ空港の建物に入った百合子は、公衆電話を探した。ホテルに電話してみよう。吉田は、ローザンヌのホテルにいるはずであった。レマン湖のほとりにたたずむリゾート用の「ボー・リバージュ・ホテル」、それが吉田の指定したホテルであった。何時につくかは解らないが、夕方には入っている、そういう打合せであった。

電話は見つかったが、使い方が解らなかった。フランス語ではお手上げである。コインもどれを使っているか解らなかった。人に聞いてもいいが、ローザンヌ方向行きのバスはまもなく発車する。電話で確認し、安心してから次のバスに乗ってもいいが、何はともあれ、一刻も早くローザンヌに着くほうがいい。そのように決めた百合子は、バスに飛び乗った。

日本とは趣を異にする車窓の景色は、百合子の無意識の記憶の上を流れ去っていった。

ははは、そんなことがあるわけないだろう。

ははは、心配症だなあ、ははは」

そういつて笑う吉田の破顔が目に見え、何ていう憎たらしい顔、こんなに心配しているのに。もう、許さないから！

でも、正夢というのではないだろうか、体調がおかしいということはなかったようだし……。なかった？ でも、この前のあの精彩が欠けたお顔はなんだったのだろう。ワイシャツも背中に皺が寄っていた。着替えるのも億劫なほど具合が悪かったのかしら。途中で、トイレも長かったし……。抱かれてからもいつもから見ると異常とも思えるほどの熱心さだった、いやだ、大事な時にこんなことまで思い出すなんて……。こんな時には悪いことばかり連想するもんなんだわ。百合子は、バスがもっと速く走らないかと焦りを感じた。

初めての土地とはいえ、ホテルはよく知られたホテルなのですぐにわかった。フロント

とはいっても大きな都会のホテルと違って、機能優先の直線的な感じはしない。リタイアした夫婦が時間を気にすることなくゆったり過ごすには、これでいいのかも知れない。百合子は吉田の名前をゆっくりとはっきり伝え、日本人であることを加えた。万が一名前を聞き違えられても、東洋人はまずいないだろうから、すぐにわかると思ったからだ。

フロントマンは、吉田は部屋にいるはずだと伝えた。

ウチのドア・キーは大きくて持ち歩きに不便だからね。外出なら皆さん必ずここへ預けていきます」

と別のキーを見せてくれた。それは、ゴムや鉄を配し、確かに大きく重そうで、持ち歩く気にはなれそうもなかった。ベル・ボーイが荷物を運び、百合子を吉田の部屋へ案内してくれることになった。

五階建てだが、真ん中が大きな吹き抜けになったロの字型の建物で、廊下はクルマがすれ違える位に広い。廊下の中央部には厚手の絨毯がしかれ、そこに大きな植木が置かれている。

吉田がとっているという部屋は、その広い廊下の突き当たりにあった。百合子は鼓動が高まったままの胸を抑えるように、息を凝らしてノックをした。杓として返事がない。聞こえるのは小鳥の囀りばかりである。今度は、ベル・ボーイがノックをした。やはり返答がない。フロントは、吉田は在室している、といった。しかし、鍵を持ったまま湖畔を散歩しているかも知れない、百合子はそう思った。ベル・ボーイが合鍵をまわしドアを押した。ドアは静かに開いていく。百合子はドアを開けきって、中に入っていた。

吉田さん」

百合子は、窓際で椅子にもたれるようにして眠っているように見える吉田に声を掛けた。

吉田さん」

百合子は、もう一度声を掛けた。吉田の膝

には日本語の文庫本が読み止しのまま乗っている。丸テーブルにはクッキーとミルクティが置かれている。百合子は、吉田が眠っているものと思い、起こそうとして彼の肩にそっと手を置いて揺すった。そのとき、吉田の身体がグラッと崩れた。慌てて手を出した百合子の力ではどうにもならず、椅子の上で身体を二つ折りしたように、頭が床まで下がった。

オー、ノン、ムッシュー・ヨシーダ！、ムッシュー・ヨシーダ！」

異常を察したベル・ボーイは、フロントへ異常を知らせる電話を入れた。百合子は、何が起こったか解らず、

吉田さん！ 吉田さん！」

と吉田の身体を揺するように叫んだ後、自分も膝を崩しその場にうずくまってしまった。

マダム！ マダム！」

百合子は、目の前が真っ暗になり、冷や汗がじわっと出、自分がその暗闇に転がり落ちていくような感覚を覚えた。意識はそのまま途絶えた。

どのくらいの時間がたったのだろうか。百合子は、周りで人々が話しているのか、呼びかけられているのか解らないが、わやわやとしているのが感じられた。何人かの人々が百合子を覗き込んでいるようにも見えるが、それは水中から地上を見上げるようにぼやけていてよくわからない。身体が、陽がさす水中の中をポコポコというような空気球が上がっていくのと一緒に、ゆるゆると上っていくような気がする。

するといままでぼやけていた人の顔らしきものが、次第に焦点が収束して来、はっきり結像した。同時に同調がずれていたラジオの音がきっちり同調できたように、人々の声のはっきりと聞こえてきた。でもそれは、百合子には理解できない言葉だった。百合子はそこが、吉田を訪ねてきた部屋であることを悟った。ベッドに横たえられていた。

百合子は半身を起こし、髪に手をやり、シヤツの胸元を整えながら、窓際の方へ目をやった。

吉田はどこだろう。吉田が窓際に坐っていたはずだ。その姿がない。そうだ。吉田は椅子から崩れ落ちた。百合子の胸は急に高鳴った。

気がつかれたかな」

初老の紳士がそう言ったような気がした。しかし、百合子には意味がわからなかった。

ご気分は如何ですか？」

今度は、若い女性が聞いてきた。黒いスーツに白いブラウス、肩までのウェーブしたブロンド、金色の胸章に名前が掘ってある。ホテルのスタッフであろう。こちらは比較的良好理解できた。英語だった。

あの、わたし、ここへ吉田さんを訪ねて来ました。そしたらとても信じられないことが起こって、それで気を失ったんだと思います」百合子は不慣れな英語でポツリポツリと話した。ジェニファーというそのホテル・スタッフは、百合子の精神的な衝撃を少しでも和らげようと、冷たい飲みものを取寄せたり、洗面所の案内をしたり、手厚い配慮をした。百合子は身寄りが全然いない異国の地にいながら、不自由な英語を介しながらも、百合子にこまごまとした世話をしてくれるジェニファーの行為が嬉しかった。

吉田さんはどこでしょうか」

百合子は、覚悟は決めてはいるものの恐る恐るジェニファーに聞いてみた。ジェニファーは百合子の両手を優しく包みながらいった。大変申し上げにくいことなのですが、彼は別の部屋でお休みになっています。ベル・ボーイから緊急通報を受けましたわたしたちは、常駐の医師とともにこの部屋へ駆けつけ、彼を診断しました。しかし、大変残念なことです、彼はすでに事切れていらっしやいました。死後三時間というのが医師の診立てでした」

うつ」

百合子は嗚咽して前のめりにベッドの上に崩れた。

百合子、気を落とさないで」

ジェニファーが百合子の肩と背中を優しく撫でる。グシユグシユ泣きじやくっていた百合子が、すくと背を伸ばし、

吉田さんにお会いできますか。会わせてください」

といった。

もちろんです。では、百合子、こちらへ」

ジェニファーは百合子のハンドバッグやら靴やらをそろえてやった。

エレベーターで一階までおり、フロントの横の細い通路をジェニファーについていった。突き当たりの右の部屋のドアを、ジェニファーが軽くノックして開けた。窓に白いレースのカーテンが掛かり、調度品がないことを除けば、ホテルの客室と変わりはないかった。

そのベッドに吉田は、顔に白布をかけられて横になっていた。ジェニファーが歩みを止めた。百合子が彼女をかわすように、そっと前に出た。ジェニファーが百合子のハンドバッグをとってやった。百合子はベッドのすぐ脇まできた。しばしたらずんで吉田を見下ろしていた。白布を外そうと、そっと前に差し出した両手が、つと止まった。百合子はその両手をいったん、胸の前で握り締め、今度は白布まで緩やかにだが一挙に手を差し伸べ、白布を上の方から下の方へ折り返すようにめくっていった。

吉田の顔の全貌が見えた。

少し血の気がないようだが、いつもの吉田の顔がそこにあった。眠っているようであった。

あ、よくきたね。すぐわかったかい」

目を覚まして、そんなことを言ってくれそうであった。

吉田さん、吉田さん」

百合子は跪いて吉田の肩と胸に手をかけ、

そっと揺すった。

吉田さん、起きて。どうしたの、わたし、百合子よ」

百合子は、吉田の顔を両手で挟んだ。

ねえ、わたし、百合子よ。起きてください、吉田さん！　ねえ、起きてください！　ねえ！」

百合子は、吉田の遺体に覆い被さって、泣きながら揺すった。

ジェニファーは百合子の肩に優しく手を置き、椅子に腰かけるように勧めた。百合子の泣き声は低くなったものの、涙はとめどもなく流れ、涸れることを知らなかった。

こんなにあっけない別れがあつていいものだろうか。人と生まれてこんなに素晴らしい出会いだったのに、何の前触れもなく、踏み切りがしまるみたいに突然、向こうとこちらに別れるなんて。二十四時間前には喜びの絶頂にいた百合子は、いまは絶望のどん底だった。

世の中にはいろいろな幸せがあるだろう。百合子の友達も、それぞれパートナーを見つけて結婚し、子供に恵まれ、家庭」を築いていた。

百合子はそういった面では、晩生だったとはいえ、吉田に巡り会えたのは奇跡だったとさえ思う。家庭も学校も、そして職場も、周囲に女性しかないような環境で育った彼女にとっては、吉田の話はいつも目新しく、瞠目することが多かった。

また、山に登れば、都会ビジネスマンとしての吉田とは違った、野性的な吉田が見える。百合子はいろいろな面で知らず知らずの内に、吉田によい意味で感化されてきた自分を思った。

そして百合子は、吉田はいつも遠慮がちではあったが、自分に、深く誠実な愛を与えてくれていたことを理解していた。自分がもう

少し大人の女になっていれば、それをもっとはつきりと自覚できていただろう。また、自分からも、もっと多くの思いやりを吉田へ差し出せたのにと、百合子は自分の女としての未熟さを思った。

湖畔に夜のとぼりが降り始めてきた。対岸の明かりが朧に見える。泣きはらした百合子の目の周りは、ぼつてりと腫れてきていた。

何故こんなに急にいなくなってしまったの。百合子の頭の中はそのことばかりだった。

「いつか、ヨーロッパをクルマで横断しよう」

吉田は、食事などで興が乗るといつもそういつて瞳を輝かせた。少年のように語って聞かせる吉田の話が、百合子にはいつも楽しかった。

成田からローマに飛ぶ。そしてレンタカーだ。フィレンツェからボローニヤ、ミラノを通ってアルプスを超えるんだ。北イタリアの食べ物とワインがいいね」

「そうなの」

百合子が相槌をうつ。

アルプスを越えると、この間儀式をしたラウターブルンネンとかをとおってね」

やだ、儀式だなんて」

「ま、何でもいいじゃない。いまとなっちゃ。

そこから、そうだな、サンモリッツ、インスブルグ、ここはいつか冬季オリンピックがあったところね、そこを通過って、ザルツブルグ、ここはモーツアルトの生誕地だね」

「そんなに回ると宿の予約だけでも大変ね」

あ、それは心配いらないよ。行き当たりバツタリさ。予約がなくても日本ほど困らない。それに予約が要るような大きなホテルには行かない。小さくてもいいホテルがヨーロッパにはたくさんあるから」

全部英語でいいんですか」

そうはいかないだろうな。みんな田舎の宿だから。イタリアはイタリア語、スイスも西側はフランス語、西側はドイツ語だし、大きな都市やホテルならともかく、基本的に英語

は通じないと思った方がいいかな。とくに田舎へ入ったら、まず通じないと思ったらしい」

えっ、それでどうされるんですか」

「へへ、度胸あるのみ、だね。アメリカじやあるまいし銃の被害に遭うこともなからうから、後は身振り手振りさ」

吉田は、悪戯つぽく微笑んで百合子を見た。

大丈夫ですかあ」

それは、やってみなければわからない。小さな民宿のようなところを選んで、その親爺とおかみさんの手料理で、地元のチーズとワインがあればご機嫌だね。言葉なんか通じなくても何とか楽しく過ごせるもんさ。スイス、オーストリア、ドイツ、そしてフランスと周り、ブリュッセルからアムスへ入る、そこから日本へもどる、どうかね」

わたしもですよね」

そりやそうだよ。この雄大でロマンティックな旅の相棒は君しかない。運転免許証持っているだろ」

でも、ペーパー・ドライバーだし」

「アー・プロブレムだ。一時間も運転すれば慣れる。わたしは助手席でワインでも飲んでる、ハッハッハッ」

吉田の笑い声が聞こえる。白い歯が浮かぶ。

そういう約束してくださったじゃない。二人でヨーロッパをクルマで回ろうって、おっしゃったじゃない。一度だけではないわ、何度も何度も。だからわたしは車で回る道順まで空で言える。わたしはいや。こんなことになるなんていや。わたし、聞いてなかったもん。二人で行くって何回もおっしゃってくださったじゃない。

自分のわがままばかりを回想していた百合子は、ふと、吉田はどのようにして亡くなったのだろうかと思った。ジェニファーの説明によれば、百合子の正夢と吉田の死亡時刻はほぼ一致している。

苦しかったのだろうか。でも、文庫本『越雪譜』は膝の上から落ちていなかったのだから、苦しんだとしてもほんの短い時間であつたろうと思われた。それなら、それは死という大変不幸な出来事の中ながら、少しは百合子のころを楽にしてくれた。

吉田の死が、まだ実感としてわからないが、百合子は自分と吉田の関係の中で、自分はひたすら吉田の愛を受けることだけであつたことを思う。燦々と降り注ぐ太陽の光の如く、ただ受けてきた。その深さも質の高さも知らぬままに。

吉田にとって百合子は、かつて心を寄せられていた下宿の娘の娘ということもあって、最初は、いささか好意を持ってという人為的なところもあつた。しかし、百合子と会うごとに回を重ねるうちに、百合子の一途さに惹かれていった。とはいえ、相手とは自分の娘ほども年齢が違う。また、将来もある。自分がその妨げをしてはならない。自分には、幸せな家庭を築くことができなかったという負い目もあつた。

百合ちゃん、どうしたの」

後ろから、両肩をポンと押えられて、吉田にそう言われたような気がして、はっと振り向いた。しかしそこには、ジェニファーが慈しむような目をして立っているだけだった。

予